
異世界旅行へ

梨緒（元ブライトハート）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界旅行へ

【Nコード】

N5415K

【作者名】

梨緒（元ブライトハート）

【あらすじ】

超チート・・・というかまあ決まりの力を自称神様に貰ったスズカ。

そんな彼女を待ち受ける運命は？ 作者「更新怠ってごめんなさい。そしてカオスです、覚悟してください。あと話が繋がってません。はい。まことにもうしわけありません。」 スズカ「いうことなのでよろしくね！」 作者「え」

o d e . s y o s e t u . c o m / n 8 6 0 1 y /
こ ち ら は 書 き 直 し 中 で す 書 き 直 し 中 の も の ↓ h t t p : . / n c

車の中（前書き）

短い&意味不&面白くない…の3拍子ですが、選んでくれてありがとうございます。何せ作者が12才のぽんこつなアホなので…こんな事しかいえませんが…

ありがとうございます。多めにみて読んでください。ですW W W
いや、マジで選んでくれてありがとうございます!!!

頑張りますので読んでくださいW

車の中

「ア、ア、ア……！異世界行ってみたい……
おかしさん連れてって……！」

「はあ？ うるせーだまつとれ。」

「娘にむかつてそれはないでしょう……もうちょっとさ、こう、
「い
つてみれば」とか「行って見たいね」とかさいってよお？」

「はいはい、いってみれば？　いったよ？」

「……はあ……私がわるうござんした。降参です。」

「よろしい。」

自分はお母さんの運転するK4で祖父の家に行く。

自分は異世界物小説の読みすぎで異世界小説依存症になってしまったかわいそうな女の子。

だけど……自分はポツチャリ系でその上、怪力ときたもので自分自身に参ってる。

そして：異世界を夢見つつ、恋を楽しんでいる乙女：なわけないか。自分は神藤スズカ。超男勝りで怪力&ポッチャリな、現在12才で中学校準備しながら春休みをエンジョイしている女の子。

毎日5時間以上はP C小説に明け暮れ、やめたと思えばD Sをし、やめたと思えば妄想ワールドかね、ファンタジーワールドに飛び立ってゆく。やっと帰ってきたと思えばまたP Cをつけ小説を書いている。

そんな毎日をしてお母さんに怒鳴り散らされて来た。

「異世界～ふんふん、いせか～～～いい～～～♪」

「い・い・か・げ・んにしろ～～～！！！」

「ひいつごめんなさい、ごめんなさい…」

何時間も車に揺られDSもやりはて電池がきれ、妄想しかすることがなくなり、たまに帰ってきては異世界行きたいと叫ぶ…自分が嫌になってくるぜ！ふはははは…生まれ変わったら異世界に生まれてやらあ…クフフフ

さあ、ファンタジーワールドへ旅立とうではないか！いつてくるぜえ…ZZZZ

「スズついたよ、おきなさい。」

「ふぁーい…へへへ、ギルドつくったぜ…フフフフ…」

「わかったから下りなさい。」

ほかの人からみたら自分は問題児であろう。

そんなこんなでことの始まりである祖父の家についたのだった…

森…だよね

祖父の家に無事に着いたスズカだったが、事、はこのあとおきる事をまったく知らなかったというのはあたりまえである。

チリーン…風鈴が声を出す…まだ夏じゃねーよ、じいちゃん。

はあ…暇だ。暇すぎる。着いてすぐゴハンたべて…それからずっと暇…しゃーねえ森にでも遊びに行こう。

「じーちゃん、遊びに行ってくる〜」

「気をおつけてなあああ…」

「あーい。」

よぼよぼなじいちゃんだな…まいいや。

森とは祖父の家の近くにある大きな雑木林の事。

生き物すべてがLOVEな自分にとって一番落ち着く場所。

生き物すべてとは…虫も、植物も、生きているもの、すべてが好き。

え、何毛虫？あ、うん、いけるぜwつかめる&かわいいとも思うよ？

…え女じゃない？ひどっそりゃないでしょ！しょうがないじゃん、好きなものはすきなもの！

…ま、まあ、森に来たわけですね。なにしょっ

ぴょろろピルルルルルル…ぴょろぴょろぴょろルルルル

なんのとりだろね。

あ、自分の夢は、牧場ヲシになるか、小説家になるかなんだ。

いいじゃん？なんかさ。

楽しいなら何でもいい。何だってやってやるさあ~~~~

いまの夢といたら異世界に行く夢をみる事かな。

夢だったって、寝ればみれるってモンじゃないし。

異世界生きてーな：

ーその願い我がかなえてやろうー

は？おお、まさか知らぬまに寝ちゃってたか：つねってみよう。いてて：あれ夢じゃない？

このパターンってよく小説にあるよね~~~~って自分！？

ースズカよ、その願いは異世界の住人によってかなえられる、感謝して楽しんでくるがよいー

あ、はい。

て：何自分いっちゃってんのー！？
てかお前誰よ！？

ー我はこの世界と異世界を管理するもの：いわば地球と異世界の神
：といえよいかのー

わーフフフ：神様に会ったー自分死んじやったな〜お母さんにまだ
お礼いってないや〜ははは

ー死んでなどおらぬ、生きたままじゃー

ふん、関係ないね、行きたいとは思ってたけど、ほんとには思っ

ない…けど、このチャンスを逃したらもう…もういい、いつてやろーじゃないのさ。

ようし、自称神さんよ、行ってやるから自分の願いをかなえてくれよう

—ふむ、いいだろう。—

んじゃーよろしく、えとお、まず、不老不死でしょ、に、ポツチャリからすつきり体系に、あと、ステータス全向上でしょー、あとは魔法、魔術を使えて、魔力を使っても使い切れないほどに。それから、その世界の知識も全部。あとは、あ、そうそう、剣術も全部、あとは…宇宙1？強くて忠誠心があってかっこいいドラゴンの使い魔頂戴。あとは…ううん、これぐらいかな？

—これぐらいの量じゃないぞよ…まあそれでいってくれるなら苦でもないわ。でわ、楽しんでくるがよい。—

じゃな—

視界が真っ黒に染まり、意識を手放した。自分、どうなるんだろね？
なんか楽しみだわあ

漆黒の女神（前書き）

すみません、更新が遅れました。
引越し（建て替え）してました♪

漆黒の女神

あーあーあー。

真っ暗。

どうすればいいの、自称神――！

シーン…

ああっなんで通じないのよ――っ…

もういいや、どうでもいい。死んでもいいや。

自分はいま、まさかさまに落ちてる。どっかに。

いや、ほんと何なのかね…どっかの小説みたいに穴に落ちちゃってメキヤ！とかはやめてほしいな…

ほんと勘弁してくれよもお…

……なんか寒気がするような…

グヴオオオオオオオオオ…オ…オ…オ…

「ひいつっつ！！！」

＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊
＊～～＊～～＊～～＊

いまは洞窟みたいなのの中だと思う。にしても・・

はあ、なんで自分あんな事したんだろう…

おかげでびびっちゃってるし…てゆーか、これで上下関係成立？

どうかな…ドラゴンって生き物の頂点に君臨するやつだね？

それも宇宙1と来たもんだ。まあ、自分が1番強いとも限らないけ

ど…

いまごろは、さぞむかついているでしょうね。

＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊回想

「ひいつつ！！！」

グギヤアアア

自分はいまあお向け状態でいて、なんか飛んでくる物体は自分めがけてスピード突進してくる。

グギヤアアアオ

自分の目の前にその物体はいた。

「せえい！！！！！！！！」

ガッキイイイイン…

グギヤアアアアアアアアアアアオオオオオオオ

物体の痛そうな声が響く。

自分は…手の甲ががいたい…

自分は、物体の鼻面めがけて裏拳をうったのだ。

その物体が自称神から降ろされてきた宇宙1のドラゴンだとも知らずに…

ドラゴンは、自分の放った、その名も“ウルトラ裏拳”をドラゴンが1番いやがる、鼻面にうけた。

ぽろっつ

「ん？」

暗闇の中に、一枚の分厚いように薄い何かが落ちていった。目を凝らしてよくみる。

「あ。」

グギヤア

それは、ドラゴンの鼻面の鱗だった。ドラゴンの鼻面は1部はげたようになっている。

あちやー…鱗…取っちゃったよ…ごめんねえ。

て…あれ？このドラゴンって…ましか！？

「自称神からの宇宙1ドラゴン？」

グ
ヴ
オ
オ
オ
オ

あゝゴメンナサイ、自称神。宇宙1のドラゴンの鱗はいじやった……ドラゴンもごめん……ってあれ？宇宙1のドラゴンなんでしょ？自分のドラゴンよりも強いって事……？

[illegible]

* ~ ~ ~ * ~ ~ ~ * ~ ~ ~ *

「はあああ…」

クギヤア

「なに。」

クギヤア

「何ー！？」

クギヤア

「だぁー！！！！喋ってくれば良いのに！！！！わけ分からん！」

グギヤア

あれ…ドラゴンが白い光に包まれて…

うおおお！！やべえ！

そこに立っていたのは、元がさっきのドラゴンとは思えないほど、顔の形が整っている青年だった。

ぶっちゃけ、美少年？髪色はドラゴンの背毛と同じ黄褐色。目の色もドラゴンと同じ金色。

それでいてどこか、男臭さと勇気をただよわせている。

「ねえ、君が神のいていた女性かい？」

「あーたぶん。」

「そう。君の名前は神藤スズカ：でいいかい？」

「うん、あんたは自称神がいった宇宙1のドラゴン？」

「そう・・・なのは分からないけどドラゴンだよ。僕の名前はヴォギッシュ。ヴォギーってよんでね。それと、さっきみたいに力任せに殴らないでね：？」

「あ：さっきはごめん、食われるかと思ったの。自分のみは自分で守れ：が自分んちの：あーなんかそういうのよ。自分は：スズカいい。スズカって呼んで。」

「わかった、スズカだね。にしても：髪の毛が黒いのははじめてみたよ。服装も黒いし：まるで漆黒の女神だね。」

「・・・はあ・・・」

漆黒の女神とか：いいじゃん、黒がすきなんだもの！

自分とヴォギーはどちらからともなく吹き出した。
とりあえず、ここから出なければ。
光の見えるほうに歩き出した。

魔術っすか？

えー、魔方陣？これは。

自分、なんか悪い事しました？

自称神に異世界にとばされ、ヴォギーとあって、洞窟から出ようとしたら、魔方陣があつて動けなくなっちゃった。ヴォギーは動けるみたい。だけど自分が動けないから動かないみたい。

「えーごほん、彼方達は神様に会いましたか？」

は？自称神ならあるけど…というか魔方陣のせいでうごけましょん。

ースズカ、スズカー

へ。あ、テレパシーだ。小説によくあるんだよね〜ここでっ…

『ヴォギー、この人たちに、喋れないから魔法？といってくれるって
いってくれる？』

『うん、わかった。』

ヴォギーは自分を見て頷く。そして、魔法使いらしき人にむかつて
話し掛ける。

「僕はこの人の使い魔。この人にかけてる魔法、解いてもらえないかな？もし、ダメだと言うなれば僕が無理やり解いてあげましょう。
その時は、天に召される人も居られるのではないでしょうか…」

うわ、ヴォギー…脅してるね。うん、脅してるよ。
ん、先頭にいる人が口を開こうとした。が、ヴォギーの光る体をみて黙った。

青年ヴォギーから、ドラゴンヴォギーに戻るため。そして戻った。

グヴォオオオオオ

1声。

「今解きますのでお待ちを!!!」

ふふっーん、いいモン見れたー♪えらそーな態度とってたやつが、焦ってびびって頭下げてやがんのくお、軽くなったあ…よし…

「あんたあ…何様？」

「へ？」

淡い水色のドレスを身にまとった姫らしき人にいった。
したら、「へ？」という答え方。

「あんた姫さん？」

「姫様にむかってあんたとは無礼もほどほどにっ…!」

「いや、いいのじゃ。…いかにも、わらわが第1王女のブリズ・ミユシリーじゃ。おぬしとは初じゃな。初で、ドンムブの魔法をかけてすまんな。ブリズと呼ぶがよい。」

ドンムブ？ドンムブって…チョコダン…？

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊
＊～＊～＊～＊～＊回想

ピコピコ、テレットテテレ～ン

「うしゃ！あがった！」

自分は自室でDSをしている。ソフト名は、シ〇とチョコ〇の不思議なダンジョン 時〇れの〇宮 だ。

自分は、チョコダンと呼んでる。長ったらしいしね！

キューン

「あ、わなっただあ～」

わなにはまってしまった。だせー自分。それもよりによって、モン
「ハウス」
ハウでドンムブとか：

ついてねーし：ああ！チョコ！死ぬな、死ぬな！

自分の操る、チョコ〇は隙間なくモンスターに囲まれていて、その
60パーセントはスピードが速くて厄介なクア〇ルだった。残りは
鉄巨人みたいなやつだし：興味ないから名前忘れた：てへっ☆

＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊
＊～＊～＊～＊～＊～＊～＊回想終了

という事は、チョコ〇な世界っすか！？いいねえ、チョコ〇さんに
会えるかも～

あ、でけたら、ヴォ〇グさんのほうがいいなあ：イル〇はいらん。
アムー〇のままでもいい。

はあ…ブリズかあ…厄介そうだな…

魔術っすか？（後書き）

チョコ○な世界になってます W W

チョコ○さん、好きなんです。かわいいと思うんですが… W W
ファイナルファンタジーにもいますよ ^^

ぽんこつ姫

はあ…

じいつ

はあ……

じいつ

はああ……

あ、いま知らないフリしました？そのアナタ。

ちよつとどうにかしてくださいよ、ねえ。ねえってば！！

じいじいじ

はあ……

自分はいま、姫さんらしき人に、めっちゃめっちゃ×10ぐらい、見つめられてる。

めっちゃ、うざったい…これもまたドンムブかけられて動けないし…
唯一の救いなのがヴォギー…なんだけど、龍殺しの網にかけられてるし…

『死んだらダメだよ』

『はずせるけど、はずせるけど…時間かかる。もうやってるけど…』

『あ、はずせるならいいや、まあガンバ。』

『ひどくない、それ？』

『ひどくない、ひどくない。』

ぶっちい…ん ばさっ

お、ヴォギーが脱出。やつちゃえー。

ヴォオオオオオ

メキヤ…

おえっ ロゲロゲロ…気持ちわる…

固まってる自分の前で、龍殺しの網をかけたやつが、ヴォギーにつぶされた…

そりゃあ、もう…ぶちゅって感じ…

ああ！もういい。これから先、人が殺されるところ&殺したりしなきゃならなくなるだろうし…

なれねば！なれてしまえばどうでもいい…よくないな…そこらがむずいがかんばろう、ウン。

「な、なな、なにをする！」

噛み噛みい…ヴォギーに話し掛けている。あ、人型ね

「え、なにって僕を殺そうとしたから殺しただけですよ。だって初

対面で龍殺しの綱って酷いじゃないですか。」

ヴォギー…お前の方が酷いと思うんだけどね…つぶしちゃったし。ひき肉状態になってるよ？

「まあ、僕に逆らおうとしたって無駄ですよ、なんたって僕は、宇宙1のドラゴンであり、異界の住人スズカの使い魔ですからね！」

ヴォギー……なに勝手なこと言ってた……というかなにばらしてるんだよ、異界ってとこと自分の名前……と、宇宙1ってとこ！

『ヴォギー君、きみ何をしてくれたのかね。』

『え、何って話したんですよ？』

あ、やばい、切れそう……何も事の重大さをわかってねえ……

ブツツ！プツツじゃないよ、ブツツだよ。

あ、オマケにドンムブ解けた〜

「ヴォギー、何してくれとんじやあ!!!!!!!!!!!!!!」

「怒らんといてー」

「……」

「まあ、スズカよ……？ 怒らなくてもいいじゃないのか……」

「るせー初対面にドンムブかけたぽんこつ姫！」

「と…とんこつ…わらわはブタであるか…：うう…」

なに間違っちゃってんのー！？とんこつじゃなくて、ぽ・ん・こ・つだよ！！！！

近衛兵…みたいなひとたち固まっちゃってるよ。

ヴォギーは自分から逃げてる。人型のまま走って。頭まわってねーな、龍になれば早いのにねえ…

ブリズはめそめそないてるし…

よし、こんどからブリズはぽんこつ姫って呼ぼう。

召喚？なにそれ美味しいの？

「はあ あ！！！！！！！！？？？？？」

ここは城の一角にあるほんこつ姫の自室。

ぽんこつ姫がトンこつと聞き間違えてからおこったある事を終えて強制的に城につれてかれた。

面度かつたなあ……

[illegible]

「ヴォギー、今日はそれぐらいで勘弁してあげるよ。次、普通に自分が異界から来たとか、名前言ったら…どうなるんだろうねえ？」

「はいっゴメンナサイ!!!!!! 許してください、次からは気をつけます。」

「次から気をつけるじゃなくて、もうしない事、オーゲイ？」

「ハイ！」

ヴォギーが素直になっているのは、龍に戻らせて、鱗がはがれているところを爪で引っかいたから。

痛いだろうね：クフフ

自分とヴォギーのやり取りを見ていた人たちの会話。

「宇宙1つてったよな。」

「ああ、あの女異界から来たっていったよな。」

「あんな黒い髪のはじめてみたぜ。」

「目も黒いよな…漆黒…しかも服装も黒だしな。」

「てゆうか、宇宙1のやつが、あんな女にびびってるってことは凄
い強いんだろうな、たたかってみてえ」

「わらわは…わらわはブタか…豚のように見えるのか…：ううう・
…」

こんな感じだった。

聴いてる最中、めちゃくちゃイライラしたんだけど。
ぽんこつ姫はまだ泣いてるし。

「ねえ、あれなに？」

自分は近くにいた近衛兵にきいた。自分の正面、ぽんこつ姫たちの
背後から土煙を立て、音を出さずに走ってくる変な物体。

「わああ！！！！！！火竜だああああ！！！！死ぬぞ、にげろお！
！！！」

「わああああ！！！！！！たすけて！！！！」

見事な慌てっぷり。

火竜らしい。あ、竜だね。ぬ、今思ったんだけど、チョコダンに出
てくるやつみたいだわ。ようし、やっちゃおう。

自分は火竜が近づいてくるのをまつ。

「スズカ…どの逃げないところされるぞ！」

1人の兵がさけんでくれる。

うれしいなあ、だけど…

「自分はお前らみたいに気が弱くねーんだよっ！！こんのへっぴり腰どもめ！」

言い放ってやった。火竜が近づいてきた。

戦闘モードじゃぼけえ！

あれ、魔法とか使えたっけ？やばWW

フッフッフッ

お。

自分の頭の中に魔法の呪文とかやり方とか効果とかが浮かんできた。よし、やってみよう、何事にもチャレンジあるのみ！

「封印されし死の爪、『デット・クロウズ』！！」

いってみた。自分の手元が光りだす。

光がおさまって見てみると、なんと、チョコ○につける爪みたいなのがついていた！！

きりつけて攻撃する魔法。というか魔法の爪？
攻撃じゃあ！！んなろー！

「せいやあ！」

バシュ！

ドロっ

グルルウ！

思いっきり斬り付けた。血がだらりと出てくる。

あんまりきいていないようだ。が、その切り傷が発光し始めた。徐々にくろく、いや、深紫？に染まっていく。

ぐががああああ

火竜が悲痛な叫び声を上げる。

やがて頭からつま先まで黒く染まるとそこで体が爆発した。腐らせる魔法の爪らしい、くさっているにおいがした。

「「「「くさ！！！」」」」

「わかってるよ！」

爆発のあとは、竜が浮かんでいたところに、内臓と思われるものが数個落ちていただけだった。

その内臓らしきものは黒くなっていなく、みずみずしかった。

「おお、火竜の内臓だ！売れるぞ！」

兵のひとりが言った。

「え、まじで！自分倒したんだから貰うかんね！」

「召喚された事に変わりはない。に、よってお前はわらわのものになるのじゃ、心から感謝にひたるがよい。」

ぶっ
ちん
…

[illegible]

最近キレイまくりだな、自分。

「ううっそれは酷いんじゃないのか？」

「はあ？ このくそばばあ、自分はおまえのものじゃねーんだ、自分は自分のモンなんだよ！」

「うううっわかったから、くそばあはやめてくれない…」

「ようし、それでよろしい。で、お金のことおしえてよ。」

やばい、最近キレまくりだな……

召喚？なにそれ美味しいの？（後書き）

ちよいきゃら崩壊？

いや、これでいいんです。

お金

ブリズサイド

「ようし、金のことをはなそうかの」

「ねえねえ、ぽんこつ姫、この内臓、早くしないと腐っちゃうんじゃないの？」

「あー心配ない。では話すぞ」

わらわはどうしてぽんこつ姫と呼ばれなくてはならぬのじゃ…

「えーと、まず、1番価値が低いのはメリス銅貨、次がフリス銀貨、1番価値が高いのはミュシリー金貨じゃ。銅貨、銀貨、金貨は、10枚集まると次の硬貨に交換できる。これでどうじゃ？」

「ふーん。じゃあ、ギルドはある？」

「この王都の中にたくさんあるぞ。ギルドの説明もほしいか？」

「あーおねがい。」

「うむ。ギルドは、まず備兵ギルド、商人ギルド、伐採ギルド、冒険者ギルドがあつてな、備兵は護衛やら王都が依頼を出す事があるの。だから実力がないと入れない。商人ギルドは売買をしながら、売り物を違う王都に運んだりするギルドだ。伐採ギルドは、最近冒険者ギルドと一体化しつつあるの。魔物、魔獣の伐採、魔物、魔獣が多く出る地帯の警備…などだな。1番忙しいギルドでもある。冒

険者ギルドは伐採もあり、護衛の仕事もあり。一番儲けがいいギルドでもある。あと、ギルドはそれぞれパーティを組んだり1人でもできる。1人だと実力がある人が多いな。パーティだと実力がある人を中心にして仕事をしている。まあ、実際に行けば分かるじやろう。」

「ながいねえ…まあ、大体はわかったよ。ありがとう、ぽんこつ姫。」

「う、うむ…」

ぽんこつ…なんか慣れてしまったのう…

「んじゃ。もういくね。ばいばーい」

「もう行くのか？」

「内臓腐るかもしれないし。んじゃね、また顔出すわ。」

「うむ、気をつけてな」

スズカはそういうと去っていった。

にしても、ぽんこつ…わらわのあだ名なのかの？

最初はしっくりこなかったがなれてしまったのう…

ブリズサイド終了

さってと、ギルドでもさがしますかあ

『いこう？.』

『そだね、いこうか』

…ほんこつ姫…なんか変だったような気がする…

お金（後書き）

なんか短かったですへへ；；

ルーク・フローン(前書き)

短いです…^ ^;;

ルーク・フローン

「誰か、冒険者ギルドのある場所知りませんか？」

自分は町を歩きながらたずねあるいていた。

いないなあ…とおもって宿を取ろうと宿屋に行こうとしたら、後ろから声をかけられた。

「俺、ギルドの場所しってるよ。」

少年だった。赤いハンチング帽をかぶっていて、自分よりも背が結構高い。顔もなかなかk…ごほん。

だけど少年って雰囲気だった。

見た目的に、15歳くらいかな？

「あ、教えてくれませんか？」

「いいよ、ついてきて。」

少年はくると向きを変えると自分が進んでいた道の正反対に歩いていった。

自分も慌てて追いかける。

「俺はルーク・フローン。俺も冒険者ギルドに入ろうと思ってたんだ。」

「へえ、自分は神…スズカ・神藤。スズカって呼んでね。」

「スズカ…変わった名前だね…あ、いや、いい名前だと思うよ?」

慌てて訂正、面白い人だなあ：

「で、なんだけど、よかったらさ、俺といっしょにパーティくまな
い？」

「自分、あんまり知らないよ？」

「それでもいいよ、1人だと寂しいかな〜って。どうかな？」

どうしよ、組んだ方が面白い：よね。

「いいよ、組む。」

「よかった、スズカがリーダーでいいからねっ、ギルドにいつて登
録しよう。」

「うん、てゆうかルーク：って何歳？」

「ん、俺は18だけど？スズカは？見た目的にオトナっぽいけど：」

「自分は12才。6才離れてるんだね〜」

「え、そんなに子供っぽく見えないよ！？」

あー、あれだ、自称神のおかげかな？

「そう？じつはものすごく男勝りだけど：嬉しいかも。」

「へえ、男勝り：そんなふうにも見えないけど：まあ、とりあえず

ギルド行こう。」

「うん、そだね！」

自分とルークは話をしながら道を並んで歩いていった。

ギルド

テクテクテク：

「ここだよ。ギルド。」

自分の目の前に酒屋：ではないけどそれっぽい建物があり、ルークがそれを指差していた。

「しぶいね。」

「うーん、かもね。」

2人して納得してから中へはいっていく。

中はがやがやしていて、入ってすぐのところに掲示板、それも特大サイズが置いてあり、紙がたくさんはられていた。モンスターらしき写真もはってある。

「まずは登録しないとね。」

自分が掲示板を見ているのにきづいてそういった。

ルークはカウンターへいき、自分を見る。

登録する場所のようみたい。自分もルークのいるカウンターの隣にいった。

「あの、ギルド登録したいんですが。」

「登録ですね。では、こちらの紙に書いて私に渡してください。」

カウンターのよねえさんは紙とペンをわたす。

あれ：異世界って文字読めないはずんだけどな。小説だと。スラスラ読めるし、ジャパンとほぼ変わらないみたい。

紙には、名前を書く空欄と、誕生日のところをペンで囲むような空欄があった。

ささっとかいてよねえさんに渡すと、すぐコピー？をして渡した。

「これはそっち側のカウンターで、1人かパーティかを登録してもらうときにつかう書類です。では、アナタが無事に任務を終えられますように。」

祈り？祈りですか？

んーあれだな、自分が好きなパワーストーンの店でも、石買うと祈るんだよね。『パワーストーンがアナタに幸福を運んでくださいますように。』ってね。

「スズカ、こんどはあっちのカウンターだって、いこう？」

「え、あ、…あ、うん。」

「？」

「なんでもないよ！」

自分は考え事をしていて慌ててしまった。

ルークは頭にはてなマークを浮かべている。

まあ、いこう。とりあえず。

カウンターにいくと丸顔のよねえさんがいた。で、話し掛けてきた。

「こんにちはー、書類はありますか？」

「はい、これですよね」

「あ、どぞ。」

自分とルークはさっき貰った紙を渡した。

「パーティを組むんですね？では、こちらの紙に書いてください」

紙とペンをまた貰った。自分が。

えと、なにになに…

パーティメンバー氏名、パーティ隊長および副隊長、パーティネーム、パーティ誕生日、目標…目標？ふむ、ルークに任せよう。

パーティメンバー氏名…スズカ・シンドウ、ルーク・フローン

パーティ隊長および副隊長…隊長…スズカ・シンドウ、副隊長…ルーク・フローン

パーティネーム…どうしよ。

「パーティネームいいやつある？」

「思い浮かばないよ…スズカきめて。」

むー、どうしよ。あ、そだ♪

パーティネーム…ブルームーン

よし、いいかな？

パーティ誕生日…今日いつ？

「ルーク、この先かけ。」

「え、俺!？」

「隊長命令だよ？」

「う…かして。」

自分はルークに任せた。

ルークは自分をにらんだ。

自分はにらみ返した。

ルークは目をそらした。

ハッハッハ…かった。

そして、ルークは紙とペンをおねえさんに渡すと自分の後ろに下がった。

『ねえねえ、僕のこと、忘れてない?』

『あんたは使い魔、だからいいの。』

『ふーん。』

おねえさんがはなす。

「ブルームーンですね、では、隊長さん、この書類をなくさないようにしてくださいね〜」

と、渡してきたのは、上にパーティ重要書類と書かれた紙だった。なんか…めんどくせえ…ルークに渡しちやおう。

「ルーク、もって。」

「ええー、俺〜?」

「そう、俺。」

「いいように使ってえ〜」

よし、無視。

「あ、これは〜メンバー内で連絡がとれるようになる、まあ、念話ですね〜、指輪をはめているときにその相手に心の中から話し掛けるんです〜、ではどうぞ。ブルームーンが楽しく、安全なパーティーになりますように。」

指輪を2つ貰って…祈られた。祈られるの、なれないわあ…
とか思いつつ指輪をはめる。なんだかな、変なかんじ。とゆうか眠い。

「ねえルーク。宿取らない?眠くて。」

「あーうん、こっちだよ。」

自分達はルークの案内のもと宿に向かった。

感謝とお礼とコメント

ブライトハート「えー、ただいまより感謝とお礼とコメントの会始
まりまーす。」

スズカ・ルーク・ヴォギー「初まりまーす。」

ブ「え、感謝とお礼は同じじゃないかって？ いいんです。私バカだ
から…」

ス「え、そうなの！？」

ブ「そうなのさあああ…（魂抜けた…）」

ス「あぁっだめだよ、まだ完結してないでしょう！」

ブ「はうつつわすれてました。ゴメンナサイ。」

ル「こんな二人はおいといて、とりあえず…」

ル・ヴ「感想を書いてくださった『A r i s h i a』様、お気に入
り登録してくださった皆様、本当にありがとうございます。」

ブ・ス「あ…ありがとうございます！！！！」

ブ「…感想や、お気に入り登録してくださった人数の欄を見ると、
ガンバろうって気持ちになります。…まあ、頑張ってるのは私の頭
の中の妄想ワールドかね、ファンタジーワールド何ですけどね。私
が頑張っている…といえば、キーボードをうっていることですかね。

1日に何話も投稿してみたり。その間、ダブルワールドは休む暇なく、物語を作ってくれているのです。」

ル「へえ、そうなんだ、俺、今始めて知ったよ。」

自称神「これ、我を忘れておらぬか？」

ブ「…誰だっけ？スズカ覚えてる？」

ス「…いや、こんおっさん初めて会いました。」

ル「俺しらん。」

ヴ「…僕は覚えてるけど。」

自「おお、ヴォギッシュ！覚えていてくれたか！嬉しいぞい…しかし、ルークは分かるけども、作者と主人公が忘れとるとは…」

ブ「あー！…！…！…なんだっけ？」

自・ヴ「ぶっ！…！」

ス「あっあっ…えーと…あ！自称神だ！」

ブ「…あ！…！そうだったわ。あむない、あむない。」

ル「自称神って？俺死んだ？もしや、ここは天国？」

自「…死んでなどおらぬ。スズカも同じ事を聞いていたよのお…」

ぽんこつ姫「ちーと、またんか、わらわのことも忘れて居るだろう！」

ス「あ、ぽんこつ姫。」

ブ「ブリズじゃない、どうしたの？」

ぽ「…さっきからずっといたぞ？気づかなかったのか？」

ブ「…ごめん。きづかんかった。」

ル「だれ？」

ス・ブ「えーと、ブリズ・ミュシリー…ミュシリー王都の第1王女だよ。」

ル「…へえ。2人はしってたんだね？」

ヴ「僕もね。」

ル「何で教えてくんなかったんだよっ！ま、興味ないけど。」

ぽ「おいしいっ！」

自「我はそろそろ帰るぞい、ブライトハート、早く続きを書くのじやぞ。」

ブ「いえっさー！！！」

ブ「さて、ぽんこつ姫はおいとお開きにしましょう。」

パこんっつ!!!!

ブ「いたゝつい、ぽんこつ姫、こんどからあんた、影薄いぽんこつ
ってよぶけいいの!?!」

ぽ「うゝやめてくれ。」

ブ「作者はそれほど権力があるのよっふはは!!」

ル・ヴ「俺たちでお開きにしてしまおう。では、これからも楽しみに
しなくてもいいけど、よんでくださいね!これで第一回感謝とお
礼とコメントの会を終了します。」

ブ・ぽ・ス「ゝ終わります。」

感謝とお礼とコメントの会終了

ブライトハートサイド

なんでズリズのせいで挨拶に遅れたんでしょうかねゝ

感謝とお礼とコメント（後書き）

と、いうことで、これからもよろしくお願いいたします！

「異世界旅行へ」一同より。

戻っちゃった？

自分とルークは宿についてそれぞれへやを貸してもらった。だあって、まさか同じ部屋になんてなれるわきゃねーだろ！！！
そうおもうよね？ま、ルークのお金だけどね！

「スズカ…なんでさっき換金忘れたでしょ。」

「あ。」

「内臓…火竜のは5枚、フリス銀貨もらえたのに…それに銅貨3枚で宿1部屋取れたから銀貨1枚でおつりも出たのに…」

「明日行きます、それでいいでしょ！」

「…銅貨3枚、ちゃんと返してね、もうお金ないんだからさあ。」

「はいはい。んじゃ、部屋かえって寝るから。ばーい。」

「オヤスミ〜」

ガチャン、バタン。

自分は自分が貸してもらったルークの部屋の隣に入っていた。まあ、なかなかきれいな宿屋だったしね、中もきれいだったよ。ベッドがあって、…ふとんは生地がよくないみたいだね、なんだかな。まあ、とりあえず寝ないと…

自分はふとんの中に入って明日がどうなるか思いながら眠りについた。

ぴゅるるゝゝるるるゝゝ

きゅんきゅんきゅん…きゅんきゅんきゅん…

トリのさえずる音が聞こえてきた。

ふとんを引っ張ろうと足元あたりに手を伸ばす。

が、布団はなく、自分は森の中に寝ていることが分かった。

「あれ、宿…じゃなかったっけ？」

そこは、日本にいたときの、祖父の家の近くの森の中だった。

「夢…だったのかな…異世界にいったと思ったんだけどな…ルークもヴォギーも夢の中か…ザンネンだったなあ…」

夢だとおもい、とりあえず祖父の家に帰る事にした。

森をあるいていって、祖父の家につくと、お母さんしかいなかった。お母さんは慌てたような感じでまわりをきよろきよろしている。ふと、窓の外を見て、一言つぶやいた。

「…スズカ…どこ行っただの…？」

へ？ここにいますけど？

「お母さん、自分、ここにいますよ！」

いうけれど、聞こえていないみたい。

どうして？さっきのは、異世界のはゆめだったんじゃないの？

「ふふふ、これは、今の日本の様子だ。」

「あ、自称神。あれ？さっきのは夢なんじゃあ…？」

「ちがう。こっちが夢なんじゃ。声はかけられないが、手紙ならかけるようにしておいた、書くがよい。もうこっちに夢でもなんでも来れなくなるからのう。」

「あー…：そうなんだ…自称神…いや、神、来させてくれてありがとう。んじゃ、書いてくる。」

自分は、祖父が手紙のびんせんをおいてあるところを知っていたのでそこに向かった。

食器棚の下の方のひきだし。ペンとびんせん、封筒を取って、フロ―リングの上でてがみを書き始めた。

親愛なるお母さんとじいちゃんへ

いま、自分は異世界にいます。

日本へは、神様が夢の中で来させてくれました。

お母さん、じいちゃん、探してくれてありがとう。

でもね、もう見れないの。これないの。

お母さん、自分を生んで、育ててくれてありがとう。

じいちゃん、自分と遊んでくれてありがとう。

2人には、お父さんにも、とっても感謝しています。

自分は、夢見ていた異世界に、召喚される形で行きました。

友達もできました。楽しい事だらけです。

はじめてみるもの、見たことあるようなものまでさまざまあり、自分の心が高鳴っている事が感じ取れました。

異世界からは、さつきも書いたように、もう来れません。お母さん達の姿も見えません。

でも、これないならあっちで楽しく過ごしていこう、そう思ったんです。

異世界では、危険な事もたくさんあるけれど、友達といれば大丈夫だと思います。

それに、神様にチートな能力つけてもらったしね。

だから…もう心配しないで下さい。

自分を信じてください。

いままで、ありがとうございました。

神藤スズカ

書き終わってふと頬に手を持っていくと、涙が流れていた。

ふふ、知らぬ間に泣いてたみたい。

「スズカ。書き終わったかの？」

「うん。これおいてくる。」

自分は手紙を、お母さんがいたところの近くにある、ちゃぶ台におき、

神のところに戻った。

「よし、戻るが、もういいんだな？もっていくものあるか？」

「あ、お母さんとじいちゃんの写真、もっていける？」

「もっていけるぞい」

自分は写真たてからお母さんとじいちゃんと自分がうつっている写

真をとって、神の所に戻った。

「それだけじゃな？」

「いいよ。」

「ふむ、ではもどるとするか。」

「うん、おかあさーん!!! ありがとうございましたー!!!」

「はいくぞよっ！」

自分は、お母さんにむけて叫ぶと、景色が変わった。

お母さんサイド

「おかあさーん!!! ありがとうございましたー!!!」

「え？ スズカ？」

私はスズカの声が聞こえたような気がして、ドアの向こうを見たが、だれもいなかった。

ちやぶ台に視線をもつていくと……一通の手紙が置いてあった。いつの間においたんだろう？

私は、手紙を手にとって裏を見てみると、お母さん、じいちゃんへスズカより、と書いてあった。

急いであけると、1枚のびんせんが入っていて、よんでみた。

親愛なるお母さんとじいちゃんへ

いま、自分は異世界にいます。

日本へは、神様が夢の中で来させてくれました。

お母さん、じいちゃん、探してくれてありがとうございます。

でもね、もう見れないの。これないの。

お母さん、自分を生んで、育ててくれてありがとうございます。

じいちゃん、自分と遊んでくれてありがとうございます。

2人には、お父さんにも、とっても感謝しています。

自分は、夢見ていた異世界に、召喚される形で行きました。

友達もできました。楽しい事だらけです。

はじめてみるもの、見たことあるようなものまでさまざまあり、自分の心が高鳴っている事が感じ取れました。

異世界からは、さっきも書いたように、もう来れません。お母さん達の姿も見えません。

でも、これないならあっちで楽しく過ごしていこう、そう思ったんです。

異世界では、危険な事もたくさんあるけれど、友達といれば大丈夫だと思います。

それに、神様にチートな能力つけてもらったしね。

だから…もう心配しないで下さい。

自分を信じてください。

いままで、ありがとうございます。

神藤スズカ

異世界？あの子がいつもいっていた世界？

そう…楽しんでるのね…なら、よかった。

スズカ…元気だね…

そのときにお父さん（おじいちゃん）が帰ってきた。

黙って見せると、手にとってよんでいた。
涙を流しながら。

お母さんサイド終了

換金

自分の手を見てみた。

そこには、お母さんと、じいちゃんと、自分の映った写真。そっか。夢でもどったんだったよね。

もうもどれないんだな…

よし、ネガティブ思考だめだめ、いつか会える。そうそう。今日は換金しに行かないとね。

あ…服…いっか、昨日のままだし。今日買いにいこう。

「ふああゝゝあ。」

あくび1つ。ベッドから立ち上がって、そなえつけのトイレに行ってから洗面所に行って顔を洗う。

髪の毛を梳かしていると、こんこんと、トビラをノックする音が聞こえた。

「俺だよ、ルーク。入ってもいい？」

「はい。」

ルークが入ってきてテーブルの上にあったものをしげしげと見つめる。

写真。

「これって…スズカの家族の写真？」

「そう。」

「見かけない場所だな・・・」

「教えてほしい？」

「そうだね。いい？」

「いいよ、そこに座って」

自分は、テーブルの横にあったいすに座るようにいった。
自分も髪の毛を梳かし終わってベッドの方に座る。

「自分はね…異世界から来たの。」

「え？」

「異世界。地球という星の、日本っていう国から来たの。自分はそこで生まれ、そこで育った。じいちゃんの家に行ったときに、森で遊んでたら神に言われてここに来た。そして、ルークに出会った。あ、ヴォギー。ちよっと出てきて。」

自分はそういうと、ヴォギーに出てくるようにいった。ヴォギーは空気の中に溶け込むようにして目に見えなくしていたんだ。ヴォギー…人型が現れると、話し始めた。

「僕は、スズカの使い魔のヴォギツシュ。ヴォギーってよんでね。僕は、今こそこの姿だけど、ほんととはね…」

ヴォギーが光に包まれて龍の姿に戻る。

「ほんとはこの、龍の姿だから。よろしく。」

「あ、ああ。」

ルークはビックリしたように返事をする、自分の方を見た。
ヴォギーはその間に人型に戻ってから、空気に溶け込み、見えなくなっていた。

「それで、その女の人は、お母さん、隣の男の人は、おじいちゃん。真中が自分。姫様……この王都のブリズ・ミュシリー第1王女に召喚されてきたの。でも、自分は使い人なんてやだから、姫さんとは友達って事で、……まあ、そんな感じ。」

「ブリズ王女と友達って……おいおい。まあ……ヴォギーもよろしく。スズカには……改めてよろしくだな！よし、今日は換金に行くんだよ、準備はいいかい？」

「うん、ばっちり。」

自分とルークは立ち上がって宿屋を出た。
あ、

「換金所って、ギルドだっけ？」

「そうだよ、換金したら、服装を整えに店にいったから以来を受けに行こう。」

「おっけー。」

ギルドに行ってから店行ってギルドだね、オツケーオツケー

しばらくしてギルドについた。昨日と同じばしよで、中に入っている。

「あっちのカウンターが換金所のカウンターだよ。俺はここで待ってるからいつてきなよ。」

「あーうん。」

1つのカウンターのとこの上に、換金所と書いてある。自分は、受付の兄さんに向かっていった。

「これ、換金してもらいたいんですけど。」

そういつて、内臓をカウンターのところに出した。

「はい、これですね、5フリスになります、どうぞ。」

兄さんは、内臓を受け取って5枚、銀色に光る硬貨を出してきた。それを受け取ってルークのところにもどる。

「んじゃ、次は店だね。」

「あとで3メリス渡すから。」

「あ、やっぱいらないよ、依頼受ければすぐたまるし。まあ、多分だけど。早く店行こう。」

ルークは返事を待たずに出て行った。自分も追いかけて隣に並ぶ。黙々と歩いていくと、露店をしている人がぼちぼちと見えてきた。

「ここから商店街だよ。何が売ってるのか店前に置いてある商品で大体わかるよ。今日は俺も一緒に行くけど、次からは1人のときもあると思うから。んじゃ、行こう。」

自分は：とりあえず、服がほしい。この世界の服装は日本とそんなに変わらないが、ちょっと浮いた感じになってる。

「服ほしい。」

「あーじゃあ、安くていい生地してる店あるからついてきて。」

商店街に入っすぐの所にあった店に入っいった。男物と女物のが区別できるように分けられている。ルークがいうとおり生地がいい。

ルークは男物の方に入っいった。

「む。」

自分は入り口あたりによさそーなふくあるのを発見。

しかもセット。上はさらさらした黒いチェックのワイシャツで、下はジーパンのような生地のズボン。

よし、これかおう。値段は：2メリス：高いのかどうか分からんが、サイズもぴったりそうだし、セットだから買う事にした。もう一着ぐらいあつたほうがいいかな：

ぶらぶら歩く事にする。む、またもやスズカセンサーが何かを発見しました！

それは上下が白っぽい色のジャージみたいなやつだった。腕のところあたりに、黒いラインが入ったやつだ。ふむ、買おう。値段は：3メリスだね、これで：あとは下着かな？

下着コーナーは：あつた、下着はてきとーで良いよね：あ、でも：

あ、いいや。んじゃ、これと…これと…これと…これ…でいいかな？
よし、会計を済ましちやおう。

「これ下さい」

「あいよ。んーとね、1フリスと1メリスだよ。」

「はい。」

「あい、またきてねえー」

おつりと服を受け取って店の外に出た。
ルークが待っていた。

「いいモンかえた？」

「うん。」

「んじゃ、次はバックと財布、見に行こう。」

「あーそっか。うん。」

忘れてた。お金は今のところ全部ズボンのポケットに突っ込んであるが、内臓はビニール袋みたいなやつに入れてたからなあ・・・服もそうだし。

商店街の奥の方に行くと、店前にバックが並んでいる店があった。

「ここが商店街で一番うれてるバックやだよ。」

らしいね。自分・・・リュックがいいな。邪魔くさくならないしい。

お、リュックサック発見。やっぱり、黒。と、白のリュックで気になるお値段は・・・6メリス。
いいや、買っちゃまえ。

あとは財布だね。店前にはないから中に入ろう。

がらがら・・・ピシャン。

ぽんこつ姫いたし・・・服装はドレスではなく、一般人ふう。やっぱり、姫さんて大変なんだねえ。
よし、無視方針で。

「ルーク、ルーク、ブリズいたけど、無視方針で。」

「え、え？まずいんじゃない？」

「大丈夫、一般人に成りすましてるみたいだから。」

そういつて自分は中に入っていく。

財布コーナーは・・・あった、いろんな柄の財布が並んである。
全体を見ていくと、灰色っぽい黒に、シルバーのラインが入ってシルバーのリングのストラップがついたさいふを見つけた。ほかにも見てみたが、よさそうなのがなかったからそれにして、会計にいき、1フリスと2メリス払って買った。外に出ると、ぽんこつ姫こと、ブリズがいた。

アホはあなたです IN、スズカ

「スズカ、なぜにわらわを無視するのじゃ？」

ぽんこつ姫・・・なんで待ってるんだよ・・・このへたれめ。

「んー、あんた誰？なんで自分の名前しってるん？」

知らないふりを試みよう。

「わらわを覚えていないのか、ブリズじゃ！城に来たじやろう。」

はぁ・・・めんどくさい。

「あーごめん、急いでるから。あと、ぽんこつ姫、あっちでなんかにらんでるよ。」

そう、後ろに執事だと思うが・・・自分たちをにらんでいた。

「気にしなくてもよい、さあ、城にこい。」

「いーやーだー!!」

だって、ぽんこつ姫・・・話長いもん。

「ううつ、そんなにわらわのことが嫌いなのか・・・」

「あんぽんたんはやなあ。」

「あんぽんたん？とやらはなんだ？」

「あんぽんたんは、バ・カってことだよ、ぽんこつあんぽんたん姫。」

「・・・そうか・・・嫌いなのかな。もう話し掛けないようにしよう。」

「そういうのがあんぽんたんなんだよ、ぽんこつあんぽんたん姫。」

「嫌いではないということか？」

「どうかなあ？ま、急いでるから。」

「ま、待つのはじゃ、そっちの男はだれじゃ？」

「ぽんこつ姫、あんた姫だから何でも知る権利があると思うな。んじゃ、またね。」

ぽんこつ姫のところからルークを引っ張って後にした。

はぁ・・・いらん事に首突っ込んでくるし、時間取らされるし・・・なんなんだ、あの婆かは？

てゆうか勢いであんな、「ぽんこつ姫、あんた姫だから何でも知る権利があると思うな。」なんていっちゃったZE☆ふははは！

ギルド行こう。

「依頼受けにいこ！」

「あ、うん。」

悩んだような様子だったが気にしない、気にしない。

スズカたちはギルドへの道を歩き始めた。

その後ろから殺気を放っている事に、スズカ、は知らないのであった。

アホはあなたです IN、スズカ（後書き）

みじけー・・・

やつとこさ依頼を受けに

はああ・・・

「ねえ、何であの依頼受けちゃったんだろうね？」

「ぜえ・・・ぜえ・・・ふう・・・さあね。」

「自分達、金に目がくらんだのかな？」

「ぜえ、ふう、そうかもな。片付けちまおうよ、こいつら。」

ルークが刺したものは、野原の真中にいる自分達にむらがるように
囲む、リトルウルフ・・・

小さく、体力もないが、素早さはどの魔獣にも劣らない。

なぜ、こんな事態になったのか、回想してみよう。

＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊
＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊回想

あのあと、自分達はギルドにいき、依頼を受けるに当ってカウンタ
ーの説明を受けていた。

「えーと、まず、ギルドのパーティ、もしくは個人でも、ランク、
というものがあるんです。1番低いものがGランク、1番高いもの
でSSSランクです。ランクの高い物からいくと、SSS、SS、
S、A、B、C、D、E、F、G、という順になります。GからF
までは、ほぼ、同じランクですが、それから上は、けた違いに違う
といって良いでしょう。Gにもなれない人は、その下のHランクで

練習場で、戦う練習をしてからGにあがるといった感じですね。FとEでも、3倍違うと思います。あ、そうそう、AとSSSは、城からの依頼や、貴族からの依頼が多く、強制的にやらされる事が多いですね。・・・ランクの説明はこれぐらいでしょうか。質問などはありますか？」

長いけど・・・なんか分かったけど・・・

「SSSってどんなの？」

「そりゃあもう、SSでも勝てないぐらいでしょうか。SSSは、おもに、この世界にいて、とっても凄い功績の魔術師さんや、魔法使いさん、あとは、竜使いさんなどがいますね。まあ、竜使いさんは、ずっと前に歳で亡くなってしまっただけからは、もういないですね。ハイ。」

竜使いか・・・かっこいいかも（キラリンっ

歳・・・か。あ、自分って不老不死じゃ～～ん！いけるぜ、いける。あ・・・ルークはふっーの人じゃん・・・て、なんか自分、変なことを考えたような・・・（照

「質問はほかにありませんか？」

「ないです、ハイ。」

「では、気をつけてくださいね。」

あ、祈らなかった。うん、自然体～～
よし、依頼を受けよう。

「ちょいまち、ランクはかってもらわないと。依頼はそのあと。」

ええ〜・・・せっかくやる気になってたのに・・・

「こっちだって。」

違うカウンターのの方を見ると、よく・・・おさい○ケー○イを載せてやるみたいな機械があった。
これではかるのかな？

「こんにちは。ランクを計りにいらしたんですね。少し説明させてもらってよろしいでしょうか。」

「はい。」

「ランクは、個人なら個人、パーティならパーティの平均の、魔力の量で決まります。えーと、このパーティは、お2人ですね、でしたら2人の平均が、ランクになります。では、こちらの方に手乗せてください。」

そういつて、ケー○イを載せるような機械を差し出してきた。

「ルーク、先やって。」

「？、分かった。」

絶対自分、エラー出すはずに決まってる。だって、神に使っても使い切れないほどの魔力って言ったもん自分！

ピコーン・・・

ヴヴヴヴ・・・

プシュー

ピッ

出た数字は、「9106」。18歳の平均はこの数字より少し下だから、いいぐらい、と、近くにあった紙に書いてあった。

「では、あなたもどうぞ。」

自分もはからないと・・・ま、気になるし。

ピコーン・・・・・・・・・・

ヴヴヴヴヴヴヴヴ・・・・・・・・

ボシュっ

ピッ

なに、このま・・・と、音の長さ!？プシューがボシュっつつつた

し！

ま、数値はどれどれ・・・んなった！「0」！？

「あれ、おかしいですねー、女性でも5000はあるんですけどね？壊れたんでしょうか？」

なぜ？なぜに？

「まあ、0なので、そちらの男性の、「9106」をこのパーティの平均値にしましょう。よってランクはFです。頑張ってくださいね。」

Fか・・・うん、いいじゃない、最初だもん。

よし、依頼受けに行こう。

「やっと依頼受けれるから、早くいこうよ。」

ルークが言った。頷いてついていく。
テーブルがあつてそこに紙が置いてある。

「あれ、依頼って、その掲示板のこのじゃないの？」

「ああ、あっちのは、上級者物か、大至急のやつしかのらないよ。
Fとかはこっちにあるんだ。」

「ふーん」

自分は上の空で依頼を探す。

がさごそ、がさごそ、がさご・・・む、いいの発見？

そこには、「Fランク リトルウルフの伐採 証拠部位…尻尾 報酬金…20フリス 依頼者…ヴェード・ムーゼ 場所…ルーレ原」・・・20フリス!?

「ちょ・・・ちょ、ルーク、Fなのに20フリスだってよ!」

「はあ!? そんなわけ・・・あった!」

「よし、これいこう。てかりトルウルフってなに?」

「よわっちいウルフだ!」

ふーん、らくしーらくしー。受けちゃえ。

受けてルーレ原の入り口にきて、入っていった。

＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊
＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊
＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊

まあ、そんなこんなで大変な事態になってるわけとです。

「ルーク、下がって、ヴォギーに頼むから!」

「ぜえ・・・ぜえ、ああ、たのむ!」

ルークは短剣を使って倒していたが、あとからあとからわいてくるから意味もなかった。

だからといって、振り回すのはどうかと・・・まあ、ね。

『ヴォギー、リトルウルフ、尻尾までなくなんないように殺しちゃって良いよ。』

『うん、分かったよ。』

ガアアアアア！！！！！

バンツッ！！！！！！

自分にもなんか飛んできたような感覚になった。
多分・・・気迫？

ばたばたばたばたばたばた・・・

自分達に近いリトルウルフから順に倒れていった。

「ねえ、最初からこれやればよかったんじゃない？」

「そ・・・そうだったわ。アハハハハハハハ・・・」

それから、リトルウルフの尻尾を取るために野宿しなきゃならなくなったとかは余談である。

帰ってキター！

自分達は、こないだのリトルウルフの尻尾を集め終わって、疲れ果てながらもギルドの入り口の前にいた。

「やっと帰れたんだね・・・」

「ああ、やつとだったね・・・」

「「ほんと。」」

さつき、こないだにアクセントを置いてあったのはお分かりだろうか。

それは・・・ギルドの依頼を受け、倒したあとから今日まで4日かかっていたから。

え、なぜって？

それは・・・ルーレ原で倒したあとに、自分達の視界が5メートルほどだったので、円の面積でもすぐ終わると思っていたから、最初はゆっくり集めてたんだけど・・・改めて見回してみると、7キロメートルにわたっていたから・・・その面積にわたって倒せるヴォギーも凄いと思うけどね。

まあ、そんなこんなで3日間は歩きっぱなしだったから足が・・・野宿なんて、ルークと離れて寝てたし、ヴォギーに見張りしててもらってたし、心身の危険はなかったけどはらはらしてたよ、もう・・・

そんなこんなで帰ってきたわけだ。

自分達は、袋いっぱいリトルウルフの尻尾を入れてきたが入りきらなくてルーレ原においてきた。

これ（尻尾）を換金したら、袋をたくさん持ってもってくる

つもりだ。

・・・換金したらどうなったと思う？

1本の値段は2メリスなんだが、それが何本も・・・それに報酬金の20フリスという額は、大量発生していたことで、ということだった。依頼の書類を改めてみると、下の方に、大量発生中なので気をつけること、とかいてあった。いまさらおせえー！！！！

まあ、その日のうちに換金し終わったが、合計金額、3170フリス！ルールによると、一生、遊んで暮らせる額だという。食費だけなら。

「とりあえずこの大金どうにかしない？」

「そうだね、重いもんね・・・」

そう、重いからね・・・まあ、自分は怪力だからそうでもないけど、ハハハ。

「あ、そうだ、預かり所あるんだった。」

「え、どこにあるの？ いこ、いこ」

はあ、よかった、あるんだ銀行。

自分だって、いくら怪力だとはいえ疲れはあるからね。

ああ・・・早く寝たい・・・

「ね、ルールさあまだ元気ある？」

「え、どうしたの？」

「いや、一応自分も女でさ、足痛くて。」

「ああ、いいよ、先に宿行って休んでいいよ。あ、所持金さ、あんまりもたない方がいいと思うから、3フリスでいい？」

「オッケー、んじゃ、さき戻ってるわ。気をつけてね。」

「ゆっくり休めよ！」

ルークは駆けていった・・・でもないけど、駆け足。
さあ、戻ろう。宿に。

自分は宿に戻って久しぶりのちゃんとしたご飯を食べてベッドに転がった。

疲れたけど、楽しかったな・・・とか思っていると、黒い静かな闇に飲まれていった。

朝。

おきて、やる事を終わらせてお茶を飲んでいたとき、ルークがきて依頼を受けにいこうと言われてギルドに行った。

「あ！ブルームーンですね？」

「え、あ、ハイ。」

「えとですね、ランクが上がりました。」

「ほえ？」

「こちらにきてください。」

ランクを決めてくれたおねえさん。

言われたとおりについていく。

心の中ではあがった？あがった？って思ってるよ。

「パーティ、ブルームーンはFランク、ですよね？」

「はい。」

「昨日もってきたリトルウルフの尻尾ですが、あの中にDランクの魔物が6匹いてですね、あなた方はDランクに上がりました。飛び級のごとく、飛びランクですね。」

飛びランク！てか、あのひといま、しれっとウケ狙ってない？

「あがって・・・どうすれば？」

「Fよりさらに受けれる依頼が増えます。では。」

あ、行っちゃった・・・

受けれる依頼が増えたって事は、楽なや・・・ううん、だめだめ、楽しいことをしたいなら楽はだめだよ、そうそう。

・・・はあ。

「今日はさ、ランク上がったからご褒美として休日としない？」

「あ、いいね、それ。俺も行きたいところあったんだ。」

「んじゃ、決定。自分休みたいから宿戻るわ。明日ね。」

そうして自分はそそくさと宿に戻って寝てすごした。

スズカの過去の夢（前書き）

今回は過去へんです。

スズカの過去の夢

キンコンカーコン・・・キンコンカーコン・・・

あ・・・チャイム・・・中休みか。

「スズ、一緒にあそぼっ」

「うん、いいよおっ！何する？」

「サッカーしにいかない？男子がスズもつれて来いっていつてるの。」

「へえ、分かった。んじゃ、いこ」

スズ、と呼んだのはスズカと学校生活6年間、ずっと一緒だった友達であり幼馴染の、杉浦みいな。

家が隣であり、お母さん達も仲がよかったからいつもしょっちゅうお母さんと自分で遊びに行っていた。

自分、サッカーには自信あるんだよね。

決めた事もあるし。ゴール。

「あ、やっと来た！早くあがれえ」

「わかってるって！」

自分達にあがれといってきたのは近藤純太。

こちらは友達ってだけで、放課後みいなと自分と遊んだりする。

自分は純太を結構好いていた。あと19日で卒業式の日に告白しようと思っていた。

あがれ、は、純太によるとフォワードの位置にいけという事らしい。自分もよく知らない。

「スズカ！入れろ！！」

「やってるって！」

いま自分はゴールキーパーの大影唯人の前にいて隙を狙っている。

パシュツ

ザシツ

「やったあゝゝ！！！！」

「あっちゃあゝゝ」

「ナイス！」

やった、入れた！

この試合は3点マッチで両チーム2点で相子だった。

そこで自分が入れたのでこっちチームの勝ちだ。

女子は自分とみいなしかいがないが、どっちも男子と手をたたきあって喜んでいる。

そのとき自分は思った。

この仲間とずっと一緒の学校だったら良いのに。

自分はもう卒業で友達と分かれちゃうから。

「ハッ」

・・・あれ、夢・・・か。

みいなと純太と唯人か・・・元気かな。手紙書いてくればよかったな・・・

自分は窓の外を見る。

まだ昼ではないようだ。

「今日も天気いいなあ~~~~」

外では元気に小鳥がさえずり、植物達が青々とした葉を広げている。

夢を追いかける少年登場！（前書き）

スズカ「ルーク、なにやってんのかなあ？」

ルーク「（あ・・・やべ、見つかった・・・）い、いい、いや、何もしてないよ。」

スズカ「してたでしょ。」ギロツッ

ルーク「わっ・・・分かりました、います・・・スズカの部屋から飲み物を盗もうとしました。ゴメンナサイ。」

ブライトハート「・・・・・・・・・・ふふふ、なかむつまじい事で。」

スズカ・ルーク「・・・・・・・・いつから？」

ブライトハート「いちゃっ」「ドカツ」ふふん、それくらいじゃ痒くもないわ。」

ポカーン・・・

ブライトハート「では、新しい登場人物です！どぞ」

夢を追いかける少年登場！

自分はいまルークとギルドの中で依頼探しをしていた。

がさごそがさごそがさごそがさごそがさごそ・・・

「・・・・・・・・ま・・・・・・・・ん・・・・・・・・す・・・・・・・・ません・・・・・・・・すいません
！」

「「はい！！」」

「やつとですか。気づかないモンですね。」

「「スママセン。」」

「で、パーティに入れてください。」

「「へ？」」

少年だった。自分と同じくらいな。

「パーティに入れてくださいっていったんです。」

「どうするっ？」

「どうすんの？」

「「じゃあ、勇気をためそう。」」

「なにをすれば良いですか？」

「サイバーウルフの牙を3対もってこい。」

「サイバーウルフですね。では。」

ルークがなんかいった。

サイバーウルフって・・・Cランクじゃん。

「もってきたらどうすんのさ？」

「大丈夫だって。依頼探そう、高めで楽しそうなやつ。」

依頼探し続行。

10分ほどたって・・・

「もって来ましたよ。」

「「なぬう!?!」」

「あ、まだいてくれたんですね。これでどうでしょう。」

もってきた・・・3対。

「よし、採用。」

「あ・・・いいんだ。」

「うん、受け付けしておいで、あ、これもってけ。」

自分はルークのかばんからさつと書類を出して少年に渡した。
するとすぐにいった。そしてすぐ戻ってきて書類を返してくるから、
ルークのかばんに入れる。

「で、俺の名前はムート・レヴィッダ、ムートでいい。年は11歳。」

「自分は、スズカ・シンドウで、リーダーってよべ。年は12歳。」

「俺はルーク・フローン。よろしくな、ムート。あ、俺は18歳ね。」

「どうやら1つ下らしい。」

「コシヤクな・・・うん、いいや。」

「リーダー、つきあってんの？」

「「は!？」」

爆弾発言、でーたーわー。自分の記憶では、男子と仲良くしてる所
を見てた年下の餓鬼は付き合ってる? って聞いてくるからね。
つか、なんでルークまで驚くんだか・・・怪しまれるじゃん。

「切れるぞ、ごらあああ?」

半切れしながらいってみる。

「あ、ゴメンナサイ。」

「素直でよろしい。」

ふつーに誤ったし・・・

ルークはムートみたまんま固まってるし・・・

「ま、まあ、ね。・・・あ、スズカ、この依頼どう？」

「ふむふむ・・・いいんじゃない？行こうか。」

「なんのやつ？」

「「楽しそうなやつ。」」

「ふ、ふん・・・」

土ぼこりっぽいにおいが漂っています。

夢を追いかける少年登場！（後書き）

スズカ「えー、今回の後書きは、主人公の自分による、ある人のぶつちやけを話したいと思います。」

わー（棒読み）

ス「公衆電話から電話をかける？携帯もついみねーじゃん。友達的朋友達は友達。変態は死に腐れ。空き巣結構好きかも。洗濯って意味なくね？どうせ汚くなるし。人前で飯食うなら草陰に隠れてたほうがましだ！それが、○○○デス！」

わー（棒読み）

○○○「何ばらしとんじゃい！」

ひゅん、ひゅん！！

ぱしっぱしっ！

ブライトハート「○○○とスズカのちよつとしたお遊びが始まりました。では、ごきげんよう。」

ムートの目標（前書き）

えー・・・作者のブライトハートでございます。

えー・・・20話の予告をしたいと思います。

えー・・・20話は登場人物紹介です。

・・・そんなに大切な事じゃなかったから書かなくてもよかったのですが。

ムートの目標

「なんでサイバーウルフ倒してまでブルームーンに入りたかったの？」

自分は新しく入ったムートにきいていた。

「・・・魔獣と魔物の混ざったやつ、合成魔獣に・・・んたち、食われたんだ。そいつを殺すために入った。」

「ふむふむ。それはお気の毒に。じゃ、なんで自分達のところ？」

「リーダーが異世界から来たってきいたから・・・かな。」

なんで情報もれてんねー！

「ぶっちゃけ言うけど、自分弱いよ。」

うん、うん、弱い弱い。

「龍を連れてるともきいた。」

だれよ、情報漏らしたやつ！！！！

「今言ってたの全部マジだけど・・・誰からきいた？」

「俺の友達のお父さん。」

「どこで見たか、きいた？」

思い当たることは、ルーレ原のときだな。

「確か、ルーレ原で何千というリトルウルフを一気に倒してたって聞いた。名前は知らなかったけど特長と、ルークさんの特徴きいて探してた。」

ビンゴ・・・穏便に暮らしたいだけなのに・・・

「・・・いや、うん、異世界の事は忘れて。隊長命令。で、あなたのお母さん達を食べたやつを倒す事があなたの目標なのね。」

「あ・・・ああ。異世界から来た人間は、必ずしも英雄になるって聞いたことあるし、だから頼みに来たんだ。」

ナニソレ。穏便に暮らせなくなるやん。ま、そういうことは、ファンタジー小説でワカトルガナ、ハハハハ

「ハイ、この話終わり。さっきの依頼、やりに行くよ。あ、ルーク呼んで。えーとね、ルーレ原に來いってね。」

自分はいすをたった。

ムートと話していた所は、お茶場所だ。

お茶を飲みながら話をしていたんだよ。

さっきギルドで見つけた依頼をやるためにルーレ原に向かった。ルークたちは来ていなく、代わりにものすごい殺気を感じた。む、これは・・・

「待っていたぞ！」

「うおおお!?!」

でーたー……ぽんこつ姫の後ろにいて殺気はなつてたひとだわあ・

「姫様を無礼に扱った罰だ、死ねええ!!」

あー……あれだね。姫様を甘やかした感じ?

ダダダダダダダ!!!!

ドダダダダダダ!!!!!!

とりあえず、逃げる! 走り回る!

あっちはジジイだからすぐにへたばるはず……ってええ!!!!? ? ?

追いついてきやがった、あんのジジイどんな体の構造よ!

「死ね死ね死ね死ねえエエ!!!!」

やばい……この場面……あ、デジャヴね。

……いや、ちゃう。小説で読んだんだ、こういう場面。

このジジイのタイプは、やられるまでおってくる。

っー事は、倒しちまえばいいやん!

てか、こわっ! 剣片手に、12歳の女の子を追うってどゆことよ!?

あ、このジジイのタイプは魔法使ったら手におえなくなると思うから・

「創造、ウォリアーの剣!」

イメージしながら唱える。
シャアアアン・・・

手のなかに戦士の剣が握られる。
鋭く、細く、それでいて力強い剣。

フツ。

頭の中に剣術の1つが浮き出る。

大丈夫、自分は不老不死なんだから、死ぬわけない。
殺気に震える手を抑えながら、目をつぶり後ろから来るジジイを待つ。

「ハアアアア!!!」

自分はジジイの右肩から左腰にかけて剣を振るう。

「グッ・・・まだあ!」

ジジイ・・・いったいどこからそんな元気が出てくるんだ?

今使った剣術は、名前こそ知らないが・・・言えば、集中してきる、見たいな感じ。

自分、創造できるんだから武器買う必要ねーじゃん。ラッキー、お金の無駄がはぶけたぜ!

はいけねー、いけねー、体こそ知らんうちに避けてくれてたけど、元気なジジイを倒さなければ。

「くたばってもらおう、ジジイ! 殺しはせんがなああ!」

自分の臆病・・・

ふと思いついた魔法の呪文、イメージをやってみる。

「（意識の閉じ、カンシヤスネスシヤット!!）」

意味は、そのまま、意識を閉じさせる。強制的に。

「んなっ・・・」ばた。

やた。

「おい、スズカ？」

ルークの声だ。

もうちっと、早くきてよね、もう。

「遅い。早くきてよもうちよつとさあゝ、危なかったんだからさー。」

「「悪い。」」

「あれ・・・リーダーそいつ誰?・・・まさか・・・」

「いやいやいやいやいや。なにを考えたんだね、君は。ぽん・・・ブリズ姫さんの近衛だよ。うん、多分。殺気はなってきた、死ねとかいうから倒した。・・・殺してないからね?」

変な誤解しないでくれませんか? ムート君。まっさか12歳の自分と

40歳ぐらいのジジイが、んなわけないでしょう。

「なんか、リーダーもたいへんだね。」

「ありがとう、分かってくれると嬉しいよ。ま、同情するなら金をくれて感じだけど、金はいにくあるからね。」

そういつて自分はジジイを・・・

ポイツ

捨てて、ルークたちが口をぽかんとあけているのもかわらず依頼を達成しに行った・・・

宇宙龍

ここは30億年前の世界――

あたりはただ、ただ赤く燃え、1とき前まで月夜に光っていたはず
岩山をも、荒れさせた。

『我は楽しんだ。おぬしも楽しんでみればよい』

太く、重く、響き、それでいて鋭い声

岩山がかるうじて山と見える後ろから、シルバーの鱗を、闇に浮か
ぶ月の光を反射させながら悠々とやってくる龍が飛んできた。

しばらくしてその後ろから、真っ赤に輝く目を凜々と輝かせながら
飛んでくるゴールドの龍がやってきた。

『私はもう楽しみましたよ、シャーグル様。そういう彼方はどうな
んですか？』

ゴールドの龍が、ひやりとした鈴のような声で言う。
シャーグルと呼ばれたシルバーの龍はニヤリと笑った。

『我は星を壊す趣味などない。生命の循環をさせるだけだ、おぬし
にはそれを手伝ってもらっているだけだ。』

『ふふ、それじゃあ私が生命殺しの趣味があると言っているようなものじゃないですか。』

『そうなのであろう？クハハハ』

この龍たちは生命の循環をさせているらしい。生まれた生命を、さ
らにより強いものにするため、星を廻り、星を焼き、星に新しい生
命を置いて行くのだ。こうしたことを何度もし、龍たちは最終的な
生命を作り出した。

『さて、グレインド。そろそろ次に行く。』

ゴルドの龍はグレインドという。

『わかりました、シャーグル様、今行きます。』

グレインドはそういうとシャーグルのいた、太陽の方に体をくねら
せながら飛んでいった。

「おおお・・・我等を生んでくださったことを感謝する・・・」

1人の人間が金と銀の龍を見てそう呟いた。

宇宙にはまぶしいばかりの暖かい光が満ちていた。

宇宙龍（後書き）

こんかいは・・・なんでしょうね。
古代の話です。短い・・・

登場人物の紹介（前書き）

えーお待ちかねの・・・登場人物紹介デース。

登場人物の紹介

☆主人公☆

神藤 スズカ

歳 12歳

性別 女

背丈 152cm（転移する前は149cm）

体重 45kg（転移する前は50kg）

特徴 怪力、不老不死、男勝り性格、最強設定（使い方を知らないためにまだ最強じゃない）

☆身近な登場人物☆

ヴォギツシュ

性別 男（？）

歳 ？

背丈 153cm（人型するとき）

体重 37kg（人型の時）

特徴 金色の瞳 宇宙1

ルーク・フローン

性別 男

歳 18歳

背丈 179cm

体重 60kg

特徴 赤いハンチング帽

ムート・レヴィッダ

性別 男

歳 11歳

背丈 145cm

体重 41kg

特徴 生意気だけど気のいい性格

ブリズ・ミュシリー

性別 女

歳 12歳

背丈 150cm

体重 49cm

特徴 ミュシリー王都の王女

☆その他のどうでもいい登場人物☆

ギルドのおねえさん

だれもが気のいい、若い人

ギルドのお兄さん

尊敬できる筋肉質

ブリズの付き人

殺気が凄い

ミュシリー王都の近衛兵

面倒くさがりやが多く、多くの兵は、ブリズに惚れて入った

シャーグル

生命を新しくしていくために星を廻る龍

グレインド

生命を新しくしていくためにシャーグルと星を廻っている龍 生命
殺しの趣味あり？

＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊
＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊

ブライトハート「ということです。短かったです、すみません。」

スズカ「作者、怪力ってナニさ。」

ブ「いいじゃん、ほんとのことだもん、あんたは私の分身なの、私も怪力。」

ヴォギツシュ「ねえ、最近僕のこと忘れてません？」

ス・ルーク・ブ「あ、ごめん。」

ムート「どうも、始めまして。ムートです。スズカと、ルークの間が気になりますね・・・へへへ。」

ルーク「なんかいったか？」

ム「あ、言ってますん。」

ス「なんか聞こえたなあ？」

ム「リーダー、何も言ってますんよ。」

ブ「ムート君、スズカたちをどうくつつけるかは私に任してね。」

ム「あ、はい、頑張ってください。」

ス「よからぬことの予感がするけど・・・まさかね。」

ブ「まあ、とりあえず頑張っていくんで、応援よろしくお願いします！では、また前書きや後書き、こんな場面で会いましょう。あ、感想待ってます！」

思いつき

宿、スズカの部屋にて

「ねえ、みんな。」

「どうしたんだよ、リーダー？」

「どうした？」

自分はあることを思いついた。

それは――――

「旅に出ようと思う。みんなで。」

そう。自分は何を思ったのか旅に出たくなった。
こう・・・なんでだろう。いまさらだけと思う。

「今のままでも良いんじゃないか？」

ムートが問う。

自分はそれじゃダメだと思ったから。
自分も最初、そう思った。だけど時間を重ねていくうち、依頼をこなすうちにダメだと思った。

「外の世界を知りたくないの？」

一番の理由といえるような思いはこれだった。

「そ、そりゃあ・・・知りたいけど・・・危なくねえか？」

旅に危険はつき物。

ソレは誰でも分かる。

「旅に危険はつき物、それに危険を乗り越えていく事も必要だと思うの。」

「俺はスズカに賛成だな、俺とて伊達にギルドに入ろうとしたわけじゃない。死ぬ覚悟の上で入ったんだしな。」

「俺は・・・」

「ムートはお母さん達を殺したモンスターを倒すためにギルドに來たんでしょ？ だったら強くならなきゃ。どんな危険が待ち受けているようにも。」

強くならなきゃモンスターは倒せない。逆に殺されてしまう可能性もある。

「う・・・ソレはそうだけど・・・俺、まだみんなより全然戦えないし、依頼でも届け物みたいなやつばかりだったから・・・」

「これから強くなればいいじゃない。いま強くなかったって、これから強くなればいいから。そのためにも旅に出るの。」

自分は強く言う。旅に出ようと。

「ルーク、あんたは来るんだっけ？」

「あ、ああ。付いていくよ。どんな危険があらうとも。乗り越えてみせるさ。」

「じゃあ、・・・えーとねえ明後日、ここに準備を済ませてここに来る。いいよね？何かあったらリングで話し掛けて。ムートは今悩んでてもあさってまではまつから。じゃ、解散！」

自分は部屋から出る。残された2人はかばんを持ち、そろって各部屋にいった。

「旅には何が必要かな？」

自分は宿をでて、商店街への道をたどっていた。建物の影に入ったとき、ヴォギーが姿を現す。

「スズカ、旅に出るのかい？」

「うん、そのつもり。その方が楽しいと思うんだけどね。」

「あの、ムート君？見てたけど、相当悩んでるみたいだよ。」

ヴォギーは言う。そりゃ、ね。

「まあ、スズカが行くなら僕も行くけど。」

「そりゃそうでしょ。」

商店街で話をしながら食料、水、毛布などを買って宿に帰った。

召喚！（前書き）

まだ出発しません。

あ、あ、槍なげんといてえ！
W
W

召喚！

夜、8時ごろ。

明日、旅に出発

ムートサイド

どうしよう。

いってもいいのかな、母さん。

母さん達の仇をうつまえに死なないかな。

旅・・・俺はいつてみたい。

でも・・・仇を討つ前に死んだら意味ないよな・・・

でも・・・強くならなきゃ・・・

・・・いこう。仇を討つために。

リーダーと居れば乗り越えられる。とおもう。

にしても・・・リーダー、この世界の人じゃないような・・・

ムートサイド終了

ルークサイド

旅か・・・にしても急だな。

まあ、俺も昔は憧れてたなあ。

明日か・・・今日は早めに寝よう。

なぜかは知らないけど、ものすごくいやな予感がする・・・

ルークサイド終了

はああああ。

荷物おもかったあ……

「ふあつくしゅうん!!!」

あーやば。風邪かなあ？

早めに寝たほうがいいよね……

その朝

「ふああああ……あっ今日じゃん！」

そう。今日は旅に出るひ。

今は……6時かな？

とりあえず、やる事済まして待ってよっと。

暫くして。

「スズカゝ居るゝ？」

「あ、開いてるよー。」

ルークが来た。

「ムート、なんか言ってた？」

「あ、昨日の夜中、リングで来るとは言ってたよ。」

あ、よかった。・・・つか、2人にも使い魔居た方がよくね？
ようし。

「リーダー、俺です。」

あ、来た。良いとうわあいむいんぐう。

「はい、来たね。ありがとう、で。」

「「で？」」

「2人には使い魔を召喚してもらいます。」

「ええー！ー！！？」

「はい、隊長命令。」

「む・・・」

自分は宿の人に貰ったカーペットに頭に思い浮かんだ六角形の星を描く。

マッ〇ーでwww

ふむ、良い具合だ。

「んじゃ、まずルーク！」

「・・・はいっ!？」

「この中心にたつて。」

ルークはおとなしくたつ。

ムートは好奇心丸出しでがんみ。

あ、・・・緊張してきた・・・トイレ行きたい・・・我慢!

「ルーク・フローン、この者に使えし者よ、現れよ」

あ、やばい。自分かっこいい。

・・・あ、出てたし・・・

んー、一言でいうなら・・・オオカミ?

「我を呼ぶのはお主か、少女？」

はっ、少女だあ?

自分はそんなもん、この世界にきたときに捨てましたよ。
・・・じゃなくて。

「あー、オオカミさん、そこの青年の使い魔になってあげて。」

「ふむ、おぬしの願いとあらばいいだろう。」

「「スズカ(リーダー) って何者ー!?!?!?」」

「あ、ルーク、そのまま。契約するから。あー・・・てえ出して。」

ルークは手をだす。

自分はその手の人差し指を、ポケットに入っていたカッターで少し切る！

「いた！」

「るせえ。」

「あ、オオカミさん、その血、舐めて。」

ペロッ

「はい、終了。下がって。次ムートね。」

「・・・あ、ああ。」

動揺してるねえ・・・

「ムート・レヴィツダ、この者に使えし者よ、現れよ」

・・・あ、出た。

一言でいうなら、馬？

「やほ。これが、おいらの主か、スズカ？」

ぶふっ、おま、何でマイネームしっとんねん。
ま、いいか。

「あー・・・ムート、さっき見たでしょ。自分でやって。契約。」

「・・・はい・・・」

プチ。ペロッ

「いつつ・・・」

「はい、オオカミと馬、名前を教えて。」

「我はブグルフ。よろしく頼む。」

「おいらはクゼット。よろしくな、3人とも！」

「ブグルフにクゼットね。よろしく。あ、主の命令には従いなよ？」

「「うむ（わかってるって）」」

こうして旅立ち前に2人は使い魔を仲間に加えたのでした。

出発。(前書き)

やっとう発します。

前回、まさか召喚だけで使っちゃうとは思ってなかったんです。

・・・ゴメンナサイ、いいわけなん、石投げないで〜!!

出発。

「さて、使い魔召喚したし、馬車買いに行こう。」

「「え、歩かなくていいの？よしや！」」

おいおい・・・まあ、自分も歩くのヤダからだけどね☆ふはははは・
・

「さあ、行こう。午後には出発したいからね。」

使い魔を三体従え歩いてい・・・っておい、主につけよ！

あ、いいや・・・ルークたち来ないから・・・

「さきに馬車やいつてるからね？あー南門の方の馬車やね。一軒しかないからすぐわかるでしょ。じゃね。」

自分はそういつてクゼットにまたがる。ブグルフは小さくなって自分の肩に。ヴォギーは見たこと無かったけど、小さいドラゴン型になってブグルフの隣に居る。

「あ、まってよ！」

ルークの呼びかける！

選択肢

無視する

うるさいという

無視する↑

自分はさっそうと駆けて行った・・・

南門の馬車やにて

「すませーん、馬車くださーい。」

呼びかけてみる。

「少し待っておれ。」

じいさん声。

ガチャ

家のドアがあき、じいさんが出てくる。

「ふむ、中に来なさい。」

手で招かれる、ので中に入っていく。

あ、お金は全部引き出してきたぜ☆

中は少し薄暗く、馬につける器具などが売っていた。

「馬車がいまあるので3種あるんだが、箱馬車と平馬車と軽馬車があるが、どれがいいかね？」

「箱馬車で。」

「はい、こちらの馬車になりますな。」

じいさんが見せてくれたのはドアがなく、出入りしやすそうな感じで、座る所はトラックの荷台な感じ。前の方に座る場所があり、馬をつけるところがある。4匹まで繋げられるみたい。

「この馬車はほかのよりちっと高いがいいかね？」

「あ、いくらですか？」

「941フリスだがいいかの？」

「あ、買います。」

ふはは、いつぞやのリトルウルフ、やっというてよかったわ。

「馬とかここで買えますか？」

「おお、騎馬も買ってくれるのか、いいじゃろ、ついてきなさい。」

じいさんは南門のほうに歩いていく。自分もあとから付いていく。南門をでてすぐ右に曲がった所に、頑丈そうな鉄の檻が広くあった。

「騎馬は馬、騎馬ドラゴン、騎馬鳥が居るが、どれにするかの？あ、馬はふつーのやつじゃな。騎馬鳥は力と速さにすれば馬の5倍、騎馬ドラゴンは10~20倍じゃな。上に行くほど値段が高くなるぞ。」

「ふーん、騎馬ドラゴンはいま何匹居ますか？」

「今は7匹じゃな。見てから決めるかの？」

「お願いします。」

品定めが大事さあゝ

じいさんは3つあった鉄の扉のうち右端のトビラを開けた。

もう1枚、そして3枚めの扉を開けるとヴォギーの形（小さいドラゴン型）をそのまま大きくした感じのが7匹いた。背丈てきにじいさんのわき腹あたりだ。

む？

1匹の騎馬ドラゴンが見つめてくる。

「ふむ、あいつはおぬしの事を気に入ったみたいじゃな。あいつはどうじゃろう？」

確かに少しずつだが近づいてきている。じりじりと・・・
自分からいくと、動かずにこちらを見ている。

なでなで・・・

撫でてみた。ドラゴンは気持ちよさそうに目を細める。
こいつにしよう。

「じいさん、3人は一匹でも大丈夫ですか？もしかしたら5人になるかもしれません。」

「じゃあ、2匹の方がよからう。」

自分は1匹を除き、6匹を見に行った。
え？なぜかって？1匹、決めたもん。

むむ！

6匹目のときに、そのドラゴンから何かを感じた。

「こいつとこいつにします。値段はいくらですか？」

「ふむ、騎馬ドラゴン2匹じゃな、526フリスでどうじゃ。オマケに餌を分けてもらえる、騎馬カード付きじゃ。オマケじゃぞ。」

「のった！」

買わんわけにはいかねえべよ。

えさだいたかそうだしね・・・

とか何とか思ってるうちに、ドラゴンに縄（騎馬ドラゴン用）つけて来たじいさん。

自分にそのなわを渡し、南門から中に入っていく。

家の前にいつのこまにやら馬車があった。

自分は前のところに縄をつけ、じいさんに金を払い南門付近に行った。

暫くして

ルークとムートが来た。

何してたんだか。おせえなあ。

「おそい、はよ乗れ！」

「ああ・・・」

ルークたちは走ってきてすぐ乗り込んだ。

乗ったのを確認し、ドラゴンに進めといってみる・・・と、進んだ。
よかった、伝わった・・・あ、名前付けなきゃ。

縄つけたときに気づいたんだけど最初決めたのが♀、あの方には♂だった。

「雌がルー、雄がラーでいい？」

「ぐるる。」

「がるる。」

承諾したと捕らえていいよね。

「ルー、ラー、よろしく。」

そういい、ルーたちの足を進ませる。

自分達の出発はここからだ。頑張っていこう。

風が優しく笑っていた。

GO!GO!ルーラー!
(前書き)

すみません、遅れました。
理由は、後ほど・・・

GO!GO!ルーラー!

ごろごろごろごろごろごろごろごろ．．．

どしいっ

「きゃあ!？」

「わああっ!」

「．．．」

馬車に乗っています。

時々浮かぶときも．．．痛いんだ、こりや。

ルーとラーが進むスピードも速いし、息しづらいし．．．

「けふっ、がはっ、かふふっ!！」

「「「え?」」」

声のした方を見る。ルーラーも止まってくれた。

「がははっ、かはっ」

狐だった。ただの狐じゃないよ？

尻尾が9本ある。

．．．これっていわゆる、九尾?
かあっこええ!!

・・・てかなんで狐？じゃなくて、九尾？

「がふふー！！！！けはっ」

あ、ごめん、忘れてた、なんかはいてる？っていうのかな、ゲほゲほいってる。

馬車から降りてみる。

馬車は結構高さがあったてわかんなかったけど、結構おっきい。自分の腹より上あたりの高さ。

九尾の背中をさすってあげる。

「かふ・・・クオン！」

ア・・・鳴いた。

「あんた、ここでなにしとんの？」

「クオオン！！」

ごめん、わかんね☆

あ、ブグルフなら・・・

「九尾、あんた馬車に乗んなさい。」

「クン」

九尾が馬車に乗る。

そして自分はブグルフを元の大きさに戻るように言う。

「ふむ、九尾の子だな。」

「うん、通訳できる？」

「たやすいことだ。では・・・ウオオオオン」

「クオオン、クオン」

すご。なんか喋ってるよ・・・

「まず、名前を聞くと、親からウィッグスと呼ばれていたらしい。」

「ふん、ふん。んじゃ、なんでここに居るのかきいて。」

「・・・オオオン」

「クン、クオン」

「・・・町から追ってきたそうだ。」

「なぬう!!?」

「変わった匂いがしたからきたといっておる。先回りするために早く走ったらさっきみたいな風に咳き込んだ、というわけだろう。」

「・・・ご苦労。」

「クオオン」

「ふぬ、連れて行ってくれといっておるが。」

「採用。自分と契約しなさい、って言って」

もち、来るなら話せないダメだしね♪

「いいといったぞ。」

「んじゃ、いっきまーす、つっても血い、舐めさせるだけー」

とか言いながら自分の指の先を針を魔法で出して刺す。

ぷち。

「舐めれ」

「クン」

ペロオン

うわ、舌が2枚分かれとるう・・・。

（よろしく。彼方の名前は？）

（おお、自分はスズカ。よろしく、ウィッグス。）

軽く念話で挨拶。

「いいなあ、使い魔2匹じゃん。」

「いいじゃん、それと、使い魔じゃなくて、友達、だよ？」

「・・・スズカらしいね。」

ウィッグスを連れてルーラーは自分達を乗せて、スピードを落とさずぐんぐん進む。

ぐんぐんぐんぐん、真直ぐ進んでいく。

GO!GO!ルーラー! (後書き)

ウィッグス登場。

彼女はボケ担当にしようかなー・・・なんつて。
こほん。

えー、更新しなかった理由は、

まことに恥ずかしいのですが、クリ○トンさんの会社のボー○ロイドの鏡○リン・レンにはまってしまって、イラスト集めました。
ごめんなさい。

いや、でも、ほんとにかわいいんですよ？

動画も面白いものばかり作っておりますし。

あ・・・言い訳だらって?・・・ほんとですけど・・・

うひえ、怒りというなの石(意思)をなげないで!

あたしね（前書き）

はい、どもどもやってまいりましたブライトハートでございます。
ボカロというブラックホールからただいま帰還しました。

まあ、このあとまた吸い込まれる予報ですが・・・

あたしね

「クオオオン」

「ガル？」

「グル！」

上からあたし、ルーさん、ラーさんです。
いってる事は分からない。
だけどなんか不思議で楽しい気分。

（ねえ、ウィッグスってさ、狐？）

（あ、あたしシルバーフォックスって種類のトップの狐の子供です。
）

（なが………で、ウィッグスは今何歳？それと何歳でオトナ
？）

（えと、あたしは今7歳でオトナは60歳からです。ちなみに寿命
は3000年と言われています。）

……でいいんだよね？

（へえ、スゴっ。あ……でも……）

（？）

（あ、いやなんでもないよ、気にしないで。）

何でしょう。スズカ様は考え込んでしまいました・・・
気にしないでと言われたら気になります・・・

「クオン」

「ウオオン」

あ、ブグルフさん？

え、ナニ、何かにおわないか？

くんくん・・・

・・・・・・このにおいは！？

「クオオン」

「ガルル！！！！」

「グルッ！！！！」

ルーさん、ラーさんも何か感じたようです。

「む、どうしたの、みんな？」

「ふむ、怪しいにおいととも血のにおいがするな・・・今回は戦わないとしぬぞ。」

「「なんにい！！？？」」

ルークさん、ムートさんが驚いたようにあちらこちらに目を配らせています。

（スズカ様、あたしも戦います。）

（ありがとう、絶対。死なないでね？）

（大丈夫です、これでもあたし、お父さんたちに教わっていたんです、狐界のすべての技を。）

（へえ、じゃあ、ムートのほうに行ってあげて、いちばん弱いから。）

（はい）

ムートさん・・・あ、居ました、馬車の隅っこって見ずらいんですね。

タタン・・・タタン・・・タタン・・・タタン・・・

「バルルルルっっ！！！！！！」

「ウオウオウオウオウオオ・・・！！！！」

「グルル！」

「ガルル」

「」「っしゃ、つぶすぞー！！！！」「」

皆さん意気込んでいるんですね。

この戦いがはじめての戦い・・・頑張らなくては。

タタン・・・タタン・・・タタン・・・タタン・・・

しかし、この音は？

スズカ様に知らせておいたほうがいいですよね・・・

（スズカ様、何かが大勢で近づいて来ています。注意してください。）

（おお、ありがと、ウィッグス。）

よし・・・

タタン、タタン、タタン、タタン

「おお、来たあ、せんとうたいせーい！」

「「おー」」

見えました、盗賊のようです。

馬にまたがり、・・・あれは、人の首・・・ですか？

先頭のおじさんが首の髪を持っています。

・・・許せません、あたしは人とともに生きてきました。
人が人を殺すなんて・・・

「クオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「うお、すご、ウィッグス・・・負けてらんねー!」

「俺もっ!!」

「いくべさ、・・・ハアアア!!!!!!」

うはぁ・・・スズカ様が盗賊の方に突っ込んで・・・

続いてルークさん、それにつづきブルフさん。

ムートさんは・・・馬車の方を守っています。クゼットさんも敵を蹴散らして・・・

はっ、あたしも行かないと。

「うおお、銀の狐だぁ、高く売れるぞお!!」

わぁぁぁ!!

あ・・・狙われた系ですね。

何もできないと思ったら大間違いと言う事を教えて差し上げましょう。

「クアン!」ヒュ

バッシユ「ぐべぁ!」?

あたしの放った魔法矢は心臓を貫く。

ああ・・・あたしは人を殺したんだな。

盗賊たち、しょうがないよ、命がけの仕事だもの、殺されても悔い
はないはず。

盗賊たちはあとからあとから沸いてくる。

あたし達は盗賊たちを根こそぎ潰した。

「おつかれー、今日は野宿だよー、あールールクご飯作って」

「あいよー」

疲れたな・・・今日はもう寝よう。

あたしね（後書き）

書いてる最中に飲み込まれました、何回も。最終的には
音楽聞きながら書いてましたWWWWWW

やべ、私オタツキーになつとるう！

何でもまた・・・(前書き)

えー、久の連日投稿です^^V

何でまた・・・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

何もない、何もない、ただまっさらな空間が広がっている。

ここは、どこ？

どうしてこんな所に？

真っ白、真っ白、真っ白。

どこをみても真っ白。

自分の体の方を見る。

ない。

自分の体がない。

どうして？何で見えるの？

・
・
・

・
・
・

「それは、君の心が真っ白だから。」

だれ？

「名前はまだない。でも僕は君の中に住んでる。」

どうやって？

「それは・・・まだ教えられない。」

じゃあ、ここはどこ？

「それもまだいえない。」

どうして？

「・・・時期がきたら、教えてあげる・・・もう、時間がないからね。みんなの所へ戻りなさい・・・」

どうし・・・て・・・？

プツっ・・・ん

「・・・あれ、ここは？」

「ん・・・？何を言ってるんだよ？」

昨日自分達が盗賊を倒して少しはなれた場所だった。

「あ・・・ルーク・・・なんでもない。ごめん。」

「・・・？謝ること無いと思うけど。」

「あ・・・ごめん。」

・・・あ、また言っちゃった。

「・・・なんか。何でもないよね？」

「い、いや、いいの！いまはいいの。こんどになったら分かるはず！」

自分のみたあの空間は何だったのだろうか。
考えながら馬車に乗る。

ルー、ラーが起きるまでずっと考えていた。
ふいにヴォギーが出てきた。

「ね。夢みてたでしょ？真っ白な夢。」

「え？見たけど・・・って何でしてんねん！」

「・・・いや、だって僕とスズカは特別なパートナーだよ？」

ちよいちよいちよい！

「ちょいまち、誤解を招くからそんな事いうな、ってかなんでそういうことになっとなねん、使い魔と人の関係だろ！」

「いや、だっふごっ！」

自分はヴォギーの口をふさいだ！

ヴォギーはふごっ！攻撃を繰り出した！

何も効果がなかった。

「なんで抑えるのさ！」

「・・・言わなくていいことを言いそうだったから？」

「なんで分かるんだよー？」

「問答無用。」

絶対こいつ神のあーだこーだいいそうだし。
自分が死なないとかいいそうだし。

「なーなー、ルークー」

「何だよ？」

「仲良さそうだよなー」

「ブボッ！ゲほ、ゲホッゲホ・・・なんてこというんだよ！？あ・・・」

「あ？」

「いや、忘れてくれ。」

「（ニタニタ）やっぱー、リーダーの事好きなんだーヒューヒュー！」

「ぐらああ！」

そんなやり取りがあったのをスズカは知らない。

何でまた・・・(後書き)

あっはー。

道それた？

「ねー、ルークさーあの道であってたって言ったよねー？」

「そのつもりなんだけど・・・」

自分はただいま森で迷っております、道を間違えられて。

「じゃあさ、何で戻っても戻っても戻ってきちゃうわけ？」

「知らないよう・・・」

ルークに間違えられた。

よりによって地図を持ってるやつが！

「ゴメンナサイ。ユルシテー」

「棒読みやめろ、気色悪い」

「気色悪いって？」

「あー知らないほうがいい」

絶対倒れて気い失うからWW

「ねーリーダー、クゼットが落ちるー」

「尻尾引つつかめー起きるから」

ぎゅっ

「いたあっ！　いたいよちょっと何してるんすか、ちょっと！」

「落ちそうだったから起こしただけだよ」

「尻尾つかまなくなっていていいじゃないですかー？」

「あーごめん、自分がムートに尻尾つかめっていったー」

「スズカ！？　・・・いいわ、無駄そうだしなー・・・」

ピカッ

おう、まぶいのう・・・

って

「太陽やん！？」

「だねー」↑クゼット

「そうじゃな」↑ブグルフ

「あー抜けたみたいだねー」↑ヴォギー

「・・・」↑ルーク&ムート

にしてもなんだこのあつさは！

(ゆっくりなんかしてらんないよ、あつつてくて)

(今解きますゆえ、しばしお待ちを)

あ……まさか魔法かね。

スッ

おお

涼しいっ

普通の空気が涼しい！

「うお、涼しくなったな……」

「すまんのう、あのままいれば蒸し焼きで体の中から焼けていったぞう」

あれだ、テレパシーじゃないけどテレパシーみたいな。

「さあ、こちらへどうぞ」

いちばん立派に見える銀ぎつねに案内された。

尻尾やばい、1、2、3……24本あるよ！

なんか……海の中を漂う海草みたいwww

銀ぎつねに案内されたのは洞窟だった。

周りは薄水色で透明な水晶が淡く光る洞窟。

「きれいだな」

ルークがそういった。
自分もそう思う。

しばらくすすんで行き止まりになった。

一番奥と思われるところにはひととき大きな水晶があった。

「この奥に何かあるみたいなのですが、あなた方の力であけてほしいのです。」

そういわれて自分達は水晶の周りを調べ始めた。

道それた？（後書き）

？で部活コン部に入りました。
え？なに？

コンピューター部です、
略してコン部。

おかしくない？（前書き）

作者「えー・・・お気に入り登録数15件に突入。ありがとうございます。書く気力となります。ですが、書く勇気とはなりません。え、更新が遅れます。なまあたたかああーいい目で見てください。なにせやっところ中学生ですから・・・」

おかしくない？

「ジェニファー、ここでいいんだよね？」

「はい、スズカ様。」

自分がジェニファーと呼んだのは、きれいな輪郭の銀ぎつねの事である。

まーまーまー、かわいいのよ。めんこい目ばしてさー

あーやばい前にかつてた猫の事思い出した

ジェニファーと同じような目をしてたっけな・・・

確かあの時、あの場所で・・・

・・・やめよ、こんな事。

「スズカ様？」

「・・・あ、ああ、今行く」

なーんか最近ネガティブになってるような気がしてならないんだけどそれはなぜ？

・・・ジェニファーに案内されたのは1件？の、祠だった。

何でも、シルバーフォックスの先祖がみんなここに眠っているとか。

「我が先祖のつかさどる星よ、このものを受け入れたまえ」

ジェニファーがそういった・・・とたんに目眩が・・・

キラキラと輝く星が無数にある。

ここは・・・宇宙？

フツと振り返ると、銀色に光る星があった。自分はその星に近づいた。

星には若々しくたくましい銀ぎつねたちが銀に光り輝く草原をかけていた。

走った後に、キラキラと幻が見えるように。

「これはこれは。よくお越しくださいました、スズカ様。」

1匹の銀ぎつねが話し掛けてきた。

「どうも。」

「こちらへお立ちになってください。」

「はあ。」

自分は言われるがまま草原の上に降り立った。
かさりという音がして狐達が集まってくる。

中には目が両方傷となっていて見えないんじゃないかというものから
首あたりから足あたりまで長く傷になっているものもいる。

痛々しい、そんな気持ちではなく

雄雄しいといった方があっているだろう。

「さて、皆のものの、準備はいいかな？」

最初の狐がそういうと、みんなうなずいた。
何がおこるんだろ？

「星よ、我が星よ。このものにわれらの力を授けたまえ」

みんなして一斉に言った。

ここまで統一された言葉はきいたことねーしw

クラアツ・・・なんか入ってきたし・・・

ああ、目眩が・・・

・・・ふう、何とか。

「これで儀式は終了です、お疲れ様です。我らの力がスズカ様に入られました。われらは影ながら見守りますゆえに、勇気をもち行動してください。」

「まあ・・・はい。」

「では、また後に会いましょう。」

狐がそういうと自分の意識はシャットアウト・・・

水晶の洞窟

「はっ」

自分の頭は先祖のもとから帰ってきた！
なんつて。

体中に何かの力が駆け巡っている感覚がある。
これは・・・あの狐達の力かな？

「ああ、スズカ様。お帰りなさいです。どうですか？気分は。」

「なんか・・・新鮮なきもち？」

疑問符付き。

だって、急に目眩して宇宙にいて力注がれてだよ？
どんな気持ちになりゃいいのさ・・・

「では、皆のもとへもどりましょう。今ごろは祭りのようにでもしているはずです。」

「祭り？」

「ああ、行けば分かりますよ。」

ジェニファアはすたこらと行ってしまった。
なんか最近行けば、とか後に、とかそういうふうにいわれること多いなあ・・・

祠から戻ると、祭りと聞いてピンと来てたように

ドンちゃんさわぎになっていた。

村があるんだが、もう洞穴を広げた感じだ。

こう・・・空にはちゃんと月が見える。

穴があってそこから見えている。

周りには・・・やっぱり砂漠な感じ。

ずっと奥を見ると穴があってそこに狐達の部屋があるらしい。

「スズカ様、今晩は楽しんでいてくださいね。」

ジェニファーがそういい、真中で踊りを踊っている狐達の輪に入っていた。

・・・ちょいまち。4足歩行のやつが踊ってるってどうよ、立って。

あ。そうだ、水晶の洞窟の穴あけるの忘れてたよ。

祠に連れてかれてそのまま忘れてたし。

「ルーク、とヴォギーちよつと来てー」

面倒なことは先に終わらせてしましましょう。

「なんだよー人がせっかく楽しんでる時にさー」

「そうそうー」

「水晶の洞窟いくよ。穴あけにいくの。」

面倒な事はさっさと終わらす、これ自分のモットーさ！

「どうせ絶対命令でしょ？」

「ピンポーン」

「はぁ・・・」

ため息を吐くルークをおいて歩き出す。
ヴォギーがすぐついてくる。

「ねースズカー？」

「なに？」

「僕進化できるかもしれない。」

「ハア!？」

進化って・・・おいおい、できちゃったりですかー？

「水晶の洞窟でできるかもしれないって思うんだ。」

「どうやるの？てか進化したらどうなるの？」

「うーん、まず力が増すね。」

「あとは？」

「ちょっと龍のほうの体系が変わると思う。」

「ふーん、やってみてもいいよ。」

自分達を乗せてはこべるようになるんじゃない？

「うん、やってみるよ!」

おーやる気満々だなー

どうやってやるんだろ、興味あり。

洞窟の奥についたなり。

ヴォギーはでっかい水晶を調べている。

自分は壁を調べている。

つかれるなあ。

あ、ルーク?

どこいったんだろうねー?

たぶん。

逃走したんじゃないでしょうかね。

「あっ」

「あ?」

ヴォギーの方をみると、光につつまれていた。

光が眩しすぎてあんまり見えない。

・・・数分たって光は収まった。

ヴォギーは変わっていた。

「わぁ・・・凄いよ、力があふれ出てくるような感じだよ!」

「よかったねえ!」

その姿は、龍ではなく竜だった。

字が違いますよ。分かりました?

んーんー。

たとえば、ゲ●戦●の竜みたいな。

あれって女の子が竜に変わるんだっけ？

・・・まあ、そんな感じ。

「人型に戻ってみて？」

シュん

あー戻れるみたいだね。

やったー背中に乗れるー♪

「あっ」

「あ？」

こんどは自分があっ、っっていう番だった。

壁を張って、耳をつけてうろうろしてたんだけど、
ある一箇所で、バラツ・・・とね。

まあ、落ちてるわけとです。

あーんーれーんーとね。

たーしーけーてーええええ・・・

登場人物設定＋（前書き）

ほぼ前のやつと一緒にが多いです。

登場人物設定＋

☆主人公☆

神藤 スズカ

歳 12歳

性別 女

背丈 152cm（転移する前は149cm）

体重 45kg（転移する前は50kg）

特徴 怪力、不老不死、男勝り性格、最強設定（まだ、最強じゃない）

☆使い魔、動物系☆

ヴォギツシュ

性別 男（？）

歳 ？

背丈 153cm（人型するとき）

体重 37kg（人型の時）

特徴 金色の瞳 宇宙1 竜 スズカの使い魔

ブルフ

性別 男

歳 ？

全長 2、3m

体重 29kg

特徴 オオカミ

クゼット

性別 男

全長 2、5m

体重 31kg

特徴 炎馬

ウィッグス

性別 女

全長 1、7 m

体重 23 k g

特徴 銀色の毛並み 狐 九尾

ルー

性別 女

全長 1 m

体重 19 k g

特徴 ミニドラゴン 走るのが速い 人懐こい

ラー

性別 男

全長 1、1 m

体重 20 k g

特徴 ミニドラゴン 走るのが速い 気が強い

☆身近な登場人物☆

ルーク・フローン

性別 男

歳 18歳

背丈 179cm

体重 60kg

特徴 赤いハンチング帽

ムート・レヴィッタ

性別 男

歳 11歳

背丈 145cm

体重 41kg

特徴 生意気だけど気のいい性格

ブリズ・ミュシリー

性別 女

歳 12歳

背丈 150cm

体重 49cm

特徴 ミュシリー王都の王女

☆その他のどうでもいい登場人物☆

ギルドのおねえさん

だれもが気のいい、若い人

ギルドのお兄さん

尊敬できる筋肉質

ブリズの付き人

殺気が凄い

ミュシリー王都の近衛兵

面倒くさがりやが多く、多くの兵は、ブリズに惚れて入った

シャーグル

生命を新しくしていくために星を廻る龍

グレインド

生命を新しくしていくためにシャーグルと星を廻っている龍 生命
殺しの趣味あり？

作者「ども、怪力が自慢の作者、ブライトハートです。」

スズカ「ここまでみてくれてありがとうございます！」

ルーク・ムート「ありがとうございます」

ブグルフ・クゼット・ウィッグス「はじめまして、使い魔三人集だ（だぜ）（です）」

ヴォギー「ちよつと、なんでそこに僕が入ってないんだよ！」

クゼット「あ、ごめん、忘れてた。」

スズカ「・・・読者の前なんだけど。」

クゼット・ヴォギー「あ。」

作者「さあ、こんなやつらは置いといて先に進みましょう！」

ルーク「今回はアンケートがあるんだったよね？」

作者「ああ、そうなの。で、お気に入り登録してもらってる人たちが読んでくれている人たちにまず！」

一同「ありがとうございます！！！！！」

ムート「あと、メッセージを返信してくれたりする「Arishia」様、ありがとうございます。」

ブリズ「登場がくれたが、いつかレイ殿に会ってみたいのじゃ！」

作者「・・・いきなりそれかよ。」

ブリズ「なんじゃ、思った事を行っただけじゃぞ！？とゆうか最近だしてくれないの・・・」

作者「です。よろしくお願いいたします。では、方向性がきまった
ら書き始めるので、早くつづきが見たいといってくれる方は感想へ
／＼（「」）また会いましょう。」

水晶の洞窟の奥底

「イダッ！」

自分落ちました。

結構深かったなあ・・・

「大丈夫ー？」

あ、ヴォギーきたあ。

いやー、竜もいいねえ・・・

「僕にのっていいよー」

「あーうん、ありがとう。でもあっちになんか穴が続いてるんだよね・・・」

「じゃ、いこう！なんかありそう。」

そう、穴があった。

真っ暗でヒヤリとした風が出てくる。

と、いうことは出口もあるということ。

ヴォギーが人型に戻って、出発。

「・・・薄気味わるっ」

じめじめ・・・キモい・・・

暫く進んでいくと、開けて上に穴があいているところについた。

真上には月がきらめいている。

「わぁ・・・」

「きれいだなぁ」

歓声をあげたいほどだった。

壁には水晶やらエメラルドやら、鉱物があり、つきの光に当たってキラキラと輝く。

「・・・ふむ、客か・・・」

そんな時おぼさんの声がした。

隅の暗がりを見ると、銀の毛並みがつやつやと輝いて、足取りは軽く、耳をつんと立たせている銀ぎつねが居た。

「何年ぶりだろうかのう・・・おぬしら、名は？」

「あ、自分はスズカ・神藤です。」

「僕はヴォギツシュ、ヴォギーって呼んでください。」

「・・・スズカにヴォギーか。わしはシュピュルグ・ファーン・・・シュルグと呼ぶが良い。」

シュルグはその場に腰を下ろすとひげをピンと張った。

「わしは・・・何千の刻ときをここですごした。どこに何があるか、全て分かる。この世界のことも、全て、だ。」

「シュルグ、さん・・・？ここはどこなんですか？」

「シュルグでよい。ここはこの星の中心だ。」

「「えっ」」

「わしを中心にしてまわつとるようなものだ。このほしなら、ここから洞窟をたどってどこでも行ける。・・・そろそろ、帰ったほうがいいんじゃないかね？」

「あ・・・はい。シルバーフォックスの村に帰りたいんですが・・・まあ、水晶の洞窟ですけど」

「ふむ、では、あそこから行け。」

シュルグが尻尾で指したのは正反対の洞窟だった。
そういえば、周りをよくみると鉱物の間などに洞窟がある。

「ありがとう、シュルグ。また機会があったらくるね。じゃ、また。」

「さよなら、またきます」

「・・・気をつけるんじゃないぞ。危険が常についているからのお・・・」

自分は洞窟の奥へ進んだ。

またも上に穴がある。

ヴォギーが竜の姿になり、自分が乗り込んだ。

ヴォギーはすぐにも宙に浮かびあがった。

洞窟をぬけると、村の片隅の井戸が真下に見えた。

ヴォギーが静かに降り立ち、人型になると自分は村に入る。
村長に報告のためだ。

洞窟家のいちばん大きな穴に入る。

「村長さん、ここ？」

「・・・ふお？あ、スズカ様でしたか。何かようで？」

「水晶の洞窟のことです。」

「ふむ、なにかありましたか？」

「それが、穴を開けたら・・・凄く深い穴になっていて、落ちました。でもヴォギーが助けてくれたので問題ありません。でも子供達や・・・まあ、誰でも入らないほうがいいでしょう。落ちたら死にます。」

「・・・ありがとうございます。死ぬ・・・ですか。そうですか・・・では、村のものに言っていきます。」

「そうですね。」

「つと・・・そろそろ、祭りも終盤です。行かれてはどうですか？」

「そうするよ。じゃ、また。」

自分は洞窟をでて、祭りがされている所に向かった。

もう、ドンちゃんさわぎ・・・

みんななにかの音楽に合わせて踊っていた。

自分は踊りをみて、村長の洞窟で眠った。

朝、自分が起きると薄暗かったが朝だと分かった。いちど、伸びをしてから、村長たちを起こした。

「村長、自分達はもう行きます。またいつか来るので。」

ルークたちが用意を済ませ終わったときに村長に伝え、すぐに村を出た。

・・・また、いつか、来た時はどんな風になっているんだろう。

その時が楽しみだ。

故郷へ

森をでた自分達はある町にきていた。

「・・・覚えてるんだよね？ ルーク？」

「もちろん・・・」

ここは、ルークが生まれた町だ。
うるせえ。

活気ありすぎ。

呼び込みの声、噴水の音、ケンカ。

ケンカ・・・多いなあ・・・

「こっちだよ」

ルークが先頭を歩き、町案内てきことをしてる。
でも、紹介のことなど聞いていない。
考え事をしていた。

どん

ぶつかった。

「すみません。」

「・・・いいでしょう、なにか考えゴトをしているようですね。気をつけてください。」

「・・・あ、ハイ。」

20か、そんなくらいの女性だった。妙に落ち着いていた。自分はルークを追って、路地裏に入った。

「ここ、俺の実家さ。」

・・・やべえ、パネエ。

豪邸だよ、この家!!!!
どったらでかいのよ・・・

「あらあ、ルーク、お帰りなさい！」

40～50くらいのおばさん。
たぶん、ルークの母。

「あ、母さんか。」

「・・・その子達は？」

ルーク母が尋ねた。

「あ、自分はスズカ・神藤です。」

「俺はムート・レヴィツダです。」

「そこの男の子は？」

ヴォギー（人型）を見ていった。

「この子は、ヴォギツシュ、竜の使い魔なんですけど、いまは人型です。」

「まあ！・・・その子達は？」

「我はブグルフ、ルークの使い魔だ。」

「おいらはクゼット！ムートの使い魔さ！」

「がる！」↑ラー

「グルル！」↑ルー

「・・・まあ！どうぞ、あがっていいわよ」

・・・わかったのか？ルーラー語。

「ありがとうございます。」

「馬車置いてきて正解だったね・・・」

「ま、あがれよ」

今、ルークの自室。

整理整頓されております、ハイ。

この世界くるまえの自分の部屋・・・汚かったなあ。

「まあ、今日はここに泊まっていいよ。今日はもう遅いし。」

「あー、よろしく。」

「明日は朝市を案内するよ。」

そんなことを話してるうちに、自分はカックリと眠ってしまった。
座ったまま。

ルークサイド

・・・ねてるよ・・・
どうしょ。毛布かけとくかな。

俺はクローゼットから毛布を引っ張りだしてスズカにかけた。

「・・・襲わないの？」

「ブッ！！な、なに言ってるんだ」

このやろ・・・なんでムートみたいな子供が襲うとか知ってたんだよ・
・

「・・・やっぱりー、好きなんだー！」

ああ・・・憎たらしい・・・

ルークサイド終了

自分が朝起きると昨日寝ちゃったところだった。毛布がかけてあった。
ベットにはルーク、その隣にひいてある布団にはムートが寝て、そ

の隣のふとん2枚の上には使い魔たちが寝ていた。

窓からは太陽の光が降り注いでいる。

ちょっと飛び入り（新キャラ・・・かなあ？）

ブラハ「どもーっ、作者のブライトハートです！」

スズカ「異世界旅行への主人公、スズカでーっす。」

ルーク・ムート「「その他もろもろでーす」

使い魔などなど『?????（ごちゃになりすぎて分からない）』

ブラハ「はいーっ今日は、新キャラ的な、古キャラ的な、飛び入りキャラを紹介しまーす!!」

そのたもろもろ「おおーっ」

ブラハ「はい、入ってきてっ」

がちゃ（ドアの開ける音）

？「どうもー！初ですねー？」

？「こん。よろしく頼む。」

ブラハ「はぁーい、最初の方が」

？「えーとお、私たちは、作者の・・・2番目くらいに書かれた『ウォリアーレジェンド』っていうファンタジー小説から来たのよ！でもね。」

？「バカくそマヌケアホへたれカス作者が、『ウォリアーレジエンド』を、うまくいかなかったからだかなんだかの理由で、削除したんだ。そして、俺たちはごみ箱の中から帰ってきた、というわけだな、作者？」

ブラハ「・・・うう・・・そのけんはごめんなさい・・・あ、読者の皆様、この話は本当にあった話です。現に悪霊として（ry」

？「くそ作者はおいといて、『異世界旅行へ』に出させてもらえる事になった。」

スズカ「へーえ！・・・作者ひどっ！こんなカッコEー！な人とカワEー！な人を捨てるとか！！！！ひどっ！あ、よろしくお願いします。・・・つーことは先輩かぁ！」

ブラハ「・・・名前言った？」

？「あ、んっとー、私はレイニー・フローズ。レイニーでいいわ。さ、次、次♪」

？「俺はエドモンド・ベリアルだ。・・・よろしくな。」

ブラハ「はい、レイニーとエドモンドです。二人はラヴ」「ゴッ」
ゴファアッ！！」バタッ

スズカ「・・・？」

ルーク「うわぁ・・・いきピッ」「ゴッ」「うが・・・っ」ばたっ
ムート「（がたがたぶるぶる）」

スズカ「・・・とかは禁句だわぁ・・・」

ラブラブ

レイニー「まあ、というわけでよろしく♪」

エドモンド「俺達を怒らせないほうがいい。命が危ないからな。」

ブラハ「フツカーツ！・・・フツフツフツ、いいことを言わせてあげよう、レイニーとエドモンドにね！！俺っちを怒らせるとどうなるか！」

レイニー・エドモンド「ぐっ・・・（う・・・）エドモンド（レイニー）は私（俺）の婿（嫁）」操られ中 カッコないはエドモンド
ブラハ「どうだね、気分は！フハハハ！」

レイニー・エドモンド「「どうなるのか、わかってるよなぁ・・・」」

スズカ「わぁぁ・・・」（言葉になってない）

レイニー・エドモンド「セイヤアアア！！！！！」（▽○
△×！！！！）↑音になってなさ過ぎる鈍い音

ブラハ「・・・っ・・・カハッ・・・悔いは・・・な・・・し・・・」
「バタッ

スズカ「・・・Σ（「ロ、１１１」）」

ルーク「・・・ググッ・・・フツ・・・フウー・・・あれ？

作者なんで頭と口と鼻と耳から血流して倒れてんの？」

スズカ「・・・うん、あんたもう少しでこうなってたかもね。」

ムート「（がたがたがたがたがたぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶるぶる）」

ルーク「・・・うん、幕を閉じようか。では、ごきげんよう。」

レイニー・エドモンド「悪は殺^{たお}した。・・・ごきげんよう♪」「」

ちょっと飛び入り（新キャラ・・・かなあ？）（後書き）

何日後

ブラハ「・・・グハッ！！！！あれ、ここはだれ？わたしはどこ？
・うん、古いな。もうみんな帰っちゃったのかあ・・・にしても寒
いな・・・」

カチッ（ケータイを開く音）

ブラハ「ええええええ！！！！ちよい、ちょ・・・29日たつとる！約
一ヶ月まさかあそこで倒れてたとか・・・レイニー&エドモンド、
クロス！！！！！！」

こういうのを戦闘狂っていうんだよね

自分達は朝市を見てまわっている。

かわいい髪飾り、おしゃれなドレスにヒールの高いサンダル。どれも自分にあいそうなものはない。

自分はいつ何時、いつなんどきタンパン＆半そでだったから。

・・・しゃれっ気ねえー・・・パネエほどねえ・・・

「どうした？」

「あ、いや。なんでもないよ。」

「ふーん。あつ、これスズカに似合いそうじゃないか？」

ルークが指したものは・・・制服みたいなやつに、フリルがついたスカート。

「ありえねえ！」

「・・・そうかなあ？」

そして、自分がなぜルークと歩いているかというと、ムートがルーク母の手伝いするとか言って聞かなかったからだ。・・・いつか殺す。

「・・・あ、・・・にちよ・・・んす・・・やつ・・・い・・・」

前方の方からそんな声が聞こえた。

「なんだろう、行って見よう！」

ルークがそう言って、行ってしまった。

危険だ、近づくなど脳内危険察知信号がそう言っている。
でも・・・もう遅い。

「うお、そのジョーちゃん！強そうだねえ！」

20～25の男の人に引っ張られていた。

・・・リングに載せられ、側にいた審判係てきな人が旗を下げる。

「スズカ、ガンバレー？」

殺す・・・まだ12歳やで！？

ピーっ！！

笛が鳴り響いた。

「お嬢さん、お名前は？」

審判係（審判でいいや、もう。）が聞いてきた。
もう、どうにでもなりやがれ！

「太郎・山田。」

「ウソを付かないで下さい。」

「はぁ・・・スズカ・神藤。ちなみに12歳」

ちなみに12歳を強調して言った。
・・・スルーされた。はあ。

「俺はストライト・フェルドーさ！」

引っ張った人が言った。

「では、これよりシンドウ選手とフェルドー選手による戦いを始めます！構えっ！」

ピイイイー！！

笛が鳴り、下げてあった旗を勢いよく上げた。

ストライトが殴り込んでくる。

自分は避けて、鳩尾みぞおちに蹴りを一発弱く打ち込んだ。

「グフっ！！っ、っええな、讓ちゃんヨォー！！」

あ・・・墓穴掘ったかも・・・

「スズカーがんばれー！」

「讓ちゃんの彼氏か？いいおと「バゴオオツ！！！！」・・・カハツ・・・」

こめかみに強く拳を打ち込んだ。
血を吐き出して倒れ「（むくっ）へっへっへっ・・・にしてもつええなあ、讓ちゃん・・・」なかった・・・

何こいつ、可笑しいんじゃない!?

・・・・どこかのファンタ小（ファンタジー小説の略）でよんだ、ルジャンキー闘狂バトってやつかなあ・・・?

「へっへ・・・まだまだいけるぜえっ・・・」

ストライトが弱いながらも蹴ってきた。自分はわざわざ、受けてあげた。

痛くも痒くもないわっ！屁でもねえ。

「弱いものが己の力を過信するとうなるか知ってる？」

自分は、ある技のワンステップの準備のために1歩踏み込んだ。

「さ、さあな。・・・どうにでもなるんじゃないか・・・？」

「なら、強いものが己の力を信じるとどうなると思う？」

自分は心の中に魔力を集めた。

「・・・っ!・・・」

いまさら遅い。自分の怒りの領域内に入ってしまったのだから。

自分は集めた魔力を、星のように、だけど冷たく散乱させた。

星の砂の形をした魔力の塊がリングの中に降り積もる。

リングの床に落ちた魔力の星は、ストライトに向かって動き出した。

オトナの観客は口を閉めるのを忘れている。

コドモの観客は目を輝かせて何が起こるのか見ている。

魔力の星が、ある程度ストライトに集まったのを確認すると、自分分はパンパンまでに魔力で膨らんだ星に魔力を注ぎ込んだ。

どうなるか、分かるよね？パンパンになったものの中にさらに詰め込むんだから・・・

ボゴオオオオ・・・ン・・・

爆発するよね。あ、大丈夫、リングぎりぎりにはちゃんとバリアを張ったから。

自分は自分の技で自滅なんてしないし、審判はなにも悪い事してないからバリアはって・・・

攻撃を受けたのは、ストライトのみってこと。

煙が邪魔だったから、ブラックホール（吸い込み指定したもの）で吸引。

プスプスに焦げ、前のめりの倒れたストライトが居た。

そして、審判が呆然としてる間に自分は観客にいいことを見せてあげようと、魔力を集め、雪の結晶の形にして降らせた。床に落ちた魔力の雪はブラックホールを伝い自分の元に。

パフォーマンスをして、審判の魂を叩き戻して呆然とするルークの元へ。

観客は、「雪、綺麗だったわぁー」など言いながら帰っていった。

・・・バトルジャンキー、初だったけど弱かったな・・・

星の爆発使う必要なかったなぁー・・・

こういうのを戦闘狂っていうんだよね　その後

「ちょっと、ルーク！ボケっとしてないでいくよ！ポケルーク！！」

「・・・ハッ」

ルークがやっと気付いた。

30分はたってたと思うんだよねー。

「・・・ぐあー・・・よく寝たあ。・・・あれ、何で俺ここで寝てるん・・・あっ譲ちゃん！」

あ・・・ルークはまだ覚醒してないし・・・うん、良いや。メモ・・・あった。

先帰ってるね・・・っと。どこにはつつけて。

Bダアアツシュ！！！！

ふはは、自分の走りを見よ！

銀速のジャガーと言われたこの走りを！

・・・なんつつて。銀速のジャガーはあってるけどね★

ダッダッダッダッダッ・・・

どんどんストライトと距離を離す。

「こいつがどうなってもいいのか！」

ルークをさしていった。

うん。今回ばかりは嫌だよ、ルクラッシュ。

今回は生贄として放って置くよ、ルクラッシュ。

自分はストライトをシカトして走った。

「・・・ええいやあああ!!!」

ダダダダダダダ!!!

「なにいつ!!」

ストライトが・・・追っかけてきたあ・・・
なに、あの顔オ!

うける、ちよつとWW

風のせいで、ビロロロロロってなってるんだけどおー・・・
て、このまま居たら激突じゃね!?
めえつぶって走ってるしな・・・

ダダダ、ヒュっ（避ける音）ダダダ、ガシヨっ!

あ

ばあさんにぶつかったわー。

「あ、スミマセン、スミマセンッ」

「ヒイ!」

ぷ・・・ククク・・・ヒイって!ヒイって言われてるよ・・・あは
ははは!!!

ひい、ひい・・・、・・・あれ?なんか凄い睨まれてるなあ。

自分のせいじゃないよね？・・・うん、そうだよね。
・・・人のせいにされてるね、完全に。
うーん、どしよ。

「ごらああ！！！！」

「わあ！？」

「・・・・・・・・止めなさい。」

えー、えー、ただいまマイクのテスト中です？

？？？サイド

はあ、まったく。

さっきから何をやってるんだ、この子達は・・・

「ごらああ！！！！」

「わあ！？」

「・・・・・・・・止めなさい。」

あ、言っちゃった。

なんか面倒ごとに巻き込まれそうなの・・・

「こんにちは」

女の子が話し掛けてきた。

「こんにちは。」

10〜15歳ぐらいの子。

「あなたはなんていうの？」

「自分はスズカ・神藤です。」

スズカというらしい。・・・珍しいな。

黒髪なんて。私は朱色だからなあ。

「スズカちゃんね。私はレイニー・フローズ。レイニーでいいわ。そっちの子は？」

「あ、俺はストライト・フェルドーっていうんだ。」

「ストライト君ね。・・・さっき何してたの？」

「あ・・・」

「その質問自分が受けます。」

スズカちゃんが答えてくれるらしい。

「なにしてたの？」

「追っかけられてました。」

ジロツ

そんな効果音が出るくらいにストライト君を睨んだ。

「ふうん、もういいわよ。あ、ちょっと一緒に居てもいい？探してる人がいるの。」

レイニーサイド終了

「ふうん、もういいわよ。あ、ちょっと一緒に居てもいい？探してる人がいるの。」

レイニーさんはそういった。

・・・どっかで見たことが・・・

うん、いいよね★

「さ、いきましょう。どこに行くの？」

「あ、まず自分の連れを拾ってからでいいですか？」

「どうぞ」

ルークを拾わなきゃね。

ルークはまだポケットとしていた。

「ほらあ、ルーク！！はよ起きんかい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えあっ？・・・・あっごめん。」

レイニーさんは面白いといった顔でこちらを見ていた。
ストライト？もちろんおいてきた★

ルークを拾って、ルーク家に向かう。
路地にはいつ・・・

「あ、レイニー。」

「エドモンド！何処にいたのよ？」

「うーん・・・迷った？」

「どうしてそこ疑問文なのよ！？」

仲がいいなあ。

羨ましいなあ。

微笑ましいなあ。

「まあ、まあ、今日はそこのお二人も泊まっていてくださいな。」

ルークマミーが路地の角から出現！

ルークマミーはアビリティ、天使の微笑み&誘いかけるを繰り返した！

「「あ、お願いします」」

レイニーとエドモンドは精神を100回復！

「・・・あれ？なんか違和感・・・」

「？」

自分・・・なんかのっとられてた様な気が。

・・・まさかね。

《作者》そのまさかです。

ゾゾゾッ!!

うわぁ・・・なんだろう・・・

「さ、早く入らないとかぎ閉めますよ。」

「あ、すみません。」

自分は悪寒を感じながらルークホームに入った。

まだ月はない。

約4万千PVアクセス突破記念

ブラハ「ちんわー。」

スズカ「どもお？」

レイニー「こんにちは」

ブラハ「今回は！」

スズカ「総合PVアクセス40,868を記念して!!」

レイニー「・・・えと・・・（何だっけ!?!）」

ブラハ「（ごによごによ・・・）」

レイニー「・・・ミニオリジナルストーリーを書きます！（作者が）」

「ブラハ「いや、ども、作者のブライトハートです。略でブラハです。このたびは40,868アクセスを祝してミニオリジナルストーリー・・・といってもスズカ&レイニーの乙女な心の・・・なんていうかですね、まあ、見れば分かります。男の方も、コレを見れば、女の子のことをちょっぴり知れるかも!?!なる内容です。・・・多分。」

スズカ「なに、そのたぶんとかww」

レイニー「・・・しょうがないじゃない、作者だもの。」

スズカ「あ、そっか、だよー♪」

ブラハ「・・・むかつくな・・・あ、・・・スズカ&レイニーの乙女心へどうぞ！」

ナレーターは私、ブライトハートがおおくりいたします。

。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。*。*。
総合PVアクセス40,868記念 スズカ&レイニーの乙女心
。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。*。*。

スズカサイド

宿の出来事。

「はあ、あー・・・今日は疲れたなあ・・・」

スズカは宿のベッドに倒れこんだ。

ギルドで依頼をうけ、金を稼いできたのだ。

だが、楽なようにと選んだ依頼はお金がありませんでした。

前々からもっていたお金が少なかったため、今日は宿もみんな一緒に取っていた。

「・・・疲れてるんだね、今日は休んだら？」

ルークが言った。

ムートはすでにベッドで寝息を立てている。

使い魔たちも、横にひいた布団で固まって寝ている。
起きているのはスズカとルークだけだった。

「いや、でも荷物の整理とかいろいろあるからね・・・」

「あ、じゃあ、俺やっておくよ？ 今日そんな動いてないし。ほら。」

ルークが時計を見ながら言った。

時計は12時38分を指している。

スズカは、ドクツと心臓がはねたのを感じた。

ルークの心からの気遣いに。

「・・・じゃあお願いできる？」

「わかった、任せておいてよ。じゃ、おやすみ、スズカ。」

ドクツ

またスズカの心臓がはねた。

今度はルークが自分の名前を呼んだことに。

スズカは思った。

転移する前、こんな想いをした事があったなあ・・・と。

前の世界に居た頃、好きだった男子に名前を呼ばれるたびにドキドキした。

時折こちらをじっと見てくる男子を見て、もしかしたら、なんて思った事もあった。

体中に散らばる勇気をかき集めて告白した時はすっきりとした気持ちで、返事を待っていた。

返事はNO。

スズカは明るく振舞っていたが、心の奥底では奈落の谷に落ちたよ

うな気分だった。

それ以来、恋にはとても慎重になったのである。
慎重に、慎重に。

自分からはアピールを少しだけ、自分からは告白しない。

スズカは静かにベッドに入り、目を閉じた。

スズカサイド終了

レイニーサイド

旅の途中の出来事

レイニーはエドモンドと果てしなく長く、何もない道を歩いていた。
太陽はまだ真上にあり、じりじりと照りつける。
肩に食い込んだリュックの紐が痛い。

ふいにスツと肩の重みが無くなった。

エドモンドが荷物をとったのだ。

「あ・・・ありがとう・・・」

「気にすんな。」

エドモンドは子供のように無邪気な笑顔をレイニーに向けた。

レイニーは、自分の頬が火照るのを感じ、エドモンドから顔をそむけた。

恥ずかしくて見ていられなくなったのである。

レイニーは21歳、いまだ独身の付き合い経験ゼロだ。だが、好きな人ぐらいいはいる。

レイニーの隣を歩いているエドモンドだ。

彼とレイニーは幼馴染で親友で仕事仲間だった。

エドモンドが仕事で功績を収めたおかげで、暫く何もしなくてよくなったのである。

それも会社自体が。

社員全体に行き渡り、そして一生遊んで暮らせる額の金が舞い込んできたのだ。

それを利用してエドモンドは幼馴染、そして親友のレイニーを誘って旅に出たのであった。

レイニーはする事も無かったし、彼が彼女の想い人であることからもちろんオーケーをだしたのである。

他愛も無い話をしながら歩きつづけた。

太陽が傾きかけた頃、ぽつぽつと雨が降り出した。

レイニーが空を見ると、雲がこの世界を包み込んでやるとでもいうように広がっていた。

そして、雲の隙間から太陽が少しでも希望をとでもいうように見えるている。

「こりゃ、大ぶりになるな・・・お、あそこに洞窟があるから、あそこで雨宿りでもしようか。」

エドモンドが洞窟を指差していった。

レイニーは素直にうなずいた。

洞窟に入るとじめじめした様子も無く、風が通っていた。どこかに通じているようだ。

脇には白い花びらを目いっぱい広げている花が2、3個生えていた。レイニーはある花を見て微笑んだ。

白い花が青く垂れ下がった蕾の下に入り込んでいた。
まるで垂れ下がった蕾が折れないように守っているように。

レイニーはズキンと心が痛んだ。

私はエドモンドの役に立てているのだろうか、そう思った。
居てもたつても居られずに奥で野営の準備をしているエドモンドに聞いた。

「私ってエドモンドの役に立ててる？」

言った時にあっと思った。
なぜかは分からなかった。

エドモンドは昼に見せた無邪気な笑顔を見せてこういった。

「居るだけで役に立ってるよ。」

レイニーは良かったと思い、野営の準備を始めた。
エドモンドの無邪気な笑顔を脳裏に焼き付けて。

。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。*。*。
。。*。*。*。*。*。*。
完

ブラハ「うーん、どうでしたかね？」

スズカ「・・・なんかやだなあ。」

レイニー「・・・うん、そうだね。作者ってほんと恐ろしいよね、

いろんな意味で。」

ブラハ「・・・なんか言った？」

レイニー「いいえっ！」

解説しよう！

レイニーはエドモンドが居ないと作者に逆らえないのである。

ブラハ「まあ、いいんじゃない？俺っちにだって好きな人居るし、女子ならだれでもいるんじゃない？あ、いない人も居るね。・・・あ・・・でもどうかなあ？」

スズカ「居ないと思っててもわかんないうちに好きになってたってこともあるしね。」

レイニー「そうそう。」

ブラハ「まあ、男性の方の参考になってくれればいいのであります。・・・まあ、12歳、今月13歳のくそからの視点ですが。」

スズカ「・・・認めてるんだ。」

レイニー「そこはえらいよね。」

ブラハ「・・・うん、まいいや。では、またなんか見たときに記念ミニストーリー描きます。今度は男視点書きたいけどあんま分からないのでむり。」

スズカ「では、また。」

レイニー「すいーゆー♪」

ブラハ「アデュー！」

お外であ・そ・ぼ！

ルークホームではあまり目立ったことも無く、一日が終わった。

朝

「そろそろ、また旅に出かけてくるよ、母さん。」

「あら、もういくの？まあ、気をつけてね。」

夜にすっこしだけ話したこと。

・・・ルークマミー・・・軽いな。いいなあ、いいなあ、軽い親。自分ちの・・・こんの鬼畜めえ！！！！

《作者》それはあっしも同じさね

ゾワっ・・・

・・・うん、気にしたら負けだよ。

「私たちも一緒に行くので。ありがとうございます。」

「あらあ、レイニーちゃんたちもいくのねえ・・・仲良くね。」

「・・・はい。」

うん、ルークマミーナイス。

「んじゃー、お世話になりました。またきます。」

「またいらっしやいね。あ、スズカちゃ「では。」・・・ウフフ。」

こうなる事は知っていたのさ！

「さ、いこ。」

自分達一行は馬車を置いているところに向かった。

「おねーちゃん、遊んでー？」

通りかかった広場の入り口で、うーん・・・3～5才かな、女の子がよってきた。

「あ、いまはごめ「おにーちゃん、鬼ごっこするから入って！」・・・
・ルーク、なぜついていく？」

「え、だって・・・か、かわいいじゃん？」

ちよ、なぜそこで口籠もったし。

そしてなぜついていくし。

「ま、たまにはいいじゃない、息抜きも必要よ？」

「レイニーさん・・・いっしょに行動したの昨日からじゃありませんか。」

「大丈夫、スズの大変さは分かってるから。」

なぜだか、自分はレイニーさんにスズと呼ばれている。

「・・・まあ、息抜きか。自分的には生き物と触れあ「ドドドド・・・」

「んいにゃあ。」

「ウオンッ」

「ピョピョピュ」

「○△★◇●☆▼■・・・」

「・・・ちょ、まって？」

「ナ○コレ珍○景に投稿できるんじゃない？」

「題名は・・・どこ見ても動物・・・みたいな。」

「・・・すげえ。自分が夢見た猫と鳥とねずみ系が仲良くしている！
・・・感動だ。」

「にゃんたん」↑猫の事

「ワンコだ!!」↑犬のこと

「ちゅんちゅんいるよお」↑・・・鳥の中のすずめの事

「ハムたん!」↑ハムスターもどきの事

「ラビちゃあんだあ」↑ウサギもどきのこと

「・・・タンポポだ・・・」↑タンポポのこ・・・？

「あれ、タンポポ？さっきそこになかったよね？」

クルッ

コワッ！！！！？

タンポポこっち向いた！

花びら動かした！！

葉っぱ揺らしてる、ぎゃー！！！！？

・・・カオスだ・・・カオス過ぎる・・・

困って疲れて疲労困憊の自分がベンチで座っているのの側で、レイニー&エドモンドは女子たちに花の説明会を開いていて、ルーク&ムートは鬼ごっこで男子たちと走り回っている。

平和だ・・・平和じゃないのは自分の心だけか・・・

「にゃおん。」

猫が頭を摺り寄せる。

自分は笑って鼻面を優しくなでてあげる。

それだけで自分の心は癒されていった。

旅の始まり（前書き）

…更新遅れましたというか
オンラインゲームやっててしませんでしたというか
めんどくさかったというか
友達と遊んでたというか
中学が忙しかったというか

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
次はでき「チッ？」…なるだ「チッ!？」…早くします。

旅の始まり

日が暮れて。

子供たちは帰り、自分達は公園のベンチに座っている。
相変わらず動物達は動いていない。

「リーダー…凄い数だね…」 ↑ムート

「うん、まあ、いいんじゃない？ かわいいし。」 ↑スズカ

「…だね。」 ↑ルーク

「…俺、花動くところ初めて見た。」 ↑エドモンド

「いや、だれでも初めてだって。」 ↑レイニー

「ああ、食べてしまいたいほどカウアイイ！」 ↑ヴォギー

ヴォギー…壊れたのか？

かわいいのは同感。でも…ねえ？

「にゃあん」

「かあああいいい！！」

「我は人の事はいえないと思うぞ、スズカよ…」

そこ！ 心よむな！

「にゃんこ、お前さんはのらか？」

「にゃん！」

「のらか、一緒にくる？」

「にゃお！」

「おおー、んじゃ肩に乗ってみそ」

タシッ

「おおおー、いいねー…マジできっちゃう？」

「にゃおっ!!！」

にゃんこは尻尾と高々と上げた。
自分の肩の上で。

「ようし、お前の名前はブラウだ！」

「にゃんっ!!！」

ブラウに決定。

…黒猫のにゃんこだお？
ん？名前からブラウンが思い浮かぶ？

…いっぺん死んで見る？

「リーダー、ブラウを抱かせてよー」

「フシャーっ！！！！」

「ザンネンでした♪」

こんなやり取りが続き…

「さ、お前たちはそろそろ帰り。」

「にゃあああ・・・」

「くうん…」

「チルチルウ……」

「*****（聞き取れない）…」

「また来るから、ね？」

ダダダダダダダッ

動物たちを帰す事に成功。

「自分達もいくぞおーっ」

「おー」↑ルーク

「にゃおー！」↑ブラウ

「冒険のはじまりい♪」↑クゼット

まあ、こんな感じで自分達は馬車に乗り込んだ。
ん、スペース？まだまだあまってるZE★

街をでて暫くクローバーのような植物が生える草原が続き、暫く進んでいくと、砂漠についた。

砂山のとっぺんに、月が見える。

旅の始まり（後書き）

ブラウ登場！

旅の始まり

だけど・・・(前書き)

一斉テストの勉強？

そっちのけにきまってるじゃん☆

そして今回から書き方&性格やらなんやらがカオスになってきます
w w w
スズカ「覚悟しておいてよね？」

旅の始まり

だけど・・・

ろーーーーーはーーーーー!!!

ふっふっふ、ご機嫌いかがですか、読者の皆様。

自分は神藤スズカです。・・・忘れてなんかいないよね？

その時はどうなるか分かってるよね？

作者（ごめん、ごめん、投稿するの忘れちゃっててsごはっ!!）

作者、ブライトハートがログアウトしました

・・・もちつけ、自分。
いま何がどうなった？

・・・なんかカオスになってたきが・・・てか誰に話し掛けてたんだろ・・・

・
ま、いっか☆

「にゃーにゃーあ」

「お、ブラウ起きたの」

「にゃあ」

自分は砂漠真っ只中の馬車にゆられておりまんもす
蜃気楼みえるぜ、おらあゝ

「スズカ・・・あつい」

「ん？なんかいった？」

「あ、いえ、なにも・・・」

「言えや、ごらあゝ」

「いや・・・スズカの頭の上に湯気でてるなあー・・・つてへばあゝ」

ルークを馬車から突き落としたんですよ？

いやあゝ丁度岩があったからね、落としてみた。

暫く気絶してたみたいだった

丁度いいから休憩してたらむくつと起き上がって来た

「ぶっ・・・！！！！」

「スズカ、どうしたの？」

「・・・鼻血ブラボーにゃーにゃー！！！！アッハッハッハッハッハッ
アッハハハhげほっげおほっ、ヒュウー・・・ヒュウー・・・」

ルーク、怖いからその満面の作り微笑みヤメロ・・・
しかも鼻血が滴ってる・・・クッククク・・・

「はは、誰のせいかなあ」

「ハイ、自分です！」

・・・いや、だって・・・

ルークの後ろに白銀の鎌もった天使いたら言わざるを得ないでしょ
wwww

――アナタハダレ？

ん、神藤スズカ、12歳。特性はアニマルフレンドで、特徴は怪力かな。

――ヘエ・・・ワタシハ、ファルデ・ロイラ。トシ・・・ワカラナイ。シヨクギヨウハテンシ。

天使・・・こりやまた凄いの出てきたねえ

――スズカノテンセイニカンケイシタ、カミサマノテンシデス。

おお、あのくそ神元氣にしてた？

――ハイ、ソレハモウ。スズカノアバレップリヲミテダイバクシヨウシテマシタヨ。

・・・そしてファルデはなんできたの？

――カミサマニ、アナタニチドアツテキナサイトイワレマシタ。
キニイッタナライツシヨニイナサイツテ、カミサマガイイマシタ。

んで、どうすんの？

——エエ、イッショニイマスヨ。オモシロソウデスシ。

わーい、天使の仲間ゲトー（∥、▽、∥）

・・・なぜに白銀の鎌？

まあ置いといて

「なまk・・・じゃなくて仲間ふえたぜよー」

「またか！」

ひどくね？

「ファルデ・ロイラ、テンシヲシテマス。コレカラヨロシクオネガイシマス」

『かわえっ！』↑ルーク、ムート、クゼット、ヴォギー

たしかにかわいいよねえ・・・でも白銀の鎌っていうのがt（ry

「まあ、よろしくたのむよ」

て・か、ルークが鼻血ブラボーした岩からちーっともはなれてないんですけどwww

「・・・そろそろいかねえか？」

「コレデハツギノマチマデカナリカカリマスネ・・・カミサマカラフウリヨクヲカリテキマショウ。ハヤクススミマスヨ。」

「おー、たすかるー」

休憩タイム終了っ

みんなが馬車に乗り込み、ファルデがくそ神から風力をかりて馬車

はぐんぐんすすんだ。

・・・カオスな光景だ・・・

馬車を引く馬なんかいないのに走ってる馬車って・・・
カオス過ぎる・・・

旅の始まり

だけど・・・(後書き)

ふはは、ずっと俺のターン！

・・・な感じに裂けるチーズ食いながら更新したブラハです

ここでお願い！

更新したものを見たら、感想のほうに次話のこうなってるのをみたいとかのネタください！

ネタ無くて困ってるんですww

今日は中学の友達が鼻血ブラボーの話をしてたからそれを取り上げてみましたwwww

ネタを恵んでください(m。|。m オネガイシマス

チーズうめえ
・
・
・

チーズは世界をすくう（前書き）

はろー、テンションハイなブラハでいす

今回は12人の方がネタをくれたのでクロスしてだしますい（Ⅱ、Ⅶ、Ⅱ）

チーズは世界をすくう

ファルデサイド

フウ、サツキカラ砂漠バカリ続キマスネ・・・
コノ埃ッポイ臭イニモアキテキマシタ・・・

「むー、暇だな」

スズカガ言ッテ伸ビヲシマシタ。
ソノアトニ、バックカラナニカ・・・

「アッ！！！」

「うおいっ!?!」

キイロイ物体・・・ソウ、チーズデス！！

「ソレ、ワタシニクダサイ！」

「あ、うん。」

「一生カンシヤシマス！！！！！」

チーズヲクレルカタハ、一生ワタシノ加護ヲウケルコトデショウ
ソシテ、チーズノモトノ星ニハ多大ナル感謝ヲ・・・

「なあ、ファルデ。」

「ナンデショウ、ルーク」

「オオオー！！」

「（がたがたぶるぶる）」

「ア、ソウダスズカ、馬乳ノチーズモナカナカ美味デスヨ」

ちらっ

「え、おいら！？おいらオスだよ！？」

「メスつれて来い」

「え、んな無理強い・・・」

ぎらっ

「はい、今すぐにつれてきます！！！！！」

「・・・なんか振りかざした人ー」

しーん

「・・・やっぱ、ファルデしかないよね」

「チーズノタメデス！」

「同感」

「（がたがたぶるぶるぶる）」

「一つよいか？」

「お、新鮮だな、ブルフが意見するなんて」

「・・・アヒルの乳からつくるチーズも美味だと聞いた事がある」

「スズカ、イキマシヨウ！」

「のぞむところよ！」

「エ・・・ット、ブルフ・・・？」

「ああ」

「ワタシノ加護ヲサズケマシヨウ」

「ああ」

クゼットサイド

なんでおいらが・・・

「こんなことしなきゃねーんだよおお!!」

あっなんかとぶっ!

完

スズカサイド

あっ

いま思いついたよ、もう・・・
そうだ、

「呼び寄せの術!」 (ナルトのミニパクリ)

ひゅー

「いってえ!」

「よし、次の町へ急ごう」

「そこスルーしないでよ!」

「ゴーゴー♪」

暫く馬車に揺られて。

「よし、着いたぜーえ」

「ツキマシター、サア、マスター。アニマルフレンドヲ！」

「おうさ！」

（ザ、
アニマルカモン！）

١٠٠
 ١٠١
 ١٠٢
 ١٠٣
 ١٠٤
 ١٠٥
 ١٠٦
 ١٠٧
 ١٠٨
 ١٠٩
 ١١٠
 ١١١
 ١١٢
 ١١٣
 ١١٤
 ١١٥
 ١١٦
 ١١٧
 ١١٨
 ١١٩
 ١٢٠
 ١٢١
 ١٢٢
 ١٢٣
 ١٢٤
 ١٢٥
 ١٢٦
 ١٢٧
 ١٢٨
 ١٢٩
 ١٣٠
 ١٣١
 ١٣٢
 ١٣٣
 ١٣٤
 ١٣٥
 ١٣٦
 ١٣٧
 ١٣٨
 ١٣٩
 ١٤٠
 ١٤١
 ١٤٢
 ١٤٣
 ١٤٤
 ١٤٥
 ١٤٦
 ١٤٧
 ١٤٨
 ١٤٩
 ١٥٠
 ١٥١
 ١٥٢
 ١٥٣
 ١٥٤
 ١٥٥
 ١٥٦
 ١٥٧
 ١٥٨
 ١٥٩
 ١٦٠
 ١٦١
 ١٦٢
 ١٦٣
 ١٦٤
 ١٦٥
 ١٦٦
 ١٦٧
 ١٦٨
 ١٦٩
 ١٧٠
 ١٧١
 ١٧٢
 ١٧٣
 ١٧٤
 ١٧٥
 ١٧٦
 ١٧٧
 ١٧٨
 ١٧٩
 ١٨٠
 ١٨١
 ١٨٢
 ١٨٣
 ١٨٤
 ١٨٥
 ١٨٦
 ١٨٧
 ١٨٨
 ١٨٩
 ١٩٠
 ١٩١
 ١٩٢
 ١٩٣
 ١٩٤
 ١٩٥
 ١٩٦
 ١٩٧
 ١٩٨
 ١٩٩
 ٢٠٠

うわ、こりや相当の数来るな

暫く周りを見ていたら動物達が集まってきた

「うおー、すげえ！」

- 種類豊富な

まず代表的な、にゃんこ！

『にやあああああ』

「にゃーん」

次に、**小型鳥**！

『ピュルルル、ピヤーピヤー!!!』

んで、次が、小型4足歩行生物！

✱✱✱✱✱✱✱✱✱

そして・・・馬に驚鳥に驚にたこに・・・ん？アヒルはいるべ、これは・・・

「ストライトだ！」

なぜここに？

まあ、スルースルー

おほう、カラスアゲハだあ
いいねえ、可憐だねえ

「スズカ! スルーすんな、このうずらとんかち!!!」

いま「うずらとんかち」っていった?

「だ・・・だからなんだあ？」

「鶉馬鹿にすんなや――――！！！！！！！！！！」
「そこかいっつ！！！！！！！！！！」

スーパーフルボツコターイム

※効果音のみでお楽しみください

「ゴツ
ゴツ
ゴツ
ゴツ
ゴツ
ゴツ」

「ドシツドシャー」

「バゴオオツ」

「・・・グバツ・・・グバツ・・・」

「げしっげしっ」

「ザクッ」

ザクッ？

「イヤ、ウズラッテカワイイジャナイデスカ？ バカニシテイルコト
ニイラツイタノデ・・・エヘッ」

ナイス。ナイスだ、ファルデ。

むく、コソッ

フルボッコタイムはここいらで・・・ってあれ？ ブラウがない・・・

「自分ちのブラウ知ってる、ザ、アニマルー、手え、あげろっ」

ザッ

「よし、一番早かったと思われる、そこの白いインコ！」

「キュ、キルルル、キョキョルルッ」（全身タイツの青年が麻袋
に入れてその路地に消えた）

「おけい、有難う」

なんとなくだけど・・・ストライトの気がする

「あっ」

「やっぱり・・・」

「おまえかー！ー！！！」

てかもう復活したんか、はええなあ。

第2回フルボッコタイム突入

どんなふうになったのかは、みなさまのご想像にお任せします

チーズは世界をすくう（後書き）

（Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ）にゃん

鬱だ、生きよう

ストライト事件からストライトは一切自分たちの前にくることはなくなつた。

「そうとうトラウマになつたんだろうな・・・ボソツ」

ガルルル！

ヒヒイン？

だれもよんでねえよ・・・

グルル・・・

ヒヒイン・・・

あーせっかく来たんだからゆっくりしてっいいZE

「・・・ルークう、リーダーが脱線してるよおお・・・」

そして事件のたびに起こるフルボッコの果てにムートはびびりになった（え

まあ、置いといて

ってか最近良くつかうなあ

まあ、置いというて（またかつ

「レッツ、タイガー!!」

ガオオッ

ブルルッ

そして自分は白い虎にまたがり駆けて行く・・・
右肩にブラウを乗せて、頭にヴォギーミニチュア、肩さげバックの
中にブルグフ&クゼットミニをいれて・・・

白い虎（もう虎で良いや）は常人には見えない速さで駆けていく。
あ

いま思い出したけど他メン忘れてきた テヘッ☆
ファルデは・・・いたしw

くんくんくんくん・・・む、焼肉の臭い
金は・・・あるな。よし、買いに行こう

焼肉屋前

「おおふ、うまほー！じいちゃん、10本おくれ」

「あいよー100メリスだ」

「あい、どんじょ」

「またこいな」

ムグムグ・・・美味し

うーん？なんかちょっと草原行きたくなった・・・

（創造 伝書鳩！）

バム バササササ・・・

じいちゃん、目をまるくするの巻

かきかき 草原にいます 探さないで下さい っと

伝書鳩の足にくっつけて・・・ルークに飛んでいけい

「転移っ」

自分は町のそとの草原に転移した

―ルーク―

バサササ

「ん？鳩・・・足になんかついてるな」

「ルーク、それ紙じゃなあい？」

「んーっと、なにになに 草原にいます 探さないで下さい スズカ
あそう。」

「じゃあ、どっか食べに行こうよ、ルーク。」

「ああ、そうだね」

―スズカ―

だだっ広い。青い草が風になびかれ・・・ってデジャヴ。
かかを少し浮かしたけっこうきつい体制になる。無意識で。

あっとおもったときにはもう自分は駆け出していた。

だんだん前かがみになって走っているのが自分でも分かる。
ついに手が地面に着いた。

そのまま、四つんばいで走っていく。

鬱だ、生きよう（後書き）

そしてここでいったん切るといふ、興味をそそる書き方をする

スズカ、新たな体技を得る（前書き）

ふざけたタイトルにしてみたり（||、▽、||）

スズカ、新たな体技を得る

四つんばいで駆ける。

速く、速く、速く――

そう無意識のうちに願う。

速く、速く、速く――

そうして暫くして自分の身体の異変に気付いた。

尻尾がある。

手は毛に覆われ、肉灸が・・・っておい

でも、肉灸やらなんやらを見てて、猫じゃあないんだよ。

斑点模様の毛並みーの、鋭い爪がありーの、尻尾が太いーのなのよ。

イコール、豹

でも毛並み白いからユキヒョウだ

でもなー・・・速さでいけばチーターだよ

まあ、置いといて

これは獣化だなうん。

いんやーアニマルフレンドだけでなく、獣化も得とくしちゃった。

やっぱ、チートだなあ、自分。

不老不死だし（＼＼、＊）

よし、得とくしたからには解除方法もしつとかなと

（獣化、解除）

フッ

お、なおた

（獣化）

フッ

おお

ええな、こっちの身体の方が動きやすい。

まちにこんままいってみつか（||、▽、||）

「ファルデー、帰ろう」

「スズカ・・・マタアタラシイノウリヨクヲ・・・マア、イイデス
ネ」

（転移 ルークのところに指定）

フッ

転移

はい、こう、ルークの前に現れたわけですからねども。

「わわわわっしっしっい」（びくびく）

「あわわわわわわわわ」（がくがくぶるぶる）

なんとまあ、分からんようですな

そこに座って。

「スズカだよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「「ええ!？」」

「新しい能力得とくしますたー」

「うわあ、強そうだね」

鍵爪を

チャキ

「うわわあ」

「リーダー、怖い」

「（ニタ）」

とまあ。個室のレストランだったから誰にもばれなかった。

ピンポーン

→自分がボタン押した音

「はい」

「あー、店員さん、このビーフステーキください」

「ひゃああ!?!?・・・お客さん、ペットは禁止ですので・・・ヒャア」

戻ったわけだ。

ビーフステーキで

「あわわわわ・・・失礼しましたっすね？ただいまお待ちします」

すげえ・・・接客すげえ・・・

（獣化）

さて、また驚かすか・・・

まあ、来て、案の定驚いて。かぶりついて一口。
ルークたちはもう済ませていたからレストランをでた。
金？自分のおごりさあ ああ、なんて優しいんでしょう

とりま、宿をとった。

やばい、獣化気に入った・・・

スズカ、新たな体技を得る（後書き）

あつたらすい能力追加！

獣化

それとともに

- ・ 体力増加
- ・ 物理攻撃力増加
- ・ 聴覚発達
- ・ 嗅覚発達
- ・ 脚力発達
- ・ 予知能力追加

とまあ、プラスプラスですおへpへ；

神秘なる白龍 前

まあ、宿とって次の朝

「あれ、ヴォギーいねえ」

「え？」

「あれえ、昨日リーダーの横で寝てたのみたよお」

どこいったんざましょ

ーヴォギーー

鉦山ー

「なんにもいわないで来ちゃったけど・・・まあ、いいか」

僕は鉦山の頂上目指して飛びつづける

頂上

やっぱり・・・あった水晶

ヒタ・・・

鼻面を水晶に触れる
すると僕の身体は光りだす
光が収まらないうちに――

――意識が切れた

――スズカー――

え・・・と、なんか嫌な予感がする・・・

気のせいかな？

――ヴォギー――

目を覚ますと、そこは雲の上
周りには先祖から僕たちを見守る古龍たちがいて、
うつぶせに倒れている僕を暖かい目でみている

――グガアアアアアアアアアアアアアアアア――

耳に響く咆哮が激しく響いた。

これは・・・？

近くにいた古龍が

「・・・ヴォギッシュよ」

「はい？」

「お前には戦ってもらおう」

「^?」

「白龍神の従龍が暴れだしてな．．．いまいる龍のなかでお前が適任とされた」

「僕……ですか？」

「ああ、そうだ。お前ほどの力量があれば死にはせんだろう。さあ、行ってくれ、すまん。」

「ああ・・・はい、まあ・・・」

古龍たちが道を開けてくれた。

進んでいって見たものは、**暴れ狂う黒龍――**

ブラツクドラゴン。

白龍神の一番の従龍であり、戦友、そしてライバルだと言う。統率力は白龍に劣るが、力量など、戦う術については白龍のずっと上だ。

まわりには4匹の古龍の骸・・・それに血溜りが雲の上にある。白龍神は離れた所で様子をみている。

「ヴォギツシユよ、止めてくれ、黒龍を……」

「はい
この命を捨てて挑んでみます」

僕は黒龍を止めるべく、暴れ狂う体の首下に噛み付いた。

「グオオオ・・・グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

身をよじって僕を剥ぎ取ろうとするが、僕の噛み付きは離れない。そのうち、黒龍は雲に僕の頭を打ち付けて取ろうとした。

「ガアアアア」

雲はやわらかいイメージがあるようだが案外そうでもない痛い。目眩がしてきた・・・

「カハッ」

僕は目眩と頭痛、足の痺れに耐えられなくなり、噛み付く事をやめてしまった。

黒龍はそこをついた。

バクッ

ギリギリギリ・・・

「グアアルルル・・・」

黒龍は僕の頭部に噛み付いた。

実際ものすごい痛い。どんな傷ができている事やら・・・

ガリッ

足で蹴った。

足の爪が黒龍の鼻に当たったみたい頭部の重みがなくなる。

さあ、反撃だ

ついこないだにレイ・ツアibelさんのところにスズカたちと一緒にいったら、

リンチされた・・・まあ、それで手に入れたこの技

神秘なる白龍 前（後書き）

前と後に分けた
続きはいつか・・・なんちゃって

神秘なる白龍 後

——オオオオオオオオオオオオオオオオオオ・・・——

黒龍は叫ぶ

何かに悲しむように

黒龍は叫ぶ

何かに伝えるように

黒龍は叫ぶ

何かに怯えるように

黒龍は泣く——

——この世の為に——

その途端、雲の上の世界はガラリと変わった。

龍たちのすみやすい地形に。

龍たちのいきやすい地形に。

黒龍はその場に力なく崩れた
口元に優しい笑みを浮かべて。

―ヴォギー―

僕はだまって見ているしかなかった。

黒龍が急に僕の頭を離して叫んだから。

だれも動けなかった。その威圧する声に

崩れた黒龍は死んだのだと思う。

ただ、一つの黒い光を残して。

「クギャア」

黒龍の骸の下から、小さい黒い竜が現れた。

「黒龍・・・そしてお前は黒龍の生まれ変わりなのだな・・・」

白龍神がつぶやいた。

やっぱり、友の死は悲しいんだろう、そう思う僕の頬にも涙が流れていた。

暫く沈黙があった。

僕はそろそろ帰ろうと思って白龍神に頭をさげ、後ろに向いた。

「ヴォギツシュ・・・お前に黒龍が残した力を預けよう」

白龍が急に言った。

僕が何も言えずに固まっているのに対して白龍は歩み出る。

白龍は僕の真後ろに来ると、首に甘噛みした。
浅く小さくできた傷から魔力やら何やらが流れ込んでくるのを感じた。

流れ来るものが途切れた時に白龍は僕を放す。
すると身体が光りだした。

「第3進化が始まったか」

第3進化。

元はといえばそれをするために鉱山に来ていた。

龍から竜へ

そして今回は――

光が収まると僕は吃驚した。

翼が4枚に増えていた。

身体は一回り大きくなり、色は灰色。

翼の色は右2枚が漆黒、左2枚が純白だった。

「おお、こりゃ凄い竜になるのを神さん、出したな？」

スズカが転星するときの神様だ、きっと。

僕は今度こそ帰ろうと白龍神に頭をさげ、雲の上に来た時の場所に移動した。

帰る方法はわかっている。意識を落とせば良いだけだ。

「クギヤアア」

うつぶせになったときに黒龍が崩れ落ちたときに生まれた竜が、白

龍がついてきた。

まだかえれんのか、とか思いつつ見る。

「すまん、こいつを連れて行ってやってくれ」

「はぁ・・・。」

「クギヤアアア!!」

「よし、ならば行け、もういう事は無い。じゃあな、ヴォギツシュ。」

僕はうなずいてから意識を落とした。

― 鉦山

水晶前に帰って来た。

横にはブラックドラゴン（ミニ）が寝ている。
名前・・・どうしようかな。

よし、トウリーにしようかな

「チビ、お前はトウリーだよ。これからよろしくね」
「クガア！」

んまぁ、戻ろうか

― スズカー

あっ・・・

危険は去ったみたい

てか前からくる魔力はなんだろう、ヴォギーのような気が
あともう一つなんかいるな。

「あっ、スズカ！」

「ヴォギー！？その翼いったいどうして「進化してきた」おおうふ」
「くぎゃあ」

「それとこのこ、トウリー、仲間にいれてあげてよ。ちなみに僕が
名付けおY「つか、かんわいっ！」」

ちよつと・・・なんなの、かわいいしWWW

「ザ、伝書鳩の術！」

バササ

かきかき

きゅっ

バサササ

ルークは自分と反対方向に探しにいった為伝書鳩、ふたたび

暫くして

「おお！？・・・なんだ、ヴォギーか」

「ちよつと！？」

「うわあ、なんか・・・可笑しいなあ、かつけえ」
「可笑しいってなに!？」

まあ、置いという

もう日も暮れたので宿に。

ファルデとの会話

「ヤッパリ、スズカノ仲間ハチートナンデスネ。」

「とかいうお前も天使というなのチートだけどね!」

『アハハハハハハハハハ・・・』

宿が恐怖に包まれた瞬間だった。

神秘なる白龍 後（後書き）

フハハハ、後悔はしていない！

怪物の中に落ちたんですね、分かります 1 (前書き)

今回長い割に少ない

怪物の中に落ちたんですね、分かります 1

パ
ク
ッ

「リーダー!?!」↑ムート

「スズカー!?!」↑ヴォギー

「どうしたのd...っ!?!」↑ブルフ

「スズカあっ!?!」↑クゼット

「クオン?」↑ウィッグス

。・十。・。・十。・*。・十。・*。・十。・
。・十。・。・十(、△、*)

「たたた...どこだよ、ここ」

ハイ、さっきはお聞き苦しい台詞を言っ
てしまいすみませんでした!
...とりま、置いといて

どこやねん、ここ。

目の前には約20個の分かれ道
後ろには縦に伸びる穴

さっきは食われました、なにかに。
ばくつと。

町...ってか町外れの公園にて草原に根っ
ころがっていたところ、地
面にきれつが...

バグツみたいな。

だからここはたぶんデカイ生物の腹の中

入り口おおい...

なんなんだ、この生物

どっかで見たこと...

あっ

作者がやってるラテー○に出てくるモンスターの腹の中だ！
ベヒモスをパクッたんですね、分かります

…入り口こんなにおおくねえぞ？

迷宮だな、きつとこりゃあ

怪物の中に落ちたんですね、分かります 2

「どれーにーしーよーおーかーなーのーなーのーなーすーびー」

神様のいうとおりが抜けてる？ほっとけ。

とまあ、決めた入り口

右から16番目

あれ？左から5番目っていったほう早かったしWW

とりますすみましょう

ちゅいいーん

おう？

奥で何かの音。

ちゅいいいいーん

進めば進むだけ音が大きくなる。

「おう？」

なんか開けたところに出た。

「む？」

居たのは20代くらいの男の人

「ああ、子どもか・・・っておい、何故に？」

「いやあ、食われました」

「おお、俺もだよ、食われて7年目ってとこかな」

「まじで？」

「ああ。」

でれんと？

「んで、君は？」

「えと、スズカ・神藤です」

「おおお、にっほんじゅんな響きだねえ」

「へ？」

「俺は坂部サカベシグレ時雨ってんだ。君も転移者？」

「も、って・・・まあ、そうです」

「おおおー、ほかにもいたんやな」

なぜに・・・なんだっけなんとか弁。

・・・じゃなくって

「地球の日本から？」

「ああ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・仲間やないけー!!」

「おお!？」

「これから出るために何とかしましょう!」

「ええ? あ、うん。」

と、言う事で怪物から出隊が結成された瞬間。

「まあ、7年・・・食料ってどうなってるの!？」

「いんやー、流れてくる物だね」

「うわあ・・・」

だめだ、どうしよう、とてもそんなモンくえん。

一応女子だもの。

怪物の中に落ちたんですね、分かります 2（後書き）

同じく転移者、登場

時雨は主人公スズカと同じくらい重要な人になる。

予定。

怪物の中に落ちたんですね、分かります 3 (前書き)

一回書いたけど消えた…

時雨の容姿

髪…灰色 というか銀髪

目…ライトグリーン

服…黒いパーカーの下に灰色のアディダ○の英語Tシャツ

顔…整った顔立ち オサレめがねのレンズが細いのを掛けている

体系…ガリと普通の間

性格…めんどくさがり&優しい&気を使う (疲れない程度)

かな・・・？

怪物の中に落ちたんですね、分かります 3

—ルーク—

ふわあ…

「いい天気だなあ」

「だねえ」

「うむ」

「だな」

「天気が続けばいいのに」

「クオン」

スズカどうなってるかなあ

—スズカ—

ふわあ

（ふわあ）

ん？

（やほい）

…だれだ？

（作者。）

…？

「どした？」

「いや、なんでもない」

（なんでもなくないよーお）

…

「さて、どうここから脱出するかね」

「んーん…勘で行こう」

「賛成」

とまあ、食われてから一週間は経った。
ちなみに食われてから何も食べてない。無理。
そして腹の中と時雨に慣れた。

…？

ああ、まだ大丈夫、犯されてはいない
いやあ、どうも、じとじと見てくるからね。

じゃなくて

「よし、スズカ。準備は出来たぜー」

「あいすー」

自分が入ってきた道と反対の道に進んでいく。
歩いているうちにモンスターな奴が出てくる。

・・・？

ああ、もちろんなぎ倒しますけどね。

出てきたーばっしい

出てきたばっしい

出てkばっしい

出tばっしい

dばっしい

とまあ。

時雨は戦う素振すら見せず。

後ろでぼけっとしている。

自分はさっきのようになぎ倒し、進む。

武器は爪牙。

…獣化してますけど何か？

今回はオオカミさんです

なかなか使いやすい。

爪で切り裂き、牙で引きちぎる。

モンスターは雑魚だが、チリも積もれば山となるというように大量。

「ああ」

「ん？」

「腰いてえ」

「頑張れ。」

なにその自分関けーねーしみたいな。

まあ、荷物持ってもらってるわけだけど。

ヒクッ

鼻が何か臭いを捕らえる。

耳を澄ませばヒタヒタと音も聞こえる。

なんだろう？

静かに進む。

ここいらのモンスターは全部殺った。

あんしーん、らくちーんなかんじでww

進んでいくと広い所に到着
くせえ

胃液じゃね、この黄色いの。

まあ、泳がなくてもいいしw
バリア張っていけばok

「胃液の中潜るから？」

「え」

「あーバリアはるし。」

「ほっ」

「んじゃ、自分に近づいて。」

「∴」

近づいた所で小さく『バリア』とつぶやく。
ちなみに獣化のままでも使える。

バリアなっただところで胃液の海に

どぼん

うっわ、

「きたねえ」

「ちょ、タンマ」

「うっわ、ここではかないでよ!？」

「うおえ…」

「しおーがねーな『ヒール』」

「うぷ…おおう」

こうでもしないと自分の身が危ない。とくにプライドが磨り減る

そんな感じで胃液海をもぐっていくと案の定穴発見。

道なりに進んでいけば、○○○となってでていくっしょ。

腸に入ってから丸いバリアはころころところがり、自分たちもころころ転がる。

まあ、ぶつかるわけだ。

時雨は赤面。

・・・ごめん、意味不。

ころころのスピードが落ちてきた。

「うにゅ」

目がまわるう

時雨はすでに気絶。

まあ、ほっところ

ここまで来るまでにサレコウベがいくつもあった。

たぶん、昔食われて自分たちのように外へでれなかった人たちのものだろう。

フルフルと頭を振る。

ころころが止まった。

でも動いている。

たぶん流れに乗ったかな？

寝よう。

ころころの時間がやけに長かったから一日はかかっているはず。

眠い。おやすみ・・・

―時雨―

「俺復活！」

俺は飛び起きる

俺は下を見る

俺は二度見する

俺は赤面する

俺は2828する

スズカが睡眠中

規則正しいリズムで胸が上下している。

寝顔がとても愛らしい。

襲ってしまおうか

いやいやいやいや、相手は12歳、まだまだお子ちゃま・・・

でも誰もいないし・・・

いやいやいやいやいやいやいや、そう言う問題違う

寝顔がやばい・・・理性が・・・

だめだめだめだめ

キスくらい・・・

いやいやいやいやいや

と、悩んでいたら起きちゃった

「なした？・・・ふぁゝああっ」

赤面する俺。

・・・スズカは鈍感だ

―スズカ―

あー寝た。

起きたら時雨が変な目でみてたけど治った。
考えている事は分かる。

あの目はねえww

まあ、読者に一言

思ったことは即行動に移せ。

このヘタレめ

・・・読者って？

怪物の中に落ちたんですね、分かります 3（後書き）

獣化はスズカが熟睡すれば勝手に解けます。

PS..ほんのりピンクというより時雨が勝手にになりました

怪物の中に落ちたんですね、分かります 4 (前書き)

50話で登場人物整理

懐かしいあの人もでてくるよてい

そしてこれ書いたときはは学校いく前W W

怪物の中に落ちたんですね、分かります 4

—スズカ—

まあ、出たわけだ、外に。

どうゆうわけか、海底

バリアのまま浮上する。

「うわーーーーー」

「なんにゃ」

「まあっぶしす！」

「こここの海だろ」

「スルーか、スルーなのか・・・まあ、陸行こう陸」

「すすめー」

ざばざば

暫く何もなくバリアの下から海を見つつ移動

さつき、ジンベイザメ的なやつが泳いでたよ。

・・・逃がすわけじゃないでしょう？

とっ捕まえて、バリアを広げ、刺身から揚げ、丸焼きてきな。
んまかった・・・なんせ何日も食ってないからね。

残った骨は海底に沈めた。

「ふいー食った食った」

「どっから出した爪楊枝でしーしーやんのやめてくんないww」

「いやいや、日本にいたときからの癖なんだよねww」

「でも自分もよくやるww」

「ちょww」

「お」

「お？」

「陸」

「おお」

「が見えな」

「えw」

「くもない」

「どっちww」

「見える。でも・・・蜃気楼見える」

「へ」

「あつついのいやだなー・・・あ、そっか転移すればいいじゃん、ほら、近づけ」

「転移もできるのか・・・人間じゃねーw」

「転移ールークのところ」

シュン

ー時雨ー

まあ、転移したわけだ。

目の前には青年が。

赤いハンチング帽の青年。

スズカをみて泣き笑いしている。

・・・好きなんだなWWWW

俺も人の事いえねーWW

さて、みんなを驚かせるかね

キャラメルリボン(前書き)

題名に意味はない

キャラメルリボン

—ルーク—

「おがぁえめいrぐえ」

かえってくるなり殴られた

スズカが目の前に現れ、思考停止。

で、泣き笑いでおかえりと言おうとしたら、殴られた

ひどいい・・・

あ？

スズカの後ろに人がいた。

銀髪の青年。まあ俺より年上みたいだけどね。

「初〜」

その人が話し掛けてきた。

・・・初？ああ、初めましてってことか。

「初めましてっす」

「えーと、これは「これは・・・ないよ・・・」・・・コレは時雨・坂部。19歳のどあほ」

「時雨、よろしく！」

「こっちがルーク・フローン、18歳。」

「しっちゃんってよんでもいいー？」

「こいつはムート・レヴィツダで11歳のやんちゃといえばやんち

やの餓鬼」

「「「よろしく(たのむ) (ねー)」「」」

「こいつらは使い魔三人集で左から、クゼット、ブルフ、ウィツグス。で、こいつが」

「スズカの使い魔ヴォギー。ちなみにこの姿はちがうけどほんとに竜ね」

「・・・スズカ、お前の仲間は凄いな。」

「まあね、なんかの縁だし一緒に来るんでしょ？」

「まあ、な。」

「おー、時雨もくんのか「しーちゃん!」・・・ムートは懐いたようです」

ムートはもう時雨にべったり。

・・・同じ匂いがするのは気のせいかな？

まあいいや

ースズカー

一通り紹介は終わったし、調味料がもうないから買出しに・・・
いいや、めんどくさい
あ。

「そういや、言うの忘れてたけど時雨は転生者ね。」

『ええー』

「ふむ、やはりそうであったか。スズカと同じ匂いがしていたからな」

「へー」

「俺、それ言おうおもってんに・・・、まあいいや、よろしくたのむな!」

―ルーク―

宿に行ってから、まー、部屋の振り分けはあれだ、男は男で使い魔とスズカは一部屋
・・・ヴォギーも男だね？クゼットも、ブグルフも・・・ウィツグスは分かるけど。

まあ、時雨を呼ぶわけだ

「時雨。」

「お？」

「好きだろ？」

「ぶふおっ！！いきなりなんやねん」

きったね

掛けられた。紅茶。それを拭きつつ。

「スズカ。」

「あー、それね。まあね。」

「仲間。」

「まじでーwライバル出現イベントとか聞いてないしw w」

「あんたも能力とかあったり？」

「現実的なものの創造だね。その副作用で材料とかが見える眼になっ
てしもた」

「ほー」

だから色がちがうんか

置いといて

「時雨ってスズカと何処であつたの？」

「怪物の中」

「・・・ああ、食われ・・・時雨も食われてたんだ」
「7年前にね」

「マジか！wよく生きてたなあ。」

「悪運が強いんだよ・・・」

「まあ、頑張れ」

キャラメルリボン（後書き）

題名に意味はない

大切な事だから前と後にわけて2回いいました

ハーフ&ハーフ 人物整理（前書き）

題名に意味はない

ハーフ&ハーフ 人物整理

いやはや、早くも五十話。

スズカ「だねえ」

これも皆様のおかげ・・・

スズカ「だねえ」

まあ、目標100話なので、半分いったーっあっ！てかんじで。

スズカ「人物整理を、でしょ。」

んじゃ、どぞん

＊。・＋。・＊。・＋。・＊。・＋。・＊。・＋。・
＊。・＋。・＊。・＋

＊＋主人公＋＊

☆神藤スズカ

歳..13才 (誕生日迎えました☆)

性別..女(一応)

性格..基本的寛大。 男勝り

特性..アニマルフレンド・・・動物と仲良し

獣化・・・動物（架空でも）に変化できる。寝ると人型に戻る

不老不死・・・老いる事も死ぬこともない

特徴.. 黒い服装 怪力 黒髪

武器.. 何でもおk 魔法類

＊＋仲間等＋＊

☆ルーク・フローン

歳.. 18歳

性別.. 男

性格.. 味方には優しい

特性.. 何事にも動じない 事はない。

特徴.. 赤いハンチング帽 金髪よりの灰色髪

武器.. 短剣、弓、片手剣

☆ムート・レヴィッダ

歳.. 11歳

性別.. 男

性格.. 臆病

特性.. 危険察知的な勘

特徴.. 赤髪のショート

武器.. 双剣

☆坂部時雨

歳.. 19歳

性別.. 男

性格…引っ込み思案 優男 めんどくさがり
特性…創造 透眼
特徴…銀髪 ライトグリーンの眼 レンズの薄いオサレめがね
武器…ナツクル

☆レイニー・フローズ

歳…20歳

性別…女

性格…おおらか 強気

特性…2人で1人（ある人がいないと力を発揮できない）

特徴…朱髪

武器…短剣 魔法類

☆エドモンド・ベリアル

歳…21歳

性別…男

性格…無邪気 大人っぽい

特性…てきぱきと対応できる

特徴…緑っぽい髪 紺のマント

武器…両手剣

☆ファルデ・ロイラ

歳…不明

性別…女

性格…ポーカーフエイス（性格？）

特性…天使の加護（↑を受けた人は敵からの攻撃を防げたり・・・
まあ、プラスになる事）

特徴…天使。淡い水色髪
武器…白銀の鎌

☆ブリズ・ミュシリー

歳…12歳

性別…女

性格…強気

特性…見下すように喋る

特徴…金髪 ミュシリー王都の第一王女

武器…近兵（ハ、マ、*）

+使い魔等+

*ヴォギツシュ（ヴォギー）

スズカの使い魔

竜。

性別…♂

性格…せっかち

特徴…人型時〜黄褐色髪 金眼 竜時〜灰色 翼が4 右2||漆黒

左2||純白

武器…爪牙 尾 翼 魔法

*ウィツグス

スズカの使い魔

狐。

性別…♀

性格..気遣い屋

特徴..九尾 銀ぎつね

武器..爪牙 魔法

＊ブグルフ

ルークの使い魔

狼。

性別..♂

性格..頑張り屋

特徴..昔風な言葉遣い

武器..爪牙 魔術

＊クゼット

ムートの使い魔

炎馬。

性別..♂

性格..タフ。

特徴..タフ。

武器..炎系の魔法 蹄

＊トウリー

ヴォギーのペット的存在

黒竜。

性別..♂

性格..無邪気

特徴..チビ。

武器..爪

＊ブラウ

パーティーメンバーの癒し的存在
黒猫。

性別…♀

性格…人懐こい 甘え上手

特徴…黒猫 グリーンの眼

武器…かわいさ（∥、▽、∥）

＊ルー

騎馬ドラゴン。

性別…♀

性格…人懐こい

武器…爪

＊ラー

騎馬ドラゴン。

性別…♂

性格…強気

武器…爪

＊＋その他＋＊

＋シャーグル

銀龍。生命の循環が仕事

+グレインド

金龍。生命の循環が仕事

十ブリズの付き人

殺氣がヤバイ

$\ast_{\circ}$	$\ast_{\circ}$
$\cdot$	$\cdot$
$\vdash_{\circ}$	$\vdash_{\circ}$
$\cdot$	$\cdot$
$\ast_{\circ}$	$\ast_{\circ}$
$\cdot$	$\cdot$
$\vdash$	$\vdash_{\circ}$
	$\cdot$
	$\ast_{\circ}$
	$\cdot$
	$\vdash_{\circ}$
	$\cdot$
	$\ast_{\circ}$
	$\cdot$
	$\vdash_{\circ}$
	$\cdot$
	$\ast_{\circ}$
	$\cdot$
	$\vdash_{\circ}$
	$\cdot$

あー疲れた

スズカ
「
・
・
・
」

レイニー「お久しぶりね、皆さん。」

エドモンド「おす」

ブリズ「久しゅうなのじゃ！」

ル
ー
「
グ
ル
ル
」

「ラーガルツ」

はあ、手が痛い

久しぶりにこんな書いた。
あ、ごめんごめん。

シャーグル&グレインドは後にまあ、・・・ね？

て、か。

此処まで見てくださりアリガトウございます!!!!!!!!!!!!!!
いや、まじで。

こんなgdgdなモン・・・申し訳ないです
でも書かないとストレスがやばいんで・・・まあ、これからもよろ
しく願います><

スズカ「くそ作者をよろしく」

・・・まあ、いいや

でわ、次回会いましょう！

七夕祭 (番外編) (前書き)

竹くにたんざく、たーなばーた、まあつり
おおいにいーわお、ろーそくいっぽんちようだいな

レイニー「はい、飴玉。」

どもん

ではなく、七夕編でござる。

七夕祭 (番外編)

―スズカー―

「たけーえにたんざあーくうたあーなぶあーたむあーつりいおお
ーういにいいわおーろーそくいっぽおんくうーだすあーいぬあ」(竹に短冊七夕祭り、大いに祝お、ローソク一本ちょうだいな)

まあ、これは日本の北の海の道の南のほうの町で行われるイベントの・・・うん、なんかアレだよ。

七夕祭りって言うんだけどね、竹が飾ってある家にいつてさっきの歌を歌うと、ななななんと、お菓子が貰えるのである。 by
ブライトハート豆知識

補足 ちなみに北海道の札幌と函館だけで行われている。(たしか
(ww))

「なに、その呪文みたいな歌。」

「え、あ、ああーそかそか、・・・んー自分がこの世界来る前のとこのイベントの歌?」

「なぜそこ疑問?」

「俺は七夕しってっけどやってなかったな。どちらかというとハロウィンだったかな。」

「ほーどっちでもいいけど、アレのお菓子の量半端ないよねwww」

「・・・そうか?俺、エコバックの半分もなかったぞ?」

「え」

「それに付け加えるが、毎回毎回、ロウソクが20本以上。お菓子

最大18個。」

「ど、どんだけ〜」

「いかほど〜」

「「・・・」↑ルーク&臆病神

いやいや、時雨、それは少ない少ないww
どんだけとろいスペースで歩いたらそうなんだww

「自分は・・・エコバックで言うとか4つは。」

「うへえ」

「それも全部あふれそうな。」

「うへええ」

「でも5分の3がうまい棒という虚しさww」

「のこりは？」

「ゼリー、飴、ポッキンアイス、ペ○ちゃんの棒飴にピン止め、あ
とはチロル○ヨコと・・・ジュースとかかな。」

「うへえ・・・」

「まだあるけど聞きたい？」

「いや、遠慮します。」

「まあイコール肩が死ぬわけww」

「わかるわww」

「「・・・」↑ルーク等

こっちは転生者同士の会話で盛り上がる。

ルークなどはわからなくてついてこれていないよう。

まあ、そりゃそうだなww

「ハロウィンってお菓子をくれなきゃ意地悪するぞだっけ？」

「・・・たぶん。」

「なにそれww」

「いや、だってこっち来てからわつつ時間経ってるから忘れるしW」

「あーそかぁ。かぼちゃをくりぬいてみたい。」

「あれ見ると可愛そうになってくるんだよねえ・・・」

「ふーん」

やっぱりrなどは会話についてこれ・・・ってもう違う話に花を咲かせている。

rは酷いか？

いや、こんぐらいでいいかな。

七夕やりてえー

そうだ、お菓子を配ろう

「創造、偽まい棒！×50」

「うまい棒ではなく偽まい棒と来たか」

「さあさ、よってらっしゃい、見てらっしゃい！お菓子を無料で配りまっせ〜〜」

自分は露店を開いた。

自分は人に踏んづけられた。

自分は偽まい棒をさらに100追加した。

・・・いつまでこのやり取りが続くのだろうか？

時雨は変な目で見てくるし、ルークはムートと話してるし、ファルデはファルデで露店の宣伝しにいったし、レイニー&エドモンドはもとからみあたらないし・・・

どうなってんだ、こりゃあ？

七夕祭 (番外編) (後書き)

はい、ありがとうございます
w
w

キャラメルリボン 続（前書き）

更新遅れタンゴ。

そすてあどもちっつどで80000アクセスなるでえ！

異世界旅行へ一同「わーー」 （棒読み）

・・・まあいいや

キャラメルリボン 続

―時雨―

朝起きたら…

尻尾が生えていた。

ちよ、そのいきなり展開なに！？って思った方。
それは俺のほうですよ。

なぜか耳…それもふさふさしたぬこ耳がつ！！

・・・尻尾？

・・・多分ペルシャ系統の長毛種系。

ぬこ耳も長毛だし・・・しかも白だし・・・

もういいや。

―スズカ―

へっへっへ・・・やってしもた。

時雨に・・・深夜に部屋侵入して特別能力をつくってプレゼンツ。

それは、ぬこ力！（ねこ力）

能力せつめー。

ねこ力とは、ねこ種全般と話ができる。
それプラス、聴覚、嗅覚、視覚がUP！
暗闇行動もちろんばりばり。

あと・・・

短所は、ねこ耳&尻尾がでっぱなしWWW↑しかもペルシャー♪
あれふっさふっさですきなんだよねーWW

はてさて、様子を見に行こうかね。

ー部屋前

ふふふ・・・どうなっているかなあ。

(こんこん)

「あー自分ースズカー」

「・・・(がさごそ)どぞー」

(がちゃ)

うわお。

すげえ。

あ、ルーク・・・じゃなくてムートの寝相がWWW
ベッドだからね。

熟睡できるんだろうね。

・・・時雨やべえWWW

銀髪に白い長毛がWWW

すげえ、いろいろと。

詳しくゆうとー

銀髪に白い長毛ぬこみみ

そして白い長毛尻尾。形的にペルシャ・・・ってどこか（↑意味不

後悔はしていない。

「これ、なんだとおもう？」

「自分のにペルシャ系だね。」

だってそう仕組んだんだもん。

「・・・スズカだね？」

「ちーばれたかー」（棒読み）

「・・・まあいいや。」

「おーふとつぱらー！」

「・・・ペルシャっていいよな。」

「おーおー自分もや！」

それから1時間ほど、ペルシャの長所の言い合いになったらしい。
その間そのた仲間は熟睡中で、びくりとも動かなかったとか。

キャラメルリボン 続（後書き）

うふ。ぬこ耳っていいよね。

え？
(前書き)

突発的なフラグ。
風呂入ってたら頭に浮かんだ。

え？

―スズカー―

時雨に特別能力をつけて、言い合いになって、部屋に戻って、使い魔たちの身だしなみ整えて、自分の身だしなみ整えて、整理整頓して、準備して…

今日はなんとなく出発することにした。

時雨はともご機嫌。

ペルシャ好きでよかった。

ルーラーたちを迎えに行って町を出る。

「あー、あー、あー ただいまマイクのテストちゅー」

「マイク？」

「…俺達の居た世界のものの名前だ。」

「ふーん、あ、そっかしーちゃんも転星者だったっけ。」

他愛のない話をしながら馬車に揺られる。
飽きてきた。

「自分、ちよい寝る。」

「あいさー」

「どっかの村でも着いたらおこすね。」

馬車の運転席的などころにウィッグス、ブグルフを横に装備し、クゼットを枕として。

クゼットあったかいからね。

そんな自分の意識はどこかへ落ちてゆく…

―ルーク―

スズカが眠ってから数時間。使い魔たちも気持ちよさそうにスズカの近くで寝ている。

あ、もちろんブラウも。

俺達は小さな村に着いたが、スズカを起こさず、食料を買い漁り次の村へ出ることにした。

俺とムート留守番。

買出しにいったのは時雨、それにレイニー&エドモンド。

レイニーたちは、なぜか知らないうちに馬車に居た。

気づいたのは村に着いてから。

俺の肩に寄りかかって眠っているムートを見てからふと目線を空へとあげる。

雲はなく、ただただ真っ青な空が続いていた。

時雨たちが帰ってきて、馬車は再び出発した。

さっきよりも遅いスピードで。

スズカが寝ていることは問題ないが、今度はムートも寝ているし、知らないうちに時雨も寝ていた。

ルーラーたちは空気が読めるようだ。

レイニーたちは飽きることなく話を続けている。

俺はといえば、空ばかり見つめていた。

この空はいつまで続くのだろうか、と。

そんなことを自問自答しているうちに意地悪なほど刻は過ぎてゆく。

気づいたら俺も眠っていた。

起きた場所は木漏れ日の下で俺とヴォギーだけ。

馬車は近くにおいてあるからどこかにいったのかと思う。
今動いたらかえって迷子になりそうだからそのままにいることにした。

しばらくするとヴォギーがおきて、

「スズカたちは買い物行ったから。僕は天界に遊びに行ってくる」
とだけ言い残して消えた。

天界：気軽に行っていいものなのか疑問だ。

今日はいい天気だ：もうすこしだけ寝よう：

そしてまた眠ってしまった。

次におきたときはだれも周りにいなくて、馬車がたたずんでいるのみ。

暫くぼーっとしているとふらっと前にある木の影からスズカが出てきた。

：影から？

まったく俺の仲間はおかしい。

竜だったり竜だったり犬？だったり馬だったり能力もってたり能力もってたり獣化したり：

：まあいいや。

スズカは俺のななめ前に来るとしゃがみ、足をのばして座った。

しばらくぼけっとしてから足を三角に折りひざのところに顔をうずめる。

：悩み時かな、と思う。

そして不意に立ち上がり、元来たほうの木の影に向かった。

でも、その前に俺の足が動いていた。

―スズカ―

何も用はないのにルークのどこにいったって、体育座りして考えごとしてからきたほうにもどろうとした。

でも、ルークはそうさせてはくれなかった。

なぜか、自分はルークの腕の中に。

自分はあえて抵抗しなかった。

まあびっくりしたけどね。

自分より背の高いルークは自分の後ろから包んだ。

自分が最後にだれか男の人に包んでもらったのはいつだろうか。多分6歳からはない。

いつもぎゅっとしてくれたのはお父さんだった。あったかった。

でも、今自分を包んでいるのは、異世界の住人、ルーク。

肩から首に回される手を、自分はやさしくつかんだ。

とても温かい。

懐かしい気持ちだった。

自分の手がルークの手に触れたとたんぱっと離れる温かみ。

ルークは一度自分に目を向けてから俯いて馬車に引っ込んでしまった。

ふと自分の胸に手を当ててみる。

：どきどきしていた。

恋すると、その相手の前でどきどきしたりばくばくしたりするって聞いたことがある。

これは・・・恋なのかな？

・・・こんなことを思うのは懐かしい気がした。

え？
(後書き)

…今回、ね雰囲気違うでしょ？
あえてこうしてみた。

…最近乙女ゲーにはまってるからかな…

I t' s . . . なんだろ。(前書き)

…この小説投稿してからも約3ヶ月だか4ヶ月たってんだね…
なついわ。まじ懐い。

I t ' s . . . なんだろ。

―スズカー―

ル、ルルルルりゅーきゅにでいやきしうえらえたんやけづお。
：ちよつとうまつちえしちやいひやい

時間経過

：御見苦しいこといってすみませんでした。
あらためて

ルークの抱きしめられたんだけど。
あのあとは目もあわせてくれなかった。

：照れてる キヤハ↑

てか前回、ぜったいラブコメみたくなってたよなあ？

作者（はいそうですがなにか

おいコラ W

まあいいや↑

まあほんとにそれはいいんだけど、
やっぱちよつと寂しいかな。

作者（作者パワーで「いや結構」：実際そうなんだけどなあ

ふん。

無視傾向でいきませう。

ところで

目の前の状況なんですか？

自分たちは馬車にゆられていて、森にいて、抜けたら：

ゴブリンの群れ。

きもちわるう。

なかには少々オーガもまじってる。

「うおー：ゴブリンとか俺始めて見た」

「あれ、時雨ってデジ○ンストーリーとかやってない？」

「いや、リアルでってこと」

「なるへそ。」

んむ！？

あ、あれは。

トウリーでは？

：トウリー君や、なぜそこに？

「ヴォギー？」

「：トウリーだね。」

「なんでやるか？」

「さあ。」

まあ、

「迎えにいいか」

「そだね。」

「ああ。」

…あれ、いつもの大半の音源の…ってムート寝てるし。
…ルーク、レイニー、エドモンドまで。

ファルデは…おう、どこいった。

「ココニ居マスヨ？」

「いま帰ってきただろ、みたよ」

そらからふってきよった。

まあ、自分の仲間みんなついとだからね。

しかし、仲間に入った当時のムートは強かったのになあ…
臆病神になっちまって。

まあいいや。

トウリー迎えにいいかな。

馬車はゴブリンの中を進む。

…引いてますけどね。おもっきし。

もう血がぶわしゃあああになってる。

…まあいいや。仲間じゃないし。

ゴブリン、憐れな生をまっとうす。(前書き)

社会の宿題やったら書きたくなった。

ゴ布林、憐れな生をまっとうす。

―ルーク―

：見てて気持ち悪い。

右も左も前もゴ布林。

後ろ：あちこちから血を流すゴ布林。

潰れてるのも少々：

吐き気がする。

ムートは寝たし、時雨は：スズカの隣ではしゃいでるし、ファルデはルーに乗ってるし、

使い魔集団は寝てるし：

よくこんながたごといいてるのに寝られるなあ：

ぼー：

にしてもゴ布林馬鹿だなあ：

仲間が引かれてるの見てるくせに馬車に突っ込んでってるよ：
脳みそないんかなあ：

ぼけぼけしながら馬車に揺られて。

トウリーをひろってゴ布林引き地獄からでた。

でも：

追いかけてくる。

やっぱ馬鹿だ。

「あーしつけえーなーゴ布林、この能無しやろう！」

(ばばばばばば!!!!)

スズカはちーと？すぎる。

どでかいバズーカ両手に打ってる。

魔力銃らしく弾の詰め替えもなく。

「ぎああああおおおう」(ばた)

「ぐあえげえええ」(どき)

「ごいああえああ」(ばた)

こんな声あげながら全滅するゴブリン。

ご愁傷様です…てか馬鹿すぎる。

がたごとという揺れが少なくなったからなのか睡魔が襲ってきた。
寝てしまおう…最近寝てばっかだな俺…

—スズカ—

ルークが寝たのを気配で感じた。

いやー、ゴブリンきもちわるww

だって緑だよ？緑。

なにが？…って血がだよ！

打つじゃん、ばばってさ。

したら3秒後くらいには血まみれwwww

こっちも動いてるから返り血も無く。

「ふわああああおおお」

「ずいぶんと大きな欠伸ですこと、時雨さん。」

「うわ、なんか喋り方へんだ？」

「なぜそこ疑問だしww」

「あ、もどったw」

「俺寝る。馬車飽きた。」

「：亜北ネルですかww」

「あwww」

「かわいいよねー。」

「えー、俺ハクの方が。まあもちろん一番は…」

「「リン」」

「っしょ、やっぱwww」

「だよなーwww」

「ほかにも：レンとKAITOは溺愛www」

「マジかww」

「とくにシヨタレンがw」

「そういうキャラかw」

転星者どうし盛り上がってます。

カイメイも好きだよ？

作者（小説キャラは作者のコピー。↑違ってもいいない

・・・作者ほっといいていいから。

なんか盛り上がってるとルークがこっちきた。

：ちよいまって、これねb「(ぎゅっ)」・・・mjd?

後ろから抱きしめられたーww

てか半目ですから。半目！

ぜったい寝ぼけてるってwww

「うわーお、ルーク積極的すなー！」

「うう…うにい…」

「なにこの生物wwかわええwww」

・・・うに？

うにってうまいよね！

じゃなくて。

やっべえ、かわええwww

寝言いってる・・・

「うに…」

「みるふいーゆ…」

「へびいちご・・・」

なんだその食べ物関係www

てかミルフィーユとかこの世界にあんのかw

てか18歳が13歳に抱きつくってなんだよ、それも寝ぼけでww
↑でもテラ嬉しいwww

「こいつのほっぺ、以外に柔らけww」

「お？」（ぷにぷに）

「な？」

「おおww」

「もちほだww」

「あーぷにぷに。」

寝ぼけルークをつついて遊んだ二人。

∴そのときの記憶は自分が責任をとって消去しました。

これは食える？

―スズカー―

そういえば作者ってこの小説はじめたときより書く量増えたわ

作者（そうでしょー頑張ってたよ、結構。親に見つからないようにやんのも大変でさ

だねー。まあがんばれ。

作者（昨日なんてさ、パソコン没収命令出されてよ、まあ、うちの親あほだったからよかったけど。

あー…詳しくはブライトハートのユーザーページの青い空の果てについてブログに書いてあるよ。

…作者そろそろ帰れ

作者（うん、じゃーね

じゃーね

…今のはなんだ？

まあいいや

「グルアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

ヴォギーがほえてます

「グギャアアア」

トウリーが鳴いてます

…いまはヴォギーがトウリーを訓練中。

自分はそばの木陰で見物。

その他の人はモンスター退治…というよりギルドの依頼の物取りに行った。

自分？

めんどくさいのきーらいw

続けられる自信ないwwまじむりぽ。

「ね、スズカ」

「どした？」

「時空リンク出して？」

「あー、okok。」

時空リンクとは

要するにネギま！に出てくるエヴァの別荘のようなもんだ。by作者知識↑

「ゲートよ時空リンクへとつなげ！」

まあごり押しに。ちいせーことは気にするな！
お約束ってモンよ。

呪文？もどきを言いながら心の中で出すようにいろいろセッティングして。

「ほれ」

「おー、トウリーいくぞー」

「くぎゃあ」

「おし、ルークに伝鳩でも飛ばしておくかね」

ぼむ　バささ

かきかき…時リンいつてっから

おけ。

ばささささささ…

「自分もいくかねー」

がちゃ↑ドアを開く音

ひゅうううううう↑落下音

…

……どてっ

…うん、途中でとめれたけど落ちてみたかっただけ。うん。

そんでここは時空リンク。

自分の思い通りの地形にできる。今は滝が目の前にそびえたっていて、その傍らには小さな小屋が。

…お約束でしょ。

「ぐぐぐう」

「おお、トウリー。なぜそんなにかわいいんだい、トウリー。」

「トウリー、…あ、スズカ、今日は何日分？」

「んんん、リア時間3で30日ぶん。」

「おけ、トウリー、ほら行こう。あ、…スズカ、地形を森に変えてくれない？」

「おうけい」

目を瞑ってイメージイメージイメージ：目を開けるともう森。

…ついとだねえ…

不老不死だしねえ…

あ、そうそう最近知ったことだけど、なんかこの体、約20歳くらいまで成長するけどそこまですんなら成長ストップすんだってさ。

まあいいや

…昔に比べてヴォギーがグオーとかグガーとか言わなくなったような気がする。

最初あったときぎゃーすかたってたもんね。

てかブリズ元気がn『ブリズじゃ！なんか念話やらなんやらの開発に成功したぞ！』

…うわさをすればーwww

『あそーう、よかったねー』

『うむ！これでスズカといつでも話せるぞ！』

めいわくーwww

でもないけど。↑ちよつとツンデレ？

『で、スズカはどこにおるのじゃ？』

『んー、…ゆがんだ場所…的なの？』

『わらわもそこへ行くのじゃ！』

『…は？』

『移動ましーんも開発したのじゃ！』

『ほえー…』

『いまむかうからまっておるのじゃぞ！？』ぶつつ

あ…念話きりやがった。

これは食える？（後書き）

まさかのネギま知識 W W W

原作ブレイク作おもしろす W W W

原作ブレイクひゃっほううい！！！！

この小説は原作ブレイク作を応援しています↑なんぞ W W

今更のこのこ出てきやがって!↑(前書き)

タイトルに意味は・・・すこしあるか？

前回のブログ名変えました

修正Ⅱ「命の終わりまであなたと共に」です。

今更のこのこ出てきやがって!↑

―スズカー―

あーひまじやけえ。

時リン来てからリンク内での時間で12日経とうとしてる。

ヴォギーはトウリーを訓練中で近くに居ない。

ちなみにリンクの中は自分の想像内だから無限に広がっていくから行き止まりはない。

で、自分は何をしてるかというと…

製造中です☆↑

んまあ、髪飾り作ろうか思ての。

作者（どーも作者です。ヘタリアにはまりました

あー

作者（なにがどう関係するかといいますと、ヘタリアのノル君が十字架つけてるから、という単純な理由にござんす

…自己中だなww

作者（自己中だしwなにがわるいしw

そこまで言ってないしwwまあ、いいや説明終わったんなら帰れ

作者（おいーす

…ハッ

…？

まあいいや

どんなのを作ろうかな…

考えること0、10秒

シルバーのピンのなやつにエメラルドとアクアマリンのスワロフスキーのストラップ的なものをつけてみた

・・・自分センスあんじゃね？

まあ置いというて

前髪を左に寄せてつけた。

鏡を時空ポケット（お約束ですよ？）から取り出して確認。

おおう、黒髪にアクアマリンはようはえるわ。↑なんぞW W

・・・置いというて、

満足したから読書することにした。

早速木のベンチを作って、座って、楽な体勢探して、本を出して読み始める。

題名は「私と君と」

：

「せつねえええ・・・」

恋愛物で、恋人の男が先に逝っちゃって恋人だった女は男の分まで幸せになろうゆうて長生きすんねん。

で、最終的に男が迎えにきて、ぽっくり。的な。

彼女の生がもう見てらん無いようなやつで：

あーもうなんなんだ、この本。

表紙みるだけで悲しくなってくるぜ。

あーひm「またせたのう！」

・・・あー。くるっていったもんね。

「ブリズじゃぞ！覚えておるか？」

「うっせ、ぽんこつ」

「ふはは、なれたわ！」

ちっ

「して、これは土産じゃ」

ブリズが出したものはいかにも高そうな服。
・・・きらきらふんわりなやつ。

「おお？」

「お、反応したな？これは城下町で作られたものでな、若い夫婦がつくっておったから買ってきたのじゃ。」

「・・・ブリズ、そーいや付き人は？」

「今日はこん。」

「あーよかつた」

あのひとこえーんだよ。

あー暇だ：

今更のこのこ出てきやがって!↑(後書き)

キヤラ崩壊?

そんなことないです、感覚わすれただけで s (r y

アリユフ（前書き）

ネタ切れしてませんけど気力切れしてましたさーs（ry
そしてキャラ崩壊的な違うような

アリユフ

「スズカよ、服を着てみてはどうかの？」

きらきらふんわりなやつを出して言ってきた。

「は？自分そんなん着ないよ？」

「・・・似合うとおもうのじゃがなあ・・・」

「・・・仕方が無い着てやろう」↑実は着てみたい

ブリズから服を奪い取って一瞬で着替える

かしゃかしゃかしゃ

・・・

「つぶして来い」

『ガアアア！！』

悪は叩きのめした。

「おお、似合うではないか！」

「そうか？」

「うむ。その髪飾りともあつとるしのう」

・・・着てみて思ったけどさ

自分こういうの嫌いだけど合うかしんない。

とりあえずまた一瞬で元に戻る

「次は靴でも・・・」

「靴かー・・・黒いの頼むわ」

「むう・・・」

「まあいいや、とりあえずこの空間楽しんでいきなよー」

「・・・うむ、そうじゃの！・・・で、ここはどういう空間なんじや？」

「この空間はねー・・・なんでもありddあ、でも自分だけね」

「・・・わらわに使い魔とやらを召還してくれんかの！」

ha?

いやまてまて

なにがどうしてそうなった？

「スズカにもおるじゃろ、ほらあの青年になるのが。」

「あー・・・ヴォギーね。」

「そうじゃヴォギーじゃ。わらわもああいう奴が欲しいのじゃ！」

「いやアレは特別だからww」

「かわいいのが欲しいのじゃ」

これだから姫さん系きらいだよ

「わらわもほしいのじ」「あーもううっさいわかっただから黙れ」・・・
むう・・・」

自分はささっと魔方陣を書いて

「はいここのって」

「うむ」

「ブリズ・ミュシリー、この者につかえしものよ、現れろ」

一瞬光って現れるは

「にゃお！」

猫？

だね、うん

「契約するよー、ブリズ自分で自分の血出してその子になめさせて」

「・・・（ぺろっ）・・・これでよいのか？」

「心の中で話し掛けてみてごらん」

ブリズが黙りこんだすきに

自分も盗み聞きモードにはい r (r y

「（やぁ猫さん）」

「（あら、どうも。貴女のことは知ってるわ。使い魔界で有名だもの。）」

「（わー、自分すごいんやね。ところで猫さん名前は？）」

「（私はアリユフよ、よろしくねスズカさん）」

「（こちらこそ。）」

「（・・・猫よ、聞こえるかの？）」

「（貴女が私のマスターね、私はアリユフ、魔法が使えるわ）」

「（アリユフかい名前じゃの）」

・・・盗み聞きはここいらで止めにしよう

自分もちょっと話し掛けてみる

「（ヴォギー、訓練はどうよ）」

「（ああ、トウリーの上達が凄いよ。あ、あと一回りくらい大きくなったかな）」

「（おお。ブリズきてるから一回戻っておいでよ）」

「（うん、わかった）」

ばさばさばさ・・・

「おぬしはだれじゃ？」

「ひどいなあ僕はヴォギーだよ」

「あやつか？姿が違うようだが・・・」

「進化してんだよ。でこっちがトウリー。」

「グギヤあ！」

「やっぱりスズカの仲間は愉快じゃのう」

「スズカ、その子は？」

「にゃーう」

「あ、うん言わなくていいや、ごめん。・・・アリユフっていうんだ、へえ、うん、あーわかるわかる」

ヴォギーとアリユフとトウリーは雑談を始めたようです。

「さてスズカ。」

「ん？」

「付き合っではおらんのか？」

「ぶふおっ!!?・・・ゲホッゴホッ・・・あーびびった。」

「・・・盛大に吹いたの。」

アリユフ（後書き）

うえー。

どうやら行方不明になったようです

―スズカー―

お久しぶりね

作者（誰だお前

スズカに決まってるじゃんお前馬鹿？

作者（あ、戻った うんまあ馬鹿だね

・・・さあ消えた消えた

作者（あー えーと放置さーせん じゃーね

じゃーん（ry

気にしない気にしない

「スズカ」

「ん？」

「わらわも旅へ同行する。反対は認めん。よいな？」

「え、いいかっていわれても反対ダメなんじゃ意味無いじゃん馬鹿？」

「馬鹿とはなんだ。それよりそういうことは行っても良いのじゃな。そうとらえよう」

ブリズ は スズカ の仲間 になった！ てれーん（

うんいや

まあね？

なんだっk（ry

「スズカさん、そろそろ時間のようよ」

喋れるようになったアリユフ

「ぐあおおおう」

一回りサイズがでかくなったトウリー

「いやぁ早いねえ」

いつも通りのヴォギー

とまぁ時間が経つのは早いわけで。

いきなり景色が変わる。

すると後ろでギィイとドアの閉まる音。

「かえってきたぁぁぁー！」

「ん、おかえり」

あらま用意が良い事

ルーク&ムートその他↑

伸びをして斜め左の方向にイスとかなんかいろいろセットしてあったよ

tkどうやってここばれた↑

細かいことは気にしないでおう

「まあとりあえず座りなよ。えーとブリズ姫？だっけ？あれ会ったこと会ったっけ？」

？（・ω・、ノ）ノ

うんまあ

作者（細かいことは気にしないでね 作者自体忘れてるから↑

・・・呆れた

どうやら行方不明になったようです(後書き)

みじけーなおい

問いと答え（前書き）

まあ

うん

あれだ

おひさ！

作者（いやあ氣力が無くて無くて無くてなくt（ry

作者（レイン・レイン！消しちゃったよ、続きが見えなさ過ぎてカ
オスすぎたのでもしよんでいてくださった方がいたのなら大変申し
訳ないです^p^

カオスすぎてどうしようもないものだったがな。

異世界もカオスの連続でどうしようもねx（ry

では・・・^p^

う
ん

問いと答え

ブリズが勝手についてくることになる

まあ

うん

結構経った

省略します（

でさ、自分、最近思い出したんだ

自称神が「（異世界に）行ってくれるなら」とかなんとか言ってたこと

なんで、「行ってくれるなら」？

なんで、頼む言い方？

夜部屋割りを個室に割り当てて一人でいるとき考えていた。

なにかあるんじゃないか？

この世界に。

相変わらず、ルーク、ムート、レイニー、エドモンド、ブリズ、時雨、ファルデ、とそのた使い魔らは元気で。

ここんとは町で依頼をぼちぼち受けながら金稼ぎの、遊びの毎日。

自分は、そういえば勝手にできてたけど、魔法は頭でやればできてました。（
はじめのときなんておもいつきり唱えちゃったモンね！

思い返して恥ずかしい。（

まあ、はじめ（？）の話題に戻るけど

この世界には何かがある。

タイミングよくブリズに呼び出されただけで、何かがある。

「スズカ、いい、世界には何かしら問題を抱えているものだよ、今すぐ解決すればいいっていうもんじゃない。時間をかけて解決しなきゃならないこともあるよ、それだけは、覚えておいてね。」

急にヴォギーが具現化して自分に言った。

自分とヴォギーしかいなく殺風景な宿の部屋にその言葉はよく響き、壁に当たり、自分に返ってきた。

いわれて気づく。

そういえばそのとおりだ、とおもった。

地球でも、どこでもそれは同じだと。

ゆっくり、まだまだ知らないことがあるこの世界を。

見てまわりながら。

自分で気づいて、ルークたちに助けてもらって。

問題を解決していければいいな、と思いました。

はい

そして

朝。

おもったそ寝坊しましたが何か。

念話とかでも起こそうとしてくれてたみたいけど
うん
なんか起きれなかった

反省も後悔もない

起きたの昼すぎだし

お金あるし

まだいいやーって

・・・ごめんなさい

お知らせ

どうもこんばんは、ブライトハート改め梨緒です。

今回お知らせと題させていただきしたのは、活動報告にも書きましたが

1から書き直すことになりました！

ということをお知らせするためです

50件ものお気に入り登録をつけていただけたことを大変嬉しく思います

(というか嬉しいです)

駄文で文章力なんぞあったもんじゃない、

自分で読み返せば読み返すほど羞恥で耐えれなくなるものを読んでいただきありがとうございます

ありがとうございました、

といっても

まだスズカたちの冒険は終わったわけではありません

やり直し、という

はじめの位置に戻ってまた出発するわけですから。

まあ要するに言いたいことは

今後ともよろしくお願いいたします

ということです

私自身も昔よりは精神年齢老けて自重もできるようになったかと思
っていますので・・・

ので・・・まあ

ハメをはずすことがあるかと思われませんが

（絶対あるから（え）

幼いなー、と、いった目で見えていただければ幸いです

今一度書かせていただきますが

スズカの冒険は終わったわけではありません

再出発です

そして追記ですがまた少し違うストーリーにして執筆させていただ

こうと考えています

私なりにがんばりますので、生暖かい目で見てくだされば幸いです。

また、再出発の地点がここに追いつきましたらこちらは消させていただきますことをお許しく下さい。

ここまで読んでいただきありがとうございました

梨緒

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5415k/>

異世界旅行へ

2011年11月25日20時58分発行